處で、件の三疊と次の六疊と云ふのが、私にも、お米さん……お米さんにも、祖父さん、祖母さんが、老後を送つて鼓の稽古をした處だ、因緣淺からずなんだね。」

「あゝ、然うだつたね。」

「炒米は無かつたが、祖母さんが、其處へお土產の、御存じの宿場の(あんころ餅)を持つて見えた。嬉しかつたぜ、私あ。」

「田舍だわね。此頃ぢや彼處の停車場へ賣りに出るんだよ。……えゝ、あんころ餅や、あんころ餅……なんてね。」

お米は風情も若やいだ。

「うまいや、お米さんは。」松吉はハタと手を拍つ。

お米は眞面目で、

「でも、餘りうまくはないよ。」

「何しろ、待切つて居たんだもの、叔母さんの顏を見りや、あんころ餅。」

「あら、叔母さんの顏があんころ餅、何を云ふのさ、可哀相に、阿母だつて。」

「いや、そんな意味ぢやない、はゝゝ。」

「ほゝゝ。」

向うからお悅が、「大層お話が持てるわね。」

十

「お組姉さんが、飯事の世帶崩しと云つた、美しい働振さ。自分で下へ行つて、茶を入れて來てくれます。澁茶恰も玉露の如し、五郎八茶碗も紅猪口さね。

暗い家中、潑と咲いた薄紅梅で、急に母さんが蘇生つたやうでもあるし、新しく眞個の姉が出來た氣がする、……どんな御本を學校で、と問はれて、英語の讀本を出して、

This boy has a new kite.——

と顯れた時は、聊か賞められたかつた、蓋し得意だつたね。——

誰だい、其處で嘲笑ふのは。憚りながらお次に控へた女人たち誰も御存じあるまい。二階に飲んでる篤さんも知らなければ、叔父貴は勿論、濱に居てもお米さんだつて分らなからう。其が今に於て以てです。

謂ふ心は(此の兒は新しい凧を持つ。)さね。」

と昂然として寬々と打視遣ると、こはいかに、

「私も新しい鮹を持つ……」と酢鮹をひよい、と箸に挾んで、食卓の向うから、遣ろか、遣ろかを

して見せるのは、あらう事か、松の左衛門、お光である。幕のうちを拔いたのを、突崩して茶漬つて居た。

まはりを圍んで、あとの三人は、煮染ものを鍋から雜炊。

噫、嘆かはしい、時代を何と心得る。

「畜生め、其の勢で勉强して、すら〳〵と英語が出來ると、汝如きは目通りかなはん！　トルストイ爺さんの媒妁人でロダンの姪でも娶らうものを。私も其のくらゐツか知らないんだから仕方がない。が、實際家風には合ひませんな。……當館も怪しからない、此の光景は何事です。まるで、ひけ過ぎ、と云ふ形だ。叔父貴は嘸、苦笑してるだらうなあ。……幕の內は尙ほ恕すべし、酢鮹に至つては惡辣だね。」

「だつて、叔父さんの遺言だから可いぢやないか、ねえ、お光さん。」

と、お常は茶碗越にお光を覗いて、

「自分がね、卑怯なんだよ。……（何、酢鮹を啖へねえ、不孝な野郎だ、勘當ものだぜ。）ツて父に言はれたんです、それで口惜いもんだからね。」

「當前さ、鮹は海の化ものである。」

お悅が、小兒を寢かして身輕に成つてて、

「亭主は內の宿六である。」

「打棄つとけ。皆、あゝ云ふ了簡だから江戸兒は滅びるんです。——

さあ、それ處ぢやないよ。此方はお組さんで上ずツて炬燵で凧さね、蟻が手を持つ足を持つ騷ぎだつたんだ。

しかし悄氣たね、晩飯の膳と成ると、內ぢや工面が惡くつてね、鰈の煮たのばツかりさ。此ばかしの……いや、魚の尺は取らないもんだつてね、小さなのを、それも半分宛、お組さんの方へは頭をつけて有つたつけ。（男は此方を食べるものよ。）で、お組さんが尾と取かへてくんなすつた。小兒心でも悲しかつた。」

松吉は、つい、ほろりとした。ト聲高に、

「あゝ、しかし、甘味かつた。あの鰈はうまいね、（口細）と云ふ、妙な名さ……東京の何だらう、お米さん、知つてるかい。」

「私は覺えた、（眞子）の事だわ。」

「あゝ、眞子かい、成程口が小さいね。然う言や、あの、目の大きな、一寸味の輕い。」

「目張でなし……」

「否、もつと小さな、一頭づけにするんぢやない。澤山一齊に煮るんだ。うまかつたね、あれは、

何とか云ふ、然う〳〵（はちめ）……はちめ。あれは、何うも東京に無いね。」
「ありません。」
「何だらう。」
「ぐじの子どもですよ。」
「あゝ、甘鯛の子ですか。」
向うから、
「魴鮄の孫だわ。」
「金魚の曾孫よ。」
「細螺でも彈きませうかね。」
「幼稚園々々。」
「お隣は小學校。」
「唯今、讀本の時間でございい。」
下婢が食卓臺を下げに出て居て、くす〳〵と笑ふ。
「構ふな〳〵。意地で遣らう……お米さん。」
「ほゝゝゝ、私も、もう些と色氣のある方が可い、餘り他愛がない。」

お常が並々と番茶を注いで、
「お米さん、睡く成るでせう。」
「否、そりや有りませんわ。」
「まあさ。（はちめ）の次手だから、……（はね）と云ふものがあつたね。」
「嵩々。」と、お光が交ぜる。
「眞個ね、此方に飛魚があるけれど。（はね）は鱸の子なんですよ。」とお米が云つた。
「川鱚は？」
「沙魚の事。」
「鯖を賣るのに、三番叟、鯖や三番叟ッて呼んだつけなあ。」
松吉は、ごろりと横に成る。

十一

「夏は門天心太。——諸國同じやうな金魚賣に能く似た節だね。秋に成ると、松蟲や、鈴蟲と、莫蓙を着たのが籠を提げて賣りに來る、……山ン中から出て來る男だが、皆いゝ聲で、あれを聞くと涼しく成つたつけね。田舍娘が柴草を背負つて、（こつさいりんせんかあ。）——次手に初茸—

ーを持つて來る。あの茸を(まつみゝ)と云つた、松の耳を考へたね。……朝露にしつとりとしたものだつた。が、京だと花賣と云ふ處を、寂しいものだね。そろ〳〵大根のおろ抜きを、(つまみ菜)と呼んで來て、それが(そろへ菜)と成る、もみ菜かね。やがて(束ね菜)と來ると霜です。……大根引には霙が降る。……鮒や鮒には黒雲から霰がたばしる、鰤と鯨で大雪だ。

其の雪の下で、父も母も亡く成つた。思つても震へますぜ。……寂しいなあ。

三月末までは人間も穴熊だね。

鯖が走つて、些と春めいて來るんだつけ。……あの、(鰯やあ刺網。)と云ふので、ぽか〳〵と暖かく成るんだ。お米さん……もの賣の聲は其の土地其の土地、山や川が自分で口を利くやうなものだ。が、然うは思はない?」と横に成つた胸を火鉢に寄せる。

「然うね。」

「外のものは何と云つて賣つたらう。烏賊、烏賊、をかしいな、鯉、鯰、鮪々。

「松さん、鮪は(によろりやによろり)と賣るのさ、蛇が出たやうだ。」とお常が言つた。

お光がぎよつとして、

「あゝ、御免なさい、姉さん。」

「樣を見ろ。」

松吉は大に氣勢を直して、

「皆、何て賣つたらうね。」

「さあね、矢張り名を言ふのよ、改つてはをかしいけれど。」

「魴鮄々々、鱶々。」と松吉も、つい、くす〳〵と笑ふ。

「鱚々、鯛々、鮪々々。」

とお悅が、齒をくひしめて焦つたがると、

「こちや、堪らない。」と聲を合せて、お光と二人が、鍋と皿を攫んで出た。臺所でキヤツ〳〵と云ふ。

「仕やうがないねえ。」

さすがにお常が呟いたのである。

「些と貴女が取締を嚴重になさい。あゝ云ふ徒が徒黨を組むと花火線香を燃し兼ねませんよ!家庭亂脈です。第一、貴女からして先棒を振るんだもの……」

「だつて、お前さん、松蟲あたりから、お菜賣處は、しんみりと成つたんだのに、鯉鯰鮪で打壞した所へ、何です、魴鮄々々、鱶々は。抽な太郎冠者の狂言ぢやないか。私が先棒で撲つんなら、お前さんのは、天秤で擽るんだね。」

「敵はない。」
「和睦をなさいまし。お常さん、貴女も此方へ、お炬燵は如何です。」
「否、のぼせるほどなの。……それに、故郷の炬燵で、お組さんと二人切の處らしいから、お前さんと然うやつて置いて聞く方が可い。……それにね、お米さん。」
「はい。」
「お前さんの姉さんは、東京で生れたんでね、乳呑兒を抱いて、叔母さん(お米の母)が叔父さん(お米の父)や、松さんの其の二階に居なすつたと云ふ、御兩親、私には祖父母さ、其人たちと連立つて、貴國へ行つたんだからね。まあ、餘計馴染さね、私も氣に成るから聞きたいよ。一昨年か見えた時は、何の話もする間はなかつた。……
一體、お組さんは、お前さんよりか、眞個の江戸うまれだからね。」
「こりや、寢ころんでなんぞ居られない。」
「其のかはり、さあ熱いのを、……到來の辨松がある、上げようか。」
いや、いとこ中の最年輩、しめつ、ゆるめつ、鼓も打てる。
「お米さん、飲まして頂戴。」

十二

「其の晩は寢ました。枕頭へ、母の記念と云ふ草双紙を擴げたまゝで、……」
「時代鑑、藤浪由緣之丞でしたわね。」とお米が振向いてお常に云つた。
「いや、此方こそ柄は惡いが、島田に結つた蝶々の羽に包まれたに違ひない。」
「今夜は其の型はお預りかい。」とお常が云ふ。
「謹んで預ります。……しみ〴〵と談話があつてね。大事な若い小母さんだつたつて、私の母の事を。で、枕頭の繪のやうな、友染で、すらりと拔出して、小さな行李から、母が送つた手紙を出して見せましたよ。……細い假名でかいてある。松吉が、いたづらでこまり候などと讀んで、莞爾して私の頰邊を突いた。飲みたいやうな乳も見えて。
いや止さう、……此の年で云ふと可笑いから。
其處で、翌日は、お組さんが手傳つて、雛を飾らう、と云ふ段に成ると、顏が雪洞の灯で見るやうに、ちら〳〵として、お白酒を飲んで、(眞個の姉妹に成らうねえ。)(あゝ。)
處がです。翌朝、友だちが三人で芝居を誘ひに來た。……驕らうと云ふんだ。尤も大入場處で、田舍は辨當持參だがね。

亡くなつた團藏が尙だ九藏の頃で、小屋はじまつて以來と云ふ、初日に餘り大入で、人蒸氣のために、小兒が三人卒倒をしたつて騷動さ、非常な景氣でね。たしか光秀と、二番目が唐人飴だつたと思ふ。……時節も鯖や三番叟が午前十時のはじまりで、そこら中、初東風に幟が煽つて居ようと云ふのさ。

でもね、私ほ行きたくなかつた。……蟲が知らしたんだね、云つて見りや。

是非出ろ、と云ふ、不厭だ、と云ふ。……表二階で友だちと揉んでると、（松ちやん〳〵。）と奥の部屋からお組さんが呼んだ。が、母さんが居るやうなんです。

私も見たいが、戸外へは當分出られない。叔母さんも大好だつた、お前さんが見て來れば、私たちも見物するやうな氣がするから是非おいでと、小遣を渡す、其の紙入れの入れてあつたのが、私の机の抽斗さ。思出しても口惜いよ。

襟卷を貸してくれたよ。お組さんが自分の縮緬の。……得意で出掛けた。——可厭な奴だ。

爪も立たない。下座の下と花道まで詰つた中で、內には、お尋ねものをかくまつた、と云ふ美しい山を背負つてる兒だから、芝居も半分夢中さね。

朝のうち欺した天氣で、歸りの夜の寒さッたら。……間に川を一つ越すんだつけ、大しても無いんだけれども、早く歸らうばかりで路は遠し、橋を渡る時分から、山は黑雲、今にも降りさう。

襟卷をひし〳〵と、眞暗三寶で飛んで歸る、と格子戸を開けるなり悚然とした。舞臺の變りやうの激しい事。

灰のやうな洋燈の影に、父は腕組をして差俯向いたり、祖母は冷く堅つて居る、と見ると引裂いたやうに障子が破れて棧が折れた。——お組姉さんは、其處へ摑まつて泣いたんださうだ。——（鬼が來てなう、姉さんを摑んで行つたよ。）と祖母さん溜息です。（嘘だ、嘘だ、嘘だ。）ツて狂人のやうに二階へ上つて、時代鑑の綴絲の赤いのが斷れたんだの、箱を出した雛の顏の、まだ吉野紙のまゝなのを見た時の心持、……

未練らしく手を入れて、盲人のやうに搜つて見た、炬燵の中の、ほんのりと、梅の薫の脈を打つのが、氷よりか冷くつて、ひとりでに涙が出た。

十三

「何でも一歩違ひだつたさうだ。夜食が濟むと、お組さんは、祖母さんと話をしながら、父の仕事の前に坐つて、時計を見ちや、松ちやんはもう歸りさうなものだ、歸りさうなものだと云つてたつて。あゝ、炬燵に火がある。埋けて置いて臺所を手傳ひますと、二階へ上つて間も無かつた。格子戸がすいと開く、……一寸お組さんが門へ出たやうだつた。……頓て風が通るやうに、ふ

つと二階へ上つた跫音がする、と思ふと、どゞゞゞと鳴つて、二階から摑んで降りた。痩せこけた大の男の蒼い顔して目の血走つたのが、お組さんのたぶさを取つて引立てる。

父も祖母も飛着いた。

（俺は近藏や、此の亭主や、留めだてすると爲に成らへん。）

たとひ何でも、義理の叔父が預つた大切な姪と、皆まで言はせず、勾引め、密夫め。勾引は紐も着けよう、密夫は近殿血迷ひましたな。

父の胸倉をうんと締めて、祖母さんを、突倒した。

叔父さん、死んでお詫びを、と云ふ時、それでも、離れまいとつかまつた障子ぐるみ突外して、引摺り出すと、鬢の毛を搔きながら、扱帶をしつかり握られたなり、跣足で悄然と引かれたつてね、戸外には二三人、仲間の漢が、うそ〳〵と格子に集つて居たさうな。

町内、町中、出合ひ立合ひ、と云ふ處だがね。親類うちの内證事、ひつそりとして置いて、何にしろ、確と預つたお組さんを背負引いて行かれては、叔母さんに濟まぬと成つた。第一、此の趣、御注進を取急いで其の上での相談だ。

と、成ると、叔母さんは、其の時分、お米さん、お前さんが湊町の大分限、濱名屋長九郎の愛妾、卽ち米の方で。」

「澤山。」

「叔母さんは其處に引取られて居ようと云ふんだ。湊は市から八九里ある。こゝを早打が我輩の役さね。——覺悟をおし、拙者これから素敵に強く成るんだよ。

引被いだ胡蝶の羽を飜然と脫ぐと、沒羽箭字は毛野さ。武藝一通りの心得はあるし、濟まん事だが、其の頃、自由黨で縣に鳴つた年嵩の壯士の知己かぶれに政談演說を聞き嚙つて、辯舌つべこべと爽だ。十六歲にして一刀流の初段と云ふ朋輩があつて、此奴が樣子を漏聞くと、白磨の十手を貸して。（後を取るな、汝、松吉。）と來ました。切結ぶ太刀の下こそ地獄なれ、身を棄ててこそ、何とか云ふ當流極意の歌を敎へて、御身の劍短くば、一步を進めて尺とせよ、（行け！）（心得た。）と云ふ勢なんだよ。

お案じあるな父上、敵何百人ありとても、誓つて、お組さんを取戻し、扱帶で肩に引背負つて馬を飛ばせて歸ります、と趙子雲の穴の如く、火鉢の灰を立てながら、件の白磨を、カン〳〵と鐵瓶で叩いて云ふと、すぐに、其の十手は取上げられた。」

お常が、「串戲ぢやないよ。」

「否、眞個なんですよ。……此の松も一生懸命だつたんです、可哀相に、」とお米が云ふ。

「笑ひごとぢやありません。其處で、土產に持つて行く落雁と、がた車に相乘、……だがね、菓

子の名も寒いやね。

三里も五里も、北國街道、あの松並木の吹拔けの寒さつたら無かつたぜ。……ぴゆう〳〵と吹曝しで、車の泥除が、がた〳〵と搖ぶれると、大川を越す時なんざ——橘南谿と云ふ人の、吹雪に彼處を越えた紀行があります、——鎧合羽、腰卷合羽、袖合羽と三重に着込んで、さて河原へ出ると、風の烈しき事、劍の如く、雪は氷りて矢の如く、下より上に逆になつて、三重の合羽、立處に、紐切れ袖破れて、不動尊の火炎の如く頭より上に舞ひ上つた、と云ふ。……うまいものだけれども、堪らなかつたらうね。尤も此のお醫者樣は目をまはして倒れたんだぜ。

雪の時ぢや堪りません。

此方は雪は溶けたけれども、白山颪のからつ吹で、卷直しても、締替へても、あの襟卷が、めらめら解けて、酷いもんだね、片端が、棒のやうに、ぴゆうとなぐれて、横に突立つ。……咽喉が、ぐいとしまつたんです。苦しいやうに。

唯、其の人のだと思ふにつけて、お組さんが、倒に引釣されて、責め苛まれてでも居るらしい。これが、前兆のやうに思つて、寒いのと、悲しいので蒼く成つて、いや、意氣地は無い、山賊退治の武者修行、めそ〳〵と泣いたもんです。」

「お前さん。だらしが無いからさ。其の襟卷を結んだら何う？」

「それがね、昨日お組さんは結ばないで、柔りと卷いてくれたもんだから、何うもね、矢張り其の通りにしなきや成らないやうに思つたからさね。」

「成程、其の氣ぢや泣いたらう、……嘘のやうだ。……でも其の頃は可愛かつたらうね。」

十四

處をお米が引取つた。

「えゝ。それや可愛うござんしたよ。こんなぢやありません。圓々ちい顏をしてね、……ですが、其の時分私も生意氣盛ですし、唯、逢へば從弟か、然うか、と思ふ……憎くは無いと云ふだけでしたが、姉のことで、わざ〳〵城下から來てくれて。——濟まなかつたんですよ、——田舍の金持は上を見ぬ鷲で、傲慢無法なんですから、其の時の私の旦那が、無理に此の兒をつかまへましてね。」

松吉は憮然として、

「あゝ、此の兒とおいでなすつたか。」

話すお米は一向平氣で、

「不調法、些とも出來ないと云ふのに、無理無體に謠をうたはせられて、赤い顏をしながら、拙

な謠をうたつた時は、私あ。」
「拙な……拙な謠とは何です、失禮な！」
「だつて、それに違ひないもの、……知らぬが定ぢやありませんか。歷乎とした學生さんを。でも、勿體なかつたね。松さんだつて、私が本妻で、ちやんとしたものだつたら、立派にお斷んなすつたでせう。世話に成つてる旦那の我儘、口惜いが怒らしちや、私たち母娘のために成るまい、と氣が怯けての斟酌で、緋の膝に、きちんと兩手を支いたんでせう。」
お常は一寸廊下の方を。
「可い鹽梅、細君には聞かせられないね。私が附いてる。夫の仇、とか何とか云つて、年月の見境も無しに、今から汽車へ乘り兼ねないから。」
「眞個に濟まないと思ひましたわ。」
「然う御愍懃ぢや、恐入ります。」
「何を謠つたのさ。」
「小謠さ。うろ覺えの、……我ながら、羅生門へ辻占を賣りに出たと思つたね。情ない聲で（たのみあるなかの酒宴かな。）です。蓋し氣轉は可いね。酒宴の場だから。……講釋だと、さてこれより致して萱野松吉、割前の牛屋の二階に於て、美音の喇叭節を唄ひ、出番の姐さんを斬つて落

す。と云ふのが明晩の前講と成ります。」
「之も細君には聞かせられまいねえ。」
「否、串戲にして居るから、私も立瀨があるんですが。しんみりと遣られて御覽なさい。……私は今だと些と危い。其の頃は姉と違つて、泣蟲が大嫌ひでしたから、然ほどにも無かつたけれど。——一所に坐つて居た母は横を向いて、ほろりと成つてさ、……姉がお妾だと唯ぢや納まらなかつたでせうよ。金を笠に被た、百姓は染々癪なもんですわ。」
「でも、大歡迎ぢやないのかい、松さんのためにお酒もり。」
「否、はじまつて居た處へ、此の兒が草鞋を脫いだんですよ。」
「あゝ、お節句だつけ。」
「其のお節句がね、大い姉さん、……雛ぢやありません、床の間に飾つたのが千兩箱三つ。昔のだよ。」
「尤も、下の二箱は貸金の證書、地券、そんなものを入れたんですが、一箱だけは、でも一杯はなかつたけれど、小判だの、ざくだの、取交ぜて藏つてあるのを、旦が自慢で出すんです。私も勝手にさしときました。お雛さまなんざ面倒でしたのね。」
「此のお米の方、圓髷です。……不心得千萬な、薄化粧で齒を染めた半元服さ、小紋の紋着をぞ

ろりと裾を曳いて、すら〳〵もんです。旦が、ぐにやりと、膝に凭かゝりながら、銀杯、お極りだね。これを上座に、内宴と云ふので、番頭手代、野幇間半分の町内が二三人か十五六人、袴もあれば前掛もあつた。ずらりと吸もの膳を並べて、まだ宵の口で、眞四角、菱形なぞに極つて居たね、就中、座敷の眞中の廣蓋に大な鯛が反つてましたぜ。」

十五

「（さあ、何でも謠へ……苟くも上杉政忠（叔父の名）の甥が謠一番知らないと云ふ法があるかい。第一此處に居るお米の父、祖父、ともに相傳名譽の鼓の家だ、）……」

松吉は偶と口をつぐんで、もの思ふらしく屏風の繪の菖蒲を見た。翡翠は、消えもせず。

「濱名屋長九郎居丈高です。……（人は色に狂ふと思ふ。俺は名家の血統を重んずる。其が爲であるからして、ぢやからに、敢て妾てかけには爲て置かん。既に本妻を離別に及んで、やがては、晴の披露もする筈、月に三度は遙に城下から師匠を呼んで、これにも鼓を習はせる。）……」

「大きにお世話さね。」

お米は俯向きざまに、ふ、ふ、と笑つた。

「其の俺が志に對しても謠うてくれ、いやさ、謠はせずには置かんぞ。あゝん、何うぢや悴。

と怒鳴つた。賴光、しかたなし泣聲です。昨夜、いや其前の晩の、同じ刻限を考へて御覽なさいな。お組さんと内の炬燵で草双紙。私は母が戀しかつた、お組さんが可懷しかつた。

其のお組さんが、と思ふと——（とに角、身體は無事ですよ、）と叔母さんが請合つたんです。

御前お暇を賜つて……叔母さんに連れられて隱居所へ引退つてから。……叔母さんの住つた隱居所は、濱長の角屋敷を裏へ廻つて、前が田圃で、其處に別に木戸のついた家だつたね。本宅とは長い土間續きに往交ひをするやうに成つて居る。

六疊の住居の、床の傍に板戸を開ける、と押入かと思ふのが、すぐに山路のやうな土間だつけ。こゝを向うから、ガチリと大な錠を下す段取だつた。時刻過ぎには、親の住居でも一人ぢや往きかよひをさせないと云ふ、事も嚴重な要害さね。鍵をかけたる御寵愛。お常姉さん。——此の人は浮氣だつた。……」

お常は有繋に屹と視た。

「何だね、松さん。」

お米は眉も仲びやかに、澄んだ瞳も動かさない。

「可いんですよ、叔父さんの前で懺悔をします。」

「で、叔母さんがね、本家には沸いてるが、女中がついて却つて窮屈だらうから、町の湯へ行つ

て、暖つて來らつしやい、其のうち、甘味いものを支度して置く、……」
「姉さん一寸。」
と臺所を出てお光が呼んだ。
「あいよ。」とお常は、聞きはぐして立つて出たが、玄關で聲がした。用のある客の歸るのが二階から下りたと見える。
「旅も大袈裟かも知れないけれども、知らない土地の町湯は心細いものですぜ、狹いし、暗いし、小兒だし、夜と來て、込んでたらう。町内の若い衆、職人と云つた處が、ごしや〳〵裸體さ、海豚の中へ紛れ込んだ小鮒と云うた形で、あッぷあッぷ、顏の飛沫を拂つて居ました。
私は、妙な事を聞いたんだ。其のね、海豚徒が、濱長の裏田圃、あの隱居所の前には狸が出る。……芥子玉の手拭の頰被りをしたんだが、月夜に薄ら靑く立つて居て、腰から下が暗いやうだ。いや暗いんぢやない、貝の口に結んだ帶まで見える。身體は半分で、腰から下は、まるで無い。見たか。
見た段か、俺は悚然とした、と濡手拭を頭に被りながら頰被りの話をした若い衆が、づぶりと湯につかつた。……
お米さん、歸りがけに、あの暗い露地を入つて、前の刈田に硝子を張つたやうな寒い月を見た

時は可恐かつたよ。」
「然う、松さんは、可恐かつたの、可愛いわね、あの頃そんな評判をしたものかね。」
「眞個なのかい。」
「然うね。」

十六

お米は對手を胸へ引込むやうに、帶を折つて然う云つた。
「ひよつとかすると町内の人たちに、そんな姿が見えたかも知れないの。……私は信心をして居たんだから。」
「信心？……狸をかい。」
「否、狐なのよ。」
「あゝ稻荷樣か、芥子玉の手拭で頰被、月夜に薄りと立つなんざ、飛んだ意氣な稻荷樣だね。」
「まあ、お話なさい。」
と片頰笑で、
「それから何うしたんだつけ、あの晩は？」

「翌日は早速叔母さんが連立つて近藏の許へ行つて、そして、お組さんを取返さう、とそんな相談を極めながら、御馳走を濟まして、隱居所の、あの炬燵へ入ると、氣が弛んだのと疲勞が出たので、臺所で叔母さんが寂しく皿小鉢を洗ふ音を聞きながら、櫓に凭れて、うと〳〵したのさ。

すると、母屋の方の遠くから、からころ〳〵からころと、それが、段々近く成る。夢から、胸倉を取つて、引戻されたやうに思つて、きよとんとして顏を上げると、其の、それ、床の間の傍の押入の扉だと思つたのが一枚、逆に向うへすツと開いて、氣早な米さん、お前さんは、最う友染の美しいのを捌いて、白足袋を疊へ掛けて居た。する〳〵と裳を引いて突然、背後へ廻ると、何か定紋附の風呂敷包をバタリと置いて、ふはりと膝へ乘るやうに、背中を一つトンと叩くと、(松ちやん、もう寢るの。)と云つた……芬といふ薫がしたつけ。」

お米は吸ひかけた煙草の煙を、白い掌でひら〳〵と煽ぐ、……霞を摑んだ木蓮の影。

松吉は瞬きして、

「何をするんだい、お米さん。」

「魔法の目潰、一寸眩しい處だからね。でも、邪險に覺えて居るぢやないか。」

「少いものには毒ですな。」

誰も居ないから、吸つけ煙草。其のまゝ取つて、然も馴染らしく横ずわりに煙管を拂いた。

「女珍しい最中だからね。尤も唯今とても右同斷でござんすが。」

「はい、はい。」

「下婢が扉の其の穴に立つて、此奴が手に、鐵網張の手つきの雪洞で、お供と云ふ寸法でしたな。……風呂敷は重箱で、上が鷄卵燒、下が口取。母屋から御心入、お持たせに相成つたんです。最う御飯が濟んだの、やつと彼方はおひけに成つたが、間に合はなかつたわね。寢酒を飲むんだと可いけれど、話せないよ、お目覺に食べて頂戴。で、氣が疾いや、すぐに、すつと土間へ拔ける、と退つた雪洞で一度消えたのが、くつきりと襟脚を見せて、後姿で立つたと思ふと、下女が屈腰で、お前さんの帶を隱して、(お休み。)と、がらん、がちりと、錠だ。引つこ拔いた鍵をぐいと、握つたらしかつた。それなり、からころ〳〵さね。

私の魂は、壁を拔けて、土間へちら〳〵と映つて行く灯の影のやうに、ふは〳〵とついて行つたが、何處かで、ふつと消えた時、思はず、ハツと炬燵に歸ると、急に味氣ない寂しい氣がして、何となく情なかつた。(あの米も、ゆつくり話をしたいだらうけれど、何しろ主人がね御覽の通り……母娘の中でも錠を下して鍵を握つて寢るんだから。松さんも男と思ふと、從姉弟の見境もないのだよ。——情ないぢやないか。)と叔母さんが遣瀨ない顏をされた。

お組さんの事も一所に胸へ突上げて、次第も分らずに涙が出たよ。」

「難有う。」
松吉は煙管を落した。

十七

「お酌を何うぞ。……あゝ〳〵、此がお組さんだつたなら、こんな話をして御覽、嘘にもほろりと成る處だ。禮を云つて濟まして居ら。惡黨め。」
「もし、」
お米は、後へ胸を開くと銚子を疊へすつと引いて、
「惡黨次手に伺ひますがね、松さん、怪我にも、然う思つたくらゐで居て、何故、腕を投出して他愛なく寢て居たのさ。」
「寢て居た、何時さ。」
「あの晩よう。」
「へい。」
「あゝ云ふ時、別れ際が素氣ないのは、やがて引返して、忍んで逢ひに來るんだとお思ひなさいよ。……今ぢや知つておいでだらうがね。」

「否、おいでなさらない！」
「あれは、姉(お組)だとね、……旦那が喧しくつて、然うしちや居られないと思ひながら、些との間も餘情を惜しがつて、是非蒲鉾の一つも銜へさせて、これを見て、中腰か何かで炬燵の中へ手だけも入れないぢや納まりません。……下婢に可厭な顏をされて、焦躁たがる所が落さ。そのかはり、引返しちや來やしない。」
「だつてお米さんだつて。」
「否、私は參りましたさ。」
「錠が下りてる一件ぢやないか。」
「何の、そんなもの！　一所に居る人が持つてる鍵で、自分の內側におろしとく錠ぢやないか。一晩に三度ぐらゐ、何時なりとも勝手なものです。まだ、お前さん、其の上に、裏露地へ姿を顯し、頰被をした狐が居た頃ぢやないの、市で藝妓をして居た時から、影のやうについて歩行いて居たんだわ。引窓からだつて出入りは自由に出來る。ほゝゝ。」
松吉は顏を視た。
「あの晩もね、どうせ金子と寢る身體だ、ふてて遣れ、と然う思つて、小判が敷いて寢て見たいさ。ね。可いかね。然う云つて駄々を捏ねて、右の床の間の千兩箱を直接に敷蒲團の上に並べた

わ。（山吹の里ですわね。旦那、蓑を貸しませう。）か、何かで、袖の下にくるめると、片手に鍵は最う拔いた。」

お米は煙管の吸口で、乳の膨らむまで、胸前をぐいと壓して、

「手輕なもんぢや無いかねえ。」と、却つて偶と、急に嘆息をしたのであつた。

「お待ちよ。……私は夢だ、と思つた。が、其ぢや事實だつたんだ。眞夜中とも思ふ頃に、あの、眞暗な扉を透いて、お米さんの姿が朦朧と立つたのが見えた。影繪のやうにね。」

先刻、心に刻んだのが、夢に消えないんだと思つたつけ。然う云へば、却つて其の時の方が黑繻子の襟を掛けた、寢衣の縞もよく分る……ぞろりと片手に褄を取つた、朱鷺色に、白で獨鈷入の伊達卷をして居たんだらう、同じ雪洞を、ト眉の處へ。

唯、見た時、唇が笹色に蒼く光つたつけ、莞爾したと思ふと、溶けるやうに緋色に見えた。寂しいやうな、嬉しいやうな、可懷いやうな、凄いやうな、冷い、暖い、心持がしたと思ふと、何處ともなく拍子木の音が、夜を刻んで、幽に空を廻るらしく、氷つた波を、櫓が辷るやうに聞えたつけな。」

「あゝ、其の拍子木が、頰被の、それが矢張り業だつたのさ。有馬のお天守ぢやないけれど、夜廻りの火の番が持つてゐるのを金の爪で引搔いといちや、猫だか、其の狐だか、攫つてね、逢へ

ない晩も心ゆかし、私はそれを聞いて樂んで居るんだわ。聞いてる方は洒落てるけれど、夜ぴて、お妾の塀のまはりを、カチ〳〵廻る方は大儀だね。第一寒いわね、あゝ寒い。」

と、かくても着崩れぬ紋着の肩を婀娜に搖つて、お米は、袖口を搔卷につゝと插した。

十八

此の炬燵には、隅を取つて、二人斜めに對ひ向つた。

お米は肱枕した松吉の横顏を差覗いて、

「十八の年も九の年も、一生に一度しかないんだもの。……小判を敷いた山吹の里には田舍大名を案山子に倒して、頰被をした狐の間夫が、月夜を廻る拍子木の音を聞きながら、從弟の松ちやんと寢て見ようか、鼓は打てなくつても、お役者の家に生れた私、それも一藝だ、と雪洞で、通口から熟と顏を見て立つたつけが、可愛らしさが小兒だから、あゝ、詰らない、第一、今夜あたり、すや〳〵寢てるやうぢや、と、然う思つて、……」

お米は細い指で、胸を彈いて、

「此胸と一所に、ふつと燈を消したのよ。……をかしいのはね、丁ど其の時さ。右の頰被が、お前さん、裏木戸の許へ來て、自棄にカチ〳〵遣つてたぢやないの。——私は口へ袖を當てて一人

で、クス〳〵可笑かつた。」
「あの、眞赤に見えた、小さな赤い唇だ。あゝ、恐るべし、傍に寢て居た叔母さんは、私のためにや、觀音樣だ。」
「路傍の。」
「勿體ない。」
「だつて、其の觀音樣は目を開いても、口をお利きなすつても、私の生命に別條はないんだもの、日那が短銃で、間夫が出刃庖丁、そんなものが可恐くつて、晝寢も出來ますかつて、お前さん。對手が强けりや强いだけ、婦にはあつかひ可いわ。」
「怪しからんな、ぢや、もう私なんかお手玉のつもりで居たんだ。」
「然ううまく行くものかつて、今ぢや……其の料簡なんでせう。何有、あの時分で御覽なさいな、嬰兒ぢやないか。文句を云や、お乳か何かで壓へつ了ふ！」
「芝居で遣る猿轡だ。」
「えゝ、男がするから猿轡。女が用るれば情の襟卷……ね。」と莞爾。
松吉は半ば起きた。
「お組姉さんは何もそんな。……又、私だつて何もそんな。」

「だから密として置いて上げたから可いぢやありませんか。何にしろ、松ちやんは、女が戀しく成つたんだし、私たちは可愛かつたんだよ。……勿論今は憎らしい。」
「御挨拶、……恐入ります。」と松吉はぐたりと成る。
「大層、恐入つてるぢやないか。武者修行さん、何うおしだ。」
お常が炭取を片手にずつと來た。
「然う弱つてる樣子ぢや、お組さんが案じられるね。うまく助け出す事が出來たのかい。」
「處が不可ません。」
「然うだらう。」
「まあ、お聞きなさい。皆で一々籠めないで。
さあ、翌日は叔母さんと二人で俥を並べて、街道を引返した。……お組さんの住んでる龍野の溫泉と云ふのは、町から湊へ行く途中、昨日通つた大川の岸を白山の方へ入つた處でね。一體だと來掛けに其處で近藏の方を一睨み、車上で睨まうと云ふ處だつたけれど、……例の襟卷が、白山颪で海の方に吹ながれなんだらう、棒に成つて、山の方へ振向いて御覽なさい、ひとりでに首が締る。……
横を向いて通つたんです。」

「細いわね。」
「魴鮒々々……何だつけ……鱸々。」と炭を繼ぐのがお常さん。

十九

「車が揃つて、がら〳〵ッと溫泉へ乘込むと、近藏の家を向うに見て、若衆母衣を下して、と引被つたのは凄いでせう。花道を深編笠で、舞臺で、ぱつと脫いで正面を切る奴か。

一昨日演劇を見た當座だ。此から一立廻りはじまらうかつて處なんだからね。

近藏の前を駈拔ける時は、黑雲に乘つた勢でしたぜ。——一度溫泉宿へ着いた、が、湯にも入らないで、すぐに使を出して、お組さんに一寸おいでさ。

叔母さんと顏を見合つて固唾を呑んで控へたが、はじめから、こりや容易に出られさうもなし、又近藏が寄越しさうも無いこつたね。返事は當らず觸らずに、いづれ後程と云ふのが、日暮方に成つた。

最う、七分の弱點だね、此方から二人で、てく〳〵と出向いて行つたもんです。

——其の時の事を云ふんだよ。私が近藏に打たれたらうつて、お米さんの云ふのは。——勿論、自由黨で、口を利きました。大に論判したね、談じたもんです。……(あの時は憎らしかつた、

顏を見て、默つて絶りついてくれりや、其の勢で、もう一度駈出したものを。)つて後でお組さんが然う云つたがね。

馬鹿にしてる、と思つたけれども、考へて見りや其が人情。

此方は、父を打たれてるし、祖母は突倒されてる。夫婦喧嘩だ、と思はずに、山賊に奪取られた大事な姉さん、と云ふ氣だから、近藏に向つちや、妙に喧嘩腰で突掛つたらう。

縛られて居やせず、それこそ猿轡ぢやあるまいし、がらりと變つた櫛卷にして、青白くこそ成つて居たが、何も承知の、半纏着の前垂掛で、恁う長火鉢のじよたんの陰に、極り惡さうに顏を隱して、そして茶を出して、そして、……ト田舍に柴舟つて煎餅見たやうなものがある。

「あゝ、旨くも何ともない。」

「處が、私は小兒のうち、あれが大好きだつた。……前日、私ん許で、晩飯を濟ますと、劇場から歸つた時炬燵で食べさせようと、お組さんが、然う思つて、もう日は暮れたし、大丈夫だらうで、一寸五六軒さきまで買ひに出た處を、兩方の辻に狙つて居た近藏の連中が見付けて、直ぐにつけ入りに二階へ押込んだ。それが、袂に入つたまゝ、しよ引き出されて、無論松並木の道中は、其の時分の事だし、近殿が相乘車で押へて歸つたと云ふんだつけ、……それも後で分つたんだがね。

其の柴舟を折敷にのせて、ぢつと濕んだ目で私に出した。
其奴を嚙つて、甘えてりや、松ちやん役は濟むのにさ。
近藏めが鼻藥だ、何を、で私あ食ひませんよ。えゝ、大に突かゝつて辯じたね。姉さんを返せ、
と云ふんだ。叔母さんも引いちや居ません。此の松ちやんの親御へ義理にも、お組は引摺つてだつて連れて歸ると成るとね。汝等殺して俺も死ぬ。で、近藏眞蒼に成る、と痩せた肋骨を、畝々と身體中蒼筋で、大膚脫ぎに成つたと思ふと、竈に突込んでた、くわつと燒けた大なやつとこ箸を引摑んだ。……さあ皆殺……」
「お待ち、火鉢を除けて。——何、お商賣は鍛冶屋さん。」
「陶器の素地を拵へる。……」
「お職人……ぢや氣が荒い。」と、お常が憂慮しさうに、而して頷いて云つた。
「ですから、姉は可哀相なんですよ。すぐに活すの、殺すのつて立上る質ですからね。尤も料簡の狹い、突詰めた、餘裕の無い。……惡い人ぢやありませんけれど、一圖に赫と成る、と向う不見で、どんな事を仕出來すか知れませんもんですから。」

二十

「母が貴女、此の松さんと掛合ひに行つた其の時も、仲裁が入つて泣寢入りに成つて、結局、姉は其のまゝで身を縛られて了つたんです。
眞個、松さんが默つて縋り着いてくれたら、其の發奮に、手を曳いて内を駈出す處だつた、背後から斬られるまでもツて、後で姉が言ひました。其のかはり誰が怪我をしようも知れなかつたんですわね。其處を議論をしたもんだから近藏さんが行詰つて、殺して死ぬつて騷動に成ると、近所中が取押へて納つたんです。
地方ぢや、刃物、切物、山家へ行くほど、鎌や鍬さへ光るんです。振上げでもしようなら、色の變つた三日月樣くらゐに目立ちますから、あゝ云ふ男にかゝり合ふと婦は一生悲慘です。……何ね、都へさへ出て來りや、三人や五人、短銃を射したつて、砂埃ほど目の邪魔にも成りませんけれど、古い淨瑠璃の仁義や何かの、そんな義理にかゝり合つて、小さな地面から足が拔けないで、根を生して居るんですよ。」
「それだつて又、根を生さないぢや、別して、婦は困るわけぢやありませんか。」
「えゝ、ですとも、此の米のやうに根を生さないのも困ります。——一旦、龍野の其のいざこざが納つてね。私は何の仕出來した事もなく城下へ歸つたんですがね。何うも近藏が亂暴で、お組さんの身體が案じられるつて處から、叔母さんは、湊に引取られて居た、其の隱居所を出て、溫

泉へ引越して、お組さんの家の近所に、小さな店を借りて小商賣をはじめてね。何うやら波風も靜まつたから、仲直りかた〴〵是非一度遊びに來いつて、お組さんはじめ、叔母さんも頻に言つて寄越す、……何も私が喧嘩をした次第ぢやないが、向うが納まつたから、妙な羽目に成るもんだね。——夏行つた。

三日目の朝だつたね、一間ある、雜と天井裏と云つた二階に、一人で寢て居ると、突然夢に眞蒼な山が落ちて、蚊帳の裾が顏へ被さると、（日が當つてる、鬱陶しいぢやないか。）然う云つて、釣手を外してるのが、此のお米さんぢやありませんか。（お起きよ、湊から逢ひに來たんだよ。）で、人を起しといて、——國ぢや蒲團の上へ花莫蓙を敷くんだがね、暑い時分は——搔卷を上げて、するりと上り込んで、（何だ一人で寢て居るの。）か何か、棄臺辭を言ひながら、はらんばひに成つて、一服吸つたと思ふと、すう〳〵寢つ了つたは驚いたね。

（從弟が實家へ來たさうですから逢ひに行きます。）——濱名屋の長九郎が、罷成らん、と云つた、成るも成らないも行きたけりや行く、で、亂暴ですな。髮の結ひ日だつたつて、……前の晩洗つた奴を、引裂紙か何かで結んだなりで、何う云ふものか、櫛笄の疊紙を風呂敷包みにして抱いた、つ切、涼傘も持たないで起拔けに、濱町の家を出て、湊の橋で夜が白んで、渡ると、朝風、朝露の松並木を、靄の中に、烏のやうな馬と摺違つて、三里ばかり車にも乘らないで、ぶら〳〵歩行

いて來たつて云ふ。氣紛れの何のつて。

でもね、あとで此の人と手を曳いて、（小父さん。）と言つて、近藏の家へ出向いた時は、私は昂然として意氣頗る上つた。武者修行大得意。何となく他流試合に、お小手を頂戴といつた形があらあね、……但し馬鹿だね、……お組さんは可厭な顏をしたよ。」

お常が思遣つた面色して、

「可哀相だね、我儘が出來ないで……でも、それが當前よ。あゝ。」と云ふ。

「伺ひますが、私どもの方は……」

「間違つてるのさ。言はないたつて。」

松吉は額を撫でた。

「叔父貴こゝに有りとおいでなすつたな。」

二十一

「お米さんは、そんな事をして、それで、其の濱長さんとかの方は納つたんですか。」

「納るもんですか。」

松吉が引取つて、

「其つ切、然やうならです。惡く言へばお拂箱。」
「然うでせう。」
「尤もはじめつから其のつもりだつたんです。でも、發奮が無いもんですから、一日送りにして居ましたの。松さんが實家へ見えた、逢ひに行きます、遣らないと云ふから、其の勢で駈出して了ひました。……一寸色氣があるでせう。藝事ですわね。」
「藝事ですかい。」
「然うぢやなくつて？……從弟に逢ひたく成つたから、旦那の家を駈出して、洗髪で、しら〳〵あけに松並木を歩行いた處は、藝事ぢやありませんか。——其の以前、松さんの寢顔を雪洞で覗いたのも、矢張り然うだわ。それが、其つ切旦那の寢てる方へ引返した處は、唯のお妾で生活の世帶持に成るんでせう。
姉だつて然うよ。松さんと、炬燵で草双紙を見たのも藝事だし、引摺られて連れて歸られたのも藝事です。あれで、お前さんの手を曳いて駈出して、近藏さんに殺されりや、しまひまで丁と藝事に成るんですけれど。……」
「しばらく。危いね。藝事も」
「そりや生命がけでなくつちや、……無事に納つた處は、藝事ぢやない。それは、世間あたり前、

唯世帶を持つて活きて居るんでせう。誰でも、藝事は身に備つて、爲ようと思へば出來るんだけれども、世間で許さない事が多いから、身體が危くつて出來ないんです。
叔父さんのやうな藝人は、舞臺へ立つて、其の出來ない藝事を、私たち素人のために、丁とし て見せて下さるんぢやありませんか。」
「蓋し一説と云ふべしだね。」
「ねえ、姉さん、分けても色戀よ。……婦が一生懸命に成つた時は、皆立派なお役者だわ。たゞ無事に世帶が持ちたいばつかりに、素人で見物の方へ廻つてるんぢやありませんか、……詰らないわね。」
「すると何だね。」
と腕を長く、炬燵にのせた、運盆の猪口を取らむとするのを、ものあり、袖の如し、颯と來つて、引攫つたのはお光である。
「仕やうがないのね、飲んでばかり。」
「あゝ、就中、之などは藝事にあらざる事、又夥多しと言ふべきものだ。」
「最う何時だと思つて。」
「篤さんは。」

「先刻。……お客が歸ると、もう、他愛なしよ。」
「然うだらう。」
「嘸ぞ、お疲れなすつたでせう。」
「貴女だつて、横濱からおいでなさると、すぐに青山から桐ケ谷ですもの、草臥れて在らつしやるわ。こんな宵ッぱり對手をなすつちや堪つたものぢやありません。」
「益々藝事でない。」
「何が藝事なんですよ。又叭喇節の講釋をしようと思つて、――お骨揚で、明朝は早うござんす――さあ姉さん、お炬燵へお入んなさいまし。」
「ぢや御免を被らうかね。」
「えゝ〳〵、お先へ此の通り。」
柩のあとは、屏風の繪の水の如く、菖蒲にあけて、二人は一處へ肩を並べた。
お常が思出したやうに笑ひながら、
「松さん、お邪魔には成るまいかね。」
「ほゝゝ、近頃は諸色高價で、……藝事は些と延引でございますわ。」とお米も笑つた。
「藝事と云へば。」

「叭喇節。」
「此奴。」
と云ふ時、お常の袖に、肩がかくれて、お光はころりと横に成る。

二十二

「藝事と云へば、……鼓は何うしたらう。」
少時して松吉が偶と訊いた。
「迚も！」
お米は投げたやうに頭を振つて、
「湊に居る時、習つたつて、地方の師匠ですもの。上手な才藏ほどにも折てやしません。――學校だけはどんな邊鄙でも別に間違つた事は教へないでせうけれど、藝の方にかゝつちや。……私は横濱へ來て彼處でさい驚いたわ。清元は危ッかしいけれど、何うやら長唄の方は、と思つて居ましたがね、成つちや居ないんです。
今、お弟子を取つてる琴だつて、はじめの内は、今日仕入れて來て翌日、請賣りをするつて危つかしい綱渡りさ。――之も世渡りなら仕方が無い。

松さん、今だから云ふけれど、私も都へ出たいばかりの盲蜻蛉で、今度の主人を無理に勸めて、家も藏も金にして、横濱に知合ひがあるのを便つて、それに周旋をさせてさ。利子で懐手をして居る積りだつた處、藝と違つて、金には鄙も都會も無ささうなもんだけれど、矢張不可い。酷い目に逢つたのよ。

横濱は、そら、山の手には船の留守の暇な奥さんたちが多いでせう。苦し紛れに思ひついて、コロリンなんてね、茶碗を轉がして居た處が、燒繼屋ぢや無いけれど、垣に立つて聞く人があつてね、ほんのお對手と云ふのが、二人殖え、三人殖えてさ。此方も張合ひには成るし、極は惡し、お弟子さんより先へ廻つて、本筋の方で勉強して、まあ、何うやら、國の阿母も水のいゝ處へ引越させるやうに成つたんです。此の頃だけれど、名も貰つたわ。」

「豪いね、何と云ふの。」

「喜登勢つてんです、烏滸がましいわね。」

「(やとせ。)ぢやないか。」

「まあ、其のくらゐなものよ。……此の叔父さんの家でなんぞ、藝の事を云ふのは恥かしいよ。」

「いや、其の謙遜の仕方ぢや、お米さん大分出來てる。……卽ち亭主を立過し、……」

「六十七の。」

「大變な違ひだね、半分の上ぢやないか。」

「罪滅し、……悟つたもんでせう。」

「ぢや、御老體、善智識だ。」

「えゝ、お佛壇ばかり磨いてるのよ、……些とお遊びに入らつしやい。」

「いんや、參りますまい。」

「おや、まだ色氣があるんだよ。」

「可哀想に、此からですぜ。」

「始めまして、一寸お顏を拜見な。」

「見やがれ、此奴め、まだ小兒だと思つてら。……いや、串戲は止して、其の鼓の事さ。つい話に引込まれたけれど、私が訊いたのは、其ぢやない、(鼓の胴)の事なんだよ。」

「鼓の胴とは？」

「……知らないかね。私も夢のやうに思出した、と云ふのはね、晩方、桐ケ谷の歸りに道連に成つて歸つて來た、寶生會の幹事の人がね、――貴方にお話があります。……今日の佛の、兄さんと、お父さん。卽ち御外戚は鼓の家でおいでなさるさうで、久しい事ゆゑお名前だけしか知りません。……處が近頃の事です、貴方のお國の道具屋が、鼓の箱を持參して賣りたいと云つて見せ

ました。六角に角を取つた桑の木地で、三處へ、おもだかの蒔繪がしてある。別に此と云つて見處もないが、割合に價が張つてる。村上家の手道具だ、と言ひます。……お米さんの家のだね、——確に名家の、それであるなら可懷い、箱だけでも欲いが、兎に角と思つて、先達つて、今日の佛に見せました。あゝ、五十年目でめぐり逢つた、確に目覺えて居ます、父のものだ。——あの薩張した人だから、別に何とも言はなかつたが、たゞ、買つて下さい、金子が何なら私が立替てやらう、とまで極が附いた。自分で都合の出來る額でしたからすぐに求めて置きましたが、或、富豪に見せますとね、非常な懇望、纏つた價値で讓れと云ふが讓りません。此の場合一入お可懷いでせう。と恁う云ふんだ。

お米さん、お爺さんから、お米さんの父さんに讓つたものに相違ないが、そんな鼓の箱の覺えはないかい。」

「否。」

お米は一寸目を瞑つた。

「知らない、私が覺えてからは見た事もないよ。……屹と何だわ、父が亡く成つた頃の苦しまぎれに、はげた重箱か何かと一所に屑屋へでも賣つたんでせうよ。それが、方々の手へ渡つて大方今頃、不思議に世に出たものなんでせう。……」

「未練はないね。」

「でも嬉しいわ。そして、何、其の鼓の胴ッて云ふのは、何うしたの。」

「さあ、其の箱で思出した、私は見た事があるんです。妙な處で。」

「こりや、松さん、坐らうねえ。」

二十三

「小兒の時の長い道中、別に旅日記と云ふものもないから、何時頃だかよくは覺えて居ないけれど、……先刻、豐國神社の境内、それ、其の屏風の繪の、菖蒲の池のあたり。見世物小屋の前で、お組さんに手を曳かれて居た事を話したね、……何でも、其の時分の事に違ひません。ぐッと引締めて考へると、或は同じ日の事だつたかも知れないんだよ。

私の町内から、あの社へ行く間に、城の一方の門がある。高い處に可恐く樹が茂つてね、權現堂の森と云ふのさ。

（烏早う行け權現堂が閉る。）

それ、晩の寂しい時唄つたものだ。知つてませう。一方藪疊で、舊藩何代かの頃、誰とか婦を蛇責めにした所で、今でも其の蛇が殘つてうよ〳〵居るなんて言ひ傳へる。飛々に家がありま

す。其處を藪の内とか言つた。

城の櫓下だから路は廣いけれど、渺として、河原のやうで、人通りの無い處さ。森の中に城の門が巍然として塔のやうに聳えて居たがね、……一冬大雪の積つてる中で、此が燒けたのを知つてるよ。……蒼みがかつた紫の火のひらめくのは雪が燃えるんで、萌黄の炎の搦むのは軍用に葺込んだ屋根裏の銅が燒けたんだつてね。屋根も山も一面に眞白で、然も旭の晃々と輝く中で、宛然虹が燒けて狂つてるやうだつけ、奥二階の小窓から、覗機關を見るやうに、母さんに抱かれて見たよ。もう直きに花が咲きますよ、と母さんの言つたのを覺えて居る。」

「まあ、松さん、そんな事より鼓は何うしたのよ。」

「然うだ、眞個だ。否ね、其の權現堂の下の寂しい處を、お組さんと二人で歩行いて居たと思ひ給へ。

お組さんが、(松ちやん、其處に見えるのが、お靜小母さんの家なのよ。)と云ふ。垣根からかぶさつた、竹藪の中に引込んで、庵のついた、看板が出て居てね、(あなたの庵。)と侘しらしく書いてある。――蕎麥屋なんです。――

親類ぢや無い。が、此のお靜小母さん、と云ふのは、矢張舊幕瓦解の騷ぎに、江戸から故郷へ流浪したお役者の夥伴の娘で、其は笛の家だつてね。此の人は年紀は些と上だつたけれど、娘同

士、私の母の仲よしで、此が一時、故郷の私の家の二階に同居して居た事がある。其の親たちと一所に。可いかい。

お米さんの祖父母、父親、其の妹の私の母などは、其の頃は餘所の人さね。ト友達だから、一寸一寸お靜さんの許へ、御免なさい、とか何とか云つて、二階へ遊びに來たもんです。……或時、……藤の花の活かつた床柱に凭掛つて、文金に銀の平打で、田舍源氏を讀んで居たとも知らないで、用があつて、下屋から、つか〳〵と上つたが私の父――と云ふ譯だとさ。母が亡く成つてから晩酌にのろけたぜ、怪しからん父だね。

それだから、其お靜さん、と云ふ呼名が母のと聲が似て居たからね、可懷い人だつた。が、最う其の時は、世に亡い人に成つて居た。

が、此の人の内に、父さんが、祖父さんから讓られた鼓がある、とお組さんが其の時言つた。持手は二人とも亡く成つて、讓る人はなし、お組さんも七ツか八ツ、お米さんも嬰兒なり、家は退轉、昔のお役者夥伴だと云ふので、叔母さんが望まれて渡したらしい。……

處で、お靜小母さんの内だつて、同じく困るもんだから、江戸前で、(あなたのそば)と洒落込んで、いや、洒落ぢやない。活計のためにはじめたのが、藪の中に、あはれな鳥の巣のやうに殘つて居たんだ。

何故か、鼓が頻に戀しい。……有るものやら無いものやら、それは分らないけれど、もしまた、此の蕎麥屋に傳はつて相談の出來るほどのお金子なら、何うにかして取戻したい、他に何にもない、親たちの記念だからツて、お組さんが染々云ふ。……」

二十四

「お組さんが、まだ藝妓で居て、近藏の許へ行かない頃です。

處で、容子を見ながら、一寸尋ねたい、と思ふけれど、其のお靜小母さんが亡く成つてからも、餘程の年紀に成る。誰にお目に掛りたい、と云ふ的の人もなし、たゞ入るのは極りが惡い。(松ちやんは蕎麥が食べられて。)と云ふんだ。

御意は可しさ。

其處で、四邊を眄し〳〵、遁げるやうに藪を潛つた。

其の時のお組さんの、赤い帶のきら〳〵光つた事を忘れないがね。

島田で、故鄕の蕎麥屋へ入るなんざ、眞晝間の仕事ぢやありませんや、後で考へると。

烏は權現堂の森に鳴く。家のかゝりと來た日にや、狐亂菊の下に遊ぶと云つた荒廢方だ。

木戸口を入るのに、蜘蛛の巢を拂ふ始末さね。」

引傾つて緣が落ちた、座敷より高い沓脫に立つた時、曳いてた手が熱く成つたと思ふと、お組さんは俯向いて、優しい眉毛に手巾を當てた。

身過ぎとは言ひながら、田舍ものを此處に置いて、(あなたのそば)は情ない。……出來ないお世辭を言つたと思ふと、身に引較べて泣いたんだらう。

埃も厭はず、疊の上へ、ちよん、と先づ二人並んで行儀よく坐つたつけ。途迷ひをした繪馬と云ふ形だがね、さすが、それしやだ、ポン〳〵と手を敲く。

やゝあつて、出て來たのは、油だらけの紺の筒袖、横撫での光つた十二三の小女でね、何か用かは抉つたよ。お蕎麥を何うぞ。幾つと、訊くのは、驚き給ふな、お定り。

で、薄暗いのに目が馴れて、恁う何心なく床の間を見たんだがね、勿論掛ものも何にもない。破壁の泥の落ちた白ちやけた床板に、幻砧の繪を見るやうに、朦朧として煤にまみれた鼓の胴、……月夜の臼のやうに見えた。

蒔繪も模樣も、何にもない。

(あゝ、此處にある、松ちやん。)と云ふと、雪のやうな襟脚を投げると、緋鹿子の背負上が少し幅が廣く見えて、姿が瘦せたやうにお組さんが兩手を支いた。

花活ともある事か、其の鼓を立てた上に、泥の石菖鉢が載せてあつた。……遠慮深い人だから、

其奴を下ろして、袖で埃を拭かうともしないでね、涙ぐんで居たつけ。……餘程經つてから、蕎麥を持つて來た小女に賴んで、誰か内の人を、と云ふ、と怪訝な顏して取次いだがね。怪訝な顏して出て來たのは、よぼ〳〵の媼さん、おまけに耳が遠いと來て、此方で何か云ふ事が唐の鐘ほどにも通らない、……名が鼓だからッて鼓草の花を見せて鳴るだらう、と云ふやうなものさね。道理こそ、……お靜小母さんが、一度緣附いた亭主に死なれて、たよりない姑を引取つて、實家へ歸つた、此の媼さん一人活殘つたは情なからう。

遠緣のものを養子にして置く、植木屋の手間取をして居るが、滅多に宅へは戻りません。此は、益々情ない。

其切、出了つた。が、あとで折を見て話を仕直さうと云ふやうな樣子だつた、事だけを覺えて居る、と云ふのも漸とで、今度の三ッおもだかの其の箱の話を聞いて、山かづらの霞の中にほのかな峰の松を見るやうに、あのほの黑い鼓の胴を思出したが、さあ、思出すと、朝日の光が眞紅な綾を掛けでもしさうな氣がして成らない。

まるッ切知らないかい。お米さんは。」

お米は默つて俯向いて聞いて居た。

「さう、然う云へば、いつの事、そんな話があつたやうな氣もするね。お能の方で、家に貽つた

品は一品でも、其の内此家の叔父さんの方へ上げたいッてね、母も云つて居ましたから、……いつかの時、姉が持つて來やしないでせうか。あんな鳥の立つやうな騷ぎなり、別に、話はなかつたけれどもね、もしかお常さんは御存じぢやないか知ら。……お常さん。」

二十五

「いゝや、寢て居る。」と松吉が云ふ。

お常は緣側の方を枕にして、お光と顏を合せた、が、二つの髮が搔卷から生つた體で、すやすやと、そして二人とも帶をしめたまゝ、抱合つて居た。

「身よりは嬉しいな。」松吉は思はず感動したらしく然う言つた。

「血統は通はないでも、他人ぢやないと思へばこそだ。お米さん、お組さんは何うして居るだらう。……」

「羨しいの。」

「さあ、」

「寢ようか、松さん。」

二階から、きりつと引緊つた態で篤が下りた。

「まだ起きてるのかい。」
「寢ないのか、篤さん？」
「嘸お疲れなすつたでせうのにねえ。」と、お米が膝を摺らして、眞中へ火鉢を開いた。
「先刻堪らなく成つて、うと〳〵したがね、一寢入して、覺めると、目が冴えて寢られない。ふつとね、昨晩の今頃の事を思出すと不思議で成らない事がある。尙ほ寢られないから、二階で考へて居たんだがね、……もうやがて明方だ。が、君が寢で居たら、起してでも聞いて見たいと思つてね。」
「何だい、篤さん。」
「昨夜も丁度今頃だつたね、（松さん、さあ、君が望みの素裸に成つてくれないか。）と云つた。……此處に蓋をしてあつた棺が、何うしても一度明けて見なくては氣が濟まなくなつたんだ。」
「あゝ、然うさ、……はじめ、寢棺に納める時、祭官の指圖で、水色の素袍に、侍烏帽子を被せた、……あの紐を、君が二度結直したんだが、何うも据りが惡かつた、脫けて摺りはしないか、と心配で成らないから一度見たい、手傳へ、と云つたんだ。」
松吉は且つお米にも聞かせたのである。
「人に裸に成れなぞつて串戲らしくは云つたけれど、君は寢不足の目が血走つて、色の蒼いほど

興奮して居た。……實際、叔父は舞臺へ立つた時のやうな引緊つた澁苦い口許にニコリとして、裝束を着けた處は、地獄極樂なんか一跨ぎで召されて天に朝すると云つた、英氣凛々として、あはれな死骸のやうぢやない。敬畏の念に打たれて涙より先に頭が下るやうだつた。君が烏帽子の纓を氣にしたのは道理だ、と思つて謹んで手傳つたよ、其が？　篤さん。」
「あの時は、二人切だつたね。」
「あゝ、寢ない人も居たが、……お弟子は遠慮した。女連は控へて……然うとも。二人切で開けたとも。」
篤は手を正して、屹と見た。
「あの蓋を、蓋を密と拂つた時、君は、何も。」
「……」
「何も變つた事を見やしなかつたか。」
「見たか。」
「えゝ。」と、聞いた篤が、言はれて驚いたやうに、却て松吉の顏を見た。
お米は摺寄る。
「否、氣味の惡い事ぢやありません。」と、篤が云つた。

「私が言はう、婦人だらう。」
「むゝ、婦人だ。」
「美しい婦人だ。……うつかり言ふべき事ぢやない。特に私です。氣の迷ひだらうと思つて、又機を見てと默つて居たが、ふつと霞のやうな、氣の立つ中に、赤地の錦を着たのが見えた。いつか、羽衣を見た。あゝ、それが目に映つて居るのかと思つた。」
「私も同じやうに見た。」
篤は確と腕を組んで、
「すぐに何處かで、舞を舞つて居るのだらうか。」
「それとも、叔父に昔の戀があれば、其の戀を魂に刻んだ面影ぢやないだらうか。」
「君の考だ。……それは。」
「眞面目に。……それとも、藝人の死骸は、骨が玉の如き美人に成るのぢやないだらうか。」
「父の事を。」
「いや、こゝは內端だ。」
「實際、一大事と思ふんだが、お恥しいけれども、私には分らない。」
「何うして、私にも分らない、——お米さん。」

「飛んだことを、私なんか。……そして、いま丁度今頃煙に成つて在らつしやる處ですわね。」
と、わな〳〵震へた。
「姐は寢ましたか。」
「お常さんは、お光と此處に。」
「其處に二人。」と、篤は火鉢を伸上つた。
「起さうかね。」
「待ち給へ。……お米さん。」
「はあ、」と云ふ。——其處に篤と肩擦れに近々と顏を合せた。
「屛風の前に一人居る人は？」
松吉もハツと見た。
「其處に居らるゝ、色の白い方は誰方です。」
「あれえ、姉さん。」
「お組さん。」
唯、幻の鼓を抱いた、白い手は、袖ながら弗と炬燵を消えた。繪の翡翠がはら〳〵と飛んで、菖蒲が颯と動いたと思ふと、お常と、お光が驚いて起きた。

「はい、唯今。」

と表二階に、慌しい聲がして、梯子を駈下りた、お悅が、羽織のまゝで玄關へ、……そして電報を取次いだのである。——お組が急病、危篤だと、横濱から、中繼ぎして、お米へ宛てて。

星の歌舞伎

夜に入つて未だ間もない。乘合の立籠んだ新宿から九段兩國行の電車の中に、前途へ向つて右側の中程に、一人、品の可い、二十四五の美しい夫人が乘つて居る。

近來天下具眼の士は、われ等日本人が電車に乘つて、入口に立つのを、島國の了簡也と、大に大陸がつて嘲るが、前後に煽られ、左右に揉まれ、眞中の鮨に壓されて、人間の鰭と鰓ばかり喘ぐほど可厭な心持な事はない。凡て乘りものは、乘人が降りることの自由を意識し得る時にのみ快い……とまでは行かないでも氣安いのである。恁う何も煩かしく云ふほどの事はない。氣の弱い、健康でない、分けて婦人は、同じ詰込まれた電車でも、底へ沈むほど早く暈ふ。

此の夫人とても、敢て現代の大義名分を重んじて、覺醒した模範と成つて、好んで眞中へ席を取つた次第ではあるまい。

願はくは片隅に潛んで人いきれに胸苦しく堪へられなく成つた時は、するりと拔けて降りたかつたのであらう。

華奢な姿は、彌が上に撫肩の細く成るまで左右から押着けられて、棹に掛けた細布と云ふ、手繰られたやうに萎々と、紺と濃い茶の細りした絹縮の一枚小袖の薄い胸を、帶をせめて、がつくりと俯向狀に、翻翔と燕の飛んだ縮緬の扱帶で、きりゝと緊めた、其の水色なのが、しつとりと一降り春雨の絹絲で、姿の柳を結へたやうで、そして惱ましげに癪を壓した風情がある。半襟は薄紫、藤の刺繍。

靈ある池に影を沈めた、一枚金色の魚の背の如く、鼈甲の櫛が照々と鬢の艶に照映ゆる前髪を、白い手に……涼傘の長い柄に密と當てて額をつけた、上品な圓髷で、手絡の色は藤紫。みどりを洩るゝ其紫に、白魚の指の紅寶玉の色は、胡蝶の緋の瞳に似て、藤の花の咲く中に、紫の香に醉うて、うつとり夢を見るやうである。

時は四月のはじめであつた。

空は朧の雲蒸して、雨催ひの、日は暮れながら暖か過ぎる春闌な宵の氣勢の漲るばかり流れ込む。紅、白粉が漾つて、髩も、帽子も泳ぐ中に、然うした夫人の裝は、椅子の緣の苔滑かに、涼しい岸に花一房、水に影を宿した趣がある……

乘合が動搖むにつけ、車の搖るゝにつけ、奥深く成つて、浮世を離れて、乘合の底深く、スツと消さうな姿に見える。

昔から言傳へて、九段で怪我をすると危いと云ふ……一寸轉んで擦剝いても、肉を裂き骨を開く。鎌鼬の巣だなぞと云ふ。あの、賑かな中に、もの凄いやうな、たよりない廣い坂を、恁うした姿が鳥居から高く一人で降りたら、白晝と雖も尋常ごとではあるまい。——電車は、但し何事もなく、徐行しつゝ彼處を降りた。

一度、九段下の停留場で留まる、其の間も、涼傘の柄に俯向いたまゝで居た。

藤は面影である。襟脚の一際白い、黑縮緬の紋着羽織を、しなやかに着て居るのである。

其處でも、下りるものは二三人で、十四五人が乘込んだ。いや乘込む處か、攀上り、ぶら下る……頭を振立て、手足を捍いて、すぢりもぢりに、胴を綟つて揉む工合は、傳へ聞く、須磨の浦の蜑ケ家へ、鮪の搦んだ體がある。月の渚の眺めがある。

とは言つて置くものの、其の實、……離れ藝、輕業である。洒落なのではない。各自生命がけなのである。串戲ではない。親の死目に急ぐのではない。産婆でもあるまいに、次の電車は遲くて五分と待たせぬのを、熟惟るまでもない、事を好んだものである。

却說、電燭の燃ゆる中に、大煉瓦の建物沿を、眞黑な溝が通つて、灯のない幽靈船が、音も立てないで漕ぐ處は、天文學者が狙つて居る火星の裡から、赤い髯の小父さんが、却つて望遠鏡で、逆に覗いて居さうな、掘割の俎橋を、どろ〳〵と拔けた時、がたん、と一つ車が軋んで、鼈甲

の櫛が搖れると、夫人は顏を上げた。

淸い目も霞むまで、鮮麗な眉が、惱ましげに顰んで、身の周圍を眴したが、其の象牙のやうな、つゝと通つた鼻筋さへ拳固で打たれさうな人間の黑煙。

で、あはれみを乞ひ、助けを求めたさうに見えたけれども、人に蒸せたか、口を結んで、遣瀨なげに微笑むのが、何故か、覺悟して、惡怯れず、投遣りに斷念めたらしく見えて又俯向く。

電車が、軒を並ぶる名物の書籍屋の店へ、文明の響を投げつゝ、神保町の停留場に近く進んだ時であつた。

ぶら下つたか、潛つて居たか、其の時、乘合の肩と、胸を、水搔の有るやうな皺だらけの手で搔込んで、水を泳ぐ如く一氣に押分け、運轉手臺から降りるつもりか、前面へ、ぬつと、白髮が天邊へ拔け上つた、くな〳〵の黃色い顏を出した老媼がある。

七十有餘、髮は祖母子に結つて居た。

尼ではない。が、腰法衣を着けないばかり。鼠の無地の布子を着て、紋のない、變な橙色の小紋の羽織を襲ねた。いづれも手織とは見えないけれども、洗ざらしで、へな〳〵と心が拔けたのに、木綿か、羽二重か、白が赤樺に成るまで薄汚れた卷つけ帶、萌黃ともつかない、黑ずんだ鬱金の——猫を三疋袋にしたほどな——風呂敷包を瞽女背負に引括つたのが何を又何うして狼狽へ

たやら……

町場を三つも乗違へたやうな、けたゝましさで、遮二無二押分け、揉抜け、摺抜け、前へ人を衝いて出ようとした、が、電車は停まつて居るのでない。

腰も撓まず、よろ〳〵、皺だらけの口を開いて、あつぷ〳〵と喘いだと思ふと、ひよろりと、足が浮いて、倒れかゝる前のめりに辷つた手が、何と、丁ど其の爪の下だつた夫人の黒髪に掛つたではないか。

はずみであらうが、引しやなぐるやうに、髷を摑んで、のめる重量で、ぐい、と引くと、千筋を力に體は留つて、鼠色の老媼は轉ばずに立ち直つたが。

花藻を潛つた草鞋の如く、件の水搔でも有りさうな老媼の掌が、夫人の黒髪を離れた時、がつくり圓髷の根が抜けて、おくれ毛が、はら〳〵と、水が垂りさうに頬に落ちて、美しさは、其の老媼の手に綠の影が映すやうで。

櫛は抜けて、其處に月影が颯と折れる。

驚駭の聲を立てたのは乗合の唯三人五人でなかつた。車掌も吃驚して、あつと云ふ。

「御免なされませい。」

黒髪を、いま摑壞した手の甲を、仰向けに己が口へ當てたは、聲繕ひでもしたらしく、落着い

た野太の聲で、然う云つたのが、やがて出口で。——其處で振返つて熟と夫人を見て、動搖みながら下りる人に、のそ〳〵と續いて、大路の地に吸込まれるやうに鼠色に成つて、ぼやけて消えたのが、交叉點を白山行の方角であつた。

「酷い婆々だ。」車掌が呟く。

「引捉へて遣れば可い。」と、腹立たしげに釣革にぶら下つた乗客の一人は云つた。

車掌が鋏で乗換切符の小口を敲いて、

「粗相だと言はれりや其れまでですからなあ。」

然う云つて、ぐいと踞んで、其處に落ちて二つに折れた鼈甲の櫛を、節くれ立つた武骨な指で撮んで拾ふ。

ために、靴を引込めた腰辨らしい背廣があつて、

「年寄と云ふのを笠に着て、然も〳〵己は世間から保護さるべきものだと云ふ面をするのが流行りますな。あれは憎いですよ。」

車掌は其の櫛の折を手に据ゑたが、貴女とも、夫人とも、率爾に聲を掛け兼ねた。

美しい夫人は、老媼が、(御免なされませい。)——通一遍、詫びるとよりは、圖横柄に棄臺辭を殘した時、搔亂された、前髪の艶やかな蔭に、凛とした眸で一目見たばかり。其のまゝ靜と、よ

り深く涼傘の柄に額を着けた、と呼吸の絶えたものの如く、身動きもしないで居る。
麗なのと、靜なので、車掌は夢の裡で名の知れぬ花を見たやうに、如何とも疾には手の付けられない様子がある。
時に、乘客の肩を分けて、一人、緋の羽織に、鳥打を被つた、脊の高い、青年が衝と寄つた。
目は清しいが、眉のあたりの暗いのは、額を蔽ひ後腦を掛けて、新しい繃帶をして居るためで
――これは赤坂田町邊に借家を持つ、前原辰馬と云ふ、まだ餘り世には聞えない畫工である。
衣服の縞は大名ながら、懷中の薄寒さうな、肩ばかり屹と成つて杖一本、他に何にも持たない手を車掌に向けて、ずいと出して、
「私が預る。」
と一息に云つた。
何の蟠りもない、あけすけな態度が、一言にして、其の夫人の連である事を納得さす。
車掌は默つて、櫛を渡して、
「飛んだ事でございました。」
却つて前原にくやみを云ふ。――監督が窓を覗いて居た。
「お下りに成りますか。」

と、畫工の云つた時、女も交る夕刊賣の聲の中を、鈴音高く、電車は動く。紫陽花の如き電光の閃くのも、美しい人を乘せた夜の車の花であらう。

二

「今川橋の處だつたよ。何、こんなに混雜して居たんぢやない。腰を掛ける處も澤山あつた。……止しや可いのに、婆の癖に、人さきに引搔分けて飛乘り同然に駈上つた、阿彌陀の背中へ背負でもする氣だらう、馬鹿な。
おまけに日和下駄を穿いて居たらうぢやないか。
矢張、荷物を擔いで居たつけ。何うして、今の奴ぐらゐなんぢやない、もつと一抱、二嵩もある重さうな荷だ。
重荷は氣の毒だ。けれども、其の重量まで身體ぐるみ一所に成つて、僕に倒れかゝつたんだ、堪るものかい。
そら、乘る拍子によろ〳〵と成ると、何うだ、鬼の化けた伯母さんが、渡邊の綱の破風から、どしんと落ちたやうに、僕の膝へ荷ぐるみだと思ひ給へ。
婆が、がんと手を支いた僕の此の股の附際。俗に辨慶の泣處とか云ふのを、奴め、つんのめつ

て轉ぶまいとする一生懸命の力でな、親鸞上人の許可が出て、嫁を拷問するほど、ぎり〻と抓つた。……服を着て居た、筒服の上だから助かつたのよ。

單衣や袷で見給へ。肉も捻切れたらうと思ふ。痛いの痛くないの、骨髓に牙が徹つた。僕は、うつかり腰を掛けて居た。……大袈裟ぢやない、鎌鼬が舞下つて喉付いたと思つたよ。痛い、と喚くと目が眩んで、其奴の手と胸を壓へて、夢中で引捩るやうに突飛ばした。一捻ねぢて刎倒したのよ。荷は重し、肥つて居やがる。奴も離れまいと嚙着いて居たんだからな。

押退ける勢で、奴はどしんと怪飛ぶ、と其でもよくしたものよ、仰向けにも轉ばないで、のけぞりながら、向う側の腰掛へ叩きつけられたやうに、ぐしやんと大跨で腰を落した。

脊骨ぐらゐは打つたらう。

爾時の言種を聞け。頰骨の尖つた、面の四角な、口の大きな婆だつけ。眞黑な齒莖を濁と剝くと、汚點のある額で睨んで——（何さらす！ 年寄を手暴な事を。邪險な、薄情な、蛇よ鬼よ、阿奢世。……）

阿奢世……は脫線さね。（年寄ぢや思うたら、手を取り、腰を抱いてこそくれまいけれ、投飛ばすとは、親不孝の、不忠不義な餓鬼め。汝、腰の骨を挫いた、あ〻痛い、お〻痛い。——……お天道さまは可恐くないか、覺えて居さらせ——）

忘れもしない、大聲で、然う喚いた。怒鳴りやがる。齒莖で嚙んだ澤庵を吐出すやうに雜言する。僕はむら〳〵とした、嚇と成つて拳を握つて立たうとした。が、顧みて、可いか、ボギイ車の中をずらりと眴すと……餘所目には何うだ、蹌踉けて倒れかゝつた年寄の、しかも重い荷を背負つたものを、可哀相に、抱きとめ、勅りでもすることか、がむしやらに突飛ばして腰骨を惱ませる、と婆の罵る、其の通りに思つて、じろ〳〵と此方の顏を見て居るのが、歷々色に顯れて居ようぢやないか。

少い娘も乘つて居た、……母親らしい品の可いのと並んで掛けて——

僕は口惜いが居たゝまらないで電車を下りた。

何うだい、君、人道も車道も何もあつたものか。そんな婆は、ぐわんと撲り倒して遣るが可いんだ。……彥左衞門め、御前體、杖御免と成ると增長をして不可んのだ！」

見て居た、手帖を半ば閉ぢたのを、やがて衣兜に突込んで、なにがし大學の制帽を着た青年が奮然として早口に談じた。

おなじ制服の伴侶が、夫人に並んだ、其の、一人おいた隣から、話したのである。

畫工は此の話を、——それも連と覺つて、混合ふ中に通勤氏が半ば分ち與へた、同じ釣革に縋りながら、夫人の前にふら〳〵と立つて耳を澄ました。

電車が駿河臺下で留まつた時、此を待構へて居たやうに、やゝ蒼白んだ、が、尙凄いほど美い顏を上げて、

「下りませうか。」

前原は猶豫はず、

「兎に……角。」

藤の姿はすらりと立つた。

端麗なる夫人の、思ひも掛けず鼠色の嵐に惱まされたのに同情して、言合せたやうに、場席を開いた中を、畫工に續いて、然まで蹌踉めくともなくすら〳〵と車を出た時、はじめから着ないで、膝にのせた、墨繪の羽衣を疊んだやうなお召縮緬の半コオトの、先刻から事の煩はしさに、恰も忘れたやうに、柔かな袖の折目に掛つたのが、長く裳を曳いたやうに、脊もすらりとして、何故か、それが解けかゝる圓髷を支ふる、疊紙に備はつたらしく見えたのである。

「一旦、旅宿へお歸りに成つては何うです。」

丁ど東明館前で、怪しい乘物から放たれた體に、揃つて一呼吸、彳んだ時、先づ畫工の言つたのは此の事で。

電車は俄然として空に成つたと思ふほど、きやつと狂人の如き叫喚を揚げて、すとんきやうに

駛り出す。

夫人は其を正面に――街燈の蒼味を浴びて、頰も白々と見送りながら、

「否。」

「其でも。」

「えゝ、何うせ行く處へは行かなけりや濟みますまい。」

と横顏で微笑んで、

「大層、意味の有るやうに聞えますわね。……平つたく言つて了へば、最う、やがて、彼方では――あゝ、お茶屋は何とか言ひましたつけね。」

「兩國の松岸です……」

「松岸――次手に其方の岸へ行きませうか。」

線路を渡つて、此から歩行きながら――

「自分が御馳走に成りに行く先を……途中まで送つて頂く貴下に聞いて思出すわけなんですもの。お察しなさいまし。」

「照樹さん。」

夫人の名は照樹である。――其だと、關西某縣、某大學の教頭、博士清川扶道氏の夫人。

とすると、主人扶道も全國の教授會議に、目下上京中。で、畫工が、繃帶も未だ生々しい額の傷は、仔細あつて、ものの行違ひから夫人のために、つい、二三日前、紀尾井町あたり煉瓦造の或邸で、傷つけられたものである。

或邸と云ふ、其の邸の主人公こそ、老博士松澤嘉行。狼髯虎腰の大家で、若き博士清川扶道には、學問は違ふが、先輩にして且つ恩人に當る。

其が、今宵、他客とともに、清川夫妻を招待して、隅田川の松岸に、一席の宴を催す……照樹よ、其處に行かうとする途中なのであつた。

三

「奥さん――」

「まあ、貴方大層あらたまつて、」と褄を留める。

「何とも申上げやうはありません。」

畫工は歎息した。

「御免なさい。」

故と輕く詫言して、

「恁うして送つて頂きながら、言はば貴方の仇見たやうな人の處へ御馳走に成りに行くんですもの、私こそ何とも申上げやうはありません。」

畫工は杖を力なく支いて、

「否、飛んでもない、そんな事ぢやありません、貴女の其の御髮ですが。」

「あら、御覽なすつちや……極が悪い。」

「實際、見て居ても危なつかしい……ぐら〳〵して、壓へて居たいやうです。する〳〵解けてます。」

「では、壓へて歩行いて下さいましな。でも、然うすると、一寸、長屋で夫婦喧嘩をして、髻を引摺られて行くやうですわね。……」

「串戲ぢやありません。」

「何しろ、餘り明くつて、」

夫人は髮を壓へた。

「裏通を行きませう。」

で、横町へ。

「眞個に怪しからん婆だ。」

少時言の途絶えた時、畫工は溝端の石を、杖で一つ當てつゝ、思出したやうに、
「全然、故としたやうにしか思へない。」
「まさか、そんな事は無いでせう。」
「貴女は、あの婆を見ましたか。」
「えゝ、見ました。可厭な風體ねえ、氣味の惡い……」
「先刻の學生ぢや無いけれど、眞個打捉へて、あの、ぶよんとした頰邊を撲曲めて遣りたかつた。河豚が中風症に成りました、と云ふ、あの圖體は何うです。」
「何でせうか知ら。あんな風體をして。」
「巫女ですな、先づ。」
「巫女。」
「知つては居ませんが、まあ樣子が。產婆でもなし……祈禱者、飯綱つかひ、然う云つた心持がします。」
「可厭ですわね、氣味の惡い。風呂敷包を背負つて居ましたッけね、薄汚い。」
「然うですよ。」
「一人置いて隣に居た學生の方が話して居なすつた、今川橋で倒れかゝつたと云ふのも、確……」

「矢張り然うです。……しかし私が聞いて居ました處でも、同じ婆ぢやありません。そんな事は些とも氣になさるには當らない、が、何しろ私が不行屆きだつたんです。
晩方、內へ來て下すつた時、此方は御邸でなくつても確な帳場は近所にあります。宿車でお送り申すと可かつたのに、――明日は最う御出發だと云ふし、又貴女に、御心配を掛けようぢや無いけれど、いづれ多勢見送り人があるんでせう。その中へ、此の繃帶は持出せません。
其處等まで一所に出ないか、御意は可しで、連立ちました。――溜池の通りの、あの晩方混雜な中で、一寸した吳服屋の店で、半襟を一掛お買ひなすつたでせう。……內の女中に手土產が無かつたから遣るんだつて、……
唯見る、碁會所の柱掛の、歌川の錦繪に、夫人の俤が通ふのである。
「……あの時です、貴女が其の帶の下の――妙な癖だけれども以前から――其のお端折の中……又目立ちますね、細りして居なすつて、何處に身體が有るんだか分らないから。胸にも腰にも、部のあらうと云ふのは衣服のお端折りに成つた合目ばかりだ。」
「知らない。」と、細腰を涼傘に撓める、と又痩せる。
「……例に依つて其のお端折の中から、二折の紙入をお出しなすつた、勘定をするつて。――それには仔細は無かつたんだけれど、亂暴にお扱ひなさるから、二折がぶらりと下つて、紙幣の大

分、部の厚い、折重ねて揃つたのが、店頭へばたりと落ちたでせう。(細いのがあつたつけ。)と、横に振つた醉ッぱらつた奴の中に、金貨さへ交つたぢやありませんか。」

「えゝ〳〵、大金持。」

「話すも、卑しいやうだけれど、私は酷く氣に成りました。……と云ふものは、隣の道具屋の雨落の處に一人、それから店飾の硝子窓を覗いて一人、どッちも風體のよくない半纏着の若いものが。

もう一人、向う側の寄席の看板の下に、此陽氣だのに、毛皮の襟の着いた外套を着て、茶の中山高を被つた頤鬚の濃いのが居て、三人一齊に御所持の束に目を着けた。向う側のなんざ、間を可なり隔つて居ながら、表町から電車の光りの飛沫が來たやうに、目球がピカリと紙入へ輝きましたよ。串戯ぢやない。貴女、金子の、貴女、あんな扱方をするつて事がありますか。」

「濟みません。」と頭を下げる時、一寸圓鬚を壓へたが、煩さうに頭を掉つた。

畫工は不意を食つた體で、ふと立停つて、これを見て、

「いや、お詫びでは恐れ入ります。」

「然も〳〵田舍ものと言はないばかりですね。」

「否、大名藝だと言ふことです。」

「澤山よ。」

「私はぎよッとしたんです、實は。……最う日が暮れて居るんでせう。で、(見附から夜櫻を見ながら一所に行きたいが先は急ぐし、もう車に乘らう。)と何心なくお言ひなすつたけれど、一件の三人六ッの目が、貴女の身體にくつついて居さうで成らない。……田螺のやうに。」

「氣味が惡い。」

「然う思ふと、見附の人が、どの顏も、掏摸、剽盜に見えて成らない。言へば氣味をお惡がんなさるだらうし、困つた、と思つて、こりや電車の方が安全だ、そして一所に乘つて氣をつけてれば、大丈夫、と考へたものなんです。

畫工は帽の廂を直して、

「お車になさい、と此方から申上げる、それが相當。貴女の方で乘る、と云ふのを、否、電車になさいまし、一所にお送り申したい。……」

今度は打つやうに帽子を壓へた。

「餘程發心をしないぢや、御婦人に對して、可厭な事を——然うは言へないものだ、と御承知下さい。」

「畏まりました。」と、きつぱり云ふ。

「……」
「然も輕蔑なすつたやうね。」
「え。」
「婦人如きに深切をと……」
「そんな意味ぢやないのです。」と笑を交ぜて少し慌てる。
「眞個に御恩に被ますわ。」
「又、然うまでは……」
「でも、嘸ぞ御迷惑。」
摺違ふ書生を避けて、夫人の袖の寄つた時、何處のか軒に咲いたやうな、花の香がぱつと薫つた。
書生は口笛を吹いて行つた。
「それだのに、却つて、飛んだ災難にお逢はせ申して……恁う成ると電車を勸めた私がお被せ申したやうなものだ。……貴女は故と心配をさせまいと、平氣で冗戯口なぞを言つて下さいます、が、それだけ尙ほ心苦しい。
此れから晴々しい、人目の多い、宴會の席へおいでなさるんぢやありませんか。

こりや事によると、貴女に取つては、……御婦人としては、分けて奥さんと云ふお身體ぢや、紙入をお掏られなすつたぐらゐの御迷惑ぢや濟まなくはないか知らん。と實は案じられて成らないんですがね。」
路地の片蔭、手絡の色の、烏羽玉の黑き中に夢のやうに白かつたのは、亂れて色の褪せたのではない、照樹の手が其の黑髪にかゝつたので。……もう散りさうな手絡の切を、心着いて、もつれた中から拔いたのである。
「前原さん。……
今通つた書生さんで思出したんですがね、先刻の學生の方が言つてなすつた、あれは何うしたツて言ふのでした？……私、頭がふら〳〵するので、電車の中ぢやよく聞取れなかつたんですけれど、貴方は覺えて在らつしやらない事。」
「何です。」
「婆さんが、又何うとかしたツて？」
「今川橋で。」
「そのあとで、又愛宕の山で何うとかツて？……」
あゝ、夫人は聞いて居た。

「三田の人らしい、あの學生が、その後、愛宕の塔の上へ昇つた事があつたんですッて、晩方ださうです、一人で……

よく〳〵小遣がなかつたんだッて、苦笑ひをして、伴侶の學生に然う云つて居ましたがね。

塔の中にや誰も居ない。おまけに晩方でしたとさ。……がらん堂の彼方此方、幾階か壇を上つて、頂上へふい、と出て、根の生えた風船に乘つたと思ふ、東京中の森の黒いのが、颯と波のやうに成つて雲が近いと見ると、柱の蔭から、ぬいと顏を出した婆さんがある。宙に住つてたのか、思ひも掛けない、又其の婆さんの面が、今川橋で見た奴とよく似て居たので、棒すくみに足が窘んだ。お茶を上れ、と茶盆を出したのを振向きもしないで、奈落へ飛込む氣で遁げて下りた。

——然う云つて居たんですよ。」

「まあ。」

つゝと寄添ふ、紫の襟の影が、前原の頰に映つて、

「私、何うしませう、此の髪を。」

「……」

暗の空から生るゝやうに、白い櫻が二片三片。何處のか便りない軒燈にちら〳〵こぼれて、貝を一枚鏤めたやうに、黒髪に留つた時、又夫人が云つた。

「此處はお社ね。」

前原はうつかりと、

「えゝ然うですよ。」

「五十稲荷樣。」

「よく御存じです。」

「まさか……そんなに地方ものにしなくつても可ござんす。此の邊から學校へ通つた事もあるんですよ。」

「成程。」

「水がありますわね、境内に。」

「何うですか、池は分りませんよ。」

「あら。」

耳許清らに、横に見返す瞳が涼しく、

「知つてますよ、池が有るか無いか、そんな事……手水鉢の事ですわ。」

「それは有りませうとも？　何うなさいます。」

「えゝ、有るのは、……分つてるんですけれども、一寸御相談をして見ました。」

「參詣をなさるんですか。」
「えゝ。」
「では御一所に――あゝ、それで手をお洗ひなさるんですな。」
「そして髪を。」
「髪を？」
前原が驚いた。
縺れかゝる鬢の毛の、耳のあたりを細い指で壓へて、夫人は直き其處の社の裏門を、姿が浮く風情に、然も薄暗くスッと潛る。褄捌きは猶豫はず、すら〳〵と通つたが、何故か悄然とした肩が細い。
前原は膝の處へ、兩手で杖を横に握つて、其を夫人と隔ての垣、妙に魂の据らない、ふら〳〵とした形で續く。
あの境内は廣くない。
トンと背を凭たすやうに、御手洗の柱に脊筋の撓やかな蔦を投げて、背後向に行んだ時、輕い息を吻と吐く。照樹の姿が寂しいので、納手拭が二三枚、はらりと落掛る桐の葉のあはれが見えた。其の癖、其の桐が咲いて、中空に面影に立つか、と見える。

「奥さん。」
「……」
「貴女、お考へなさらなくつても可いでせうか。これから兩國へ行らしつて、宴會の席へお出なさるまでに、綺麗に乾きますでせうか何うでせう。」
「それは乾きますまいよ。」と、きつぱり云ふ。
「えゝ。」
「濡れたまゝでせうよ。」
前原は向側へ。御手洗の角を隔てながら、心は摺寄るかと思ふ急込んだ調子で、
「ぢやあ、あの濡衣をお着なさらうと云ふお覺悟で？」
「濡衣ですつて、……まあ何ですか、私の柄では無いやうね。」
唯顔を見合す。夫人の瞳が上へそれると、御手洗の屋根はづれに影さすばかり、一本の櫻がここに咲亂るゝ。
思掛けない雲が來て、優しく袖を包んだやうに、照樹は胸を抱いて恍惚と見上げながら、
「私ぢや破蓑が相當ですね。」
花の雫が、しと〳〵……

春の夜が描いた、此の怪しい筒井筒の一枚繪は、正面の社の、閉した狐格子を漏れる寶珠形の蠟燭立の眞中に、灯して半ば消えた唯一本の蠟燭に映出さるゝ。

堂の棟に續き、又玉垣を隔てた處に、家々の窓の燈は、恁うした宵の障子を染めて、濃く薄く山吹の花の咲いたやうに見える。其が眞晝の如き表通りを一側外に控へただけに、宛然田舍家のもの寂びた風情で、燃ゆる灯が唯一つ、櫻が一樹咲亂れた寂寞した境内は、奥山の祠に似て、都に遠く、里を離れたやうである。

「破蓑だなんて、そんな亂暴なことを云つちや不可ません。」と畫工は御手洗の水を凝視めながら云つた。

夫人は胸を擦るやうに、衣紋に淺く片手を插したが、落着いたもの云ひで、

「では……矢張り濡衣にして置きませうか。其の方が色氣があつてせめてもですから。」

「冗談を、私は眞面目に心配をして居るんです。」と、色を緊めて屹と成る。

「御免なさい、種々氣を揉んで下さるのに、暢氣らしい事を云つて。」

一寸俯目で、

「濟みません。」

「すむも濟まないもありませんけれども、眞個お氣味が惡いんですか。……そりや御心持の惡いのは知れてますがね、髮をお洗ひなさらないぢや不可ませんか。」

「えゝ、そりや私だつて、此から晴の場所へ行くんです。其處には主人も居ますし、窮屈で氣の置ける人たちも來て居ます。第一――今年までは、頑固に御自分の田舍に居て、主人が仕送つて居たんですけれど、今度は都合上、私たちと一所に住まうと云ふ、奥州黑澤尻と申すね、むづかしい處のお姑さんが今夜の席へ呼ばれて居るんでせう。大方五十年以來の御紋着、白襟で上座に開直つておいででせうよ。……旅籠屋で、そんな裝束のやうに云つてでしたから。

外に親類も三四人、雜と婚禮の御披露を仕直しと云つた席なの……實は。――ですから更つて圓髷になんぞ結つて來たんでせう。

電車の中で、可厭な婆さんに髮を壞されたわね、……櫛が折れました。」とハタと落したやうに云つた。

前原は今其の前髮を拔けて辷つたのを見るやうに、ハツと思はず袂を壓へた。車掌が拾つて渡したのを、其のまゝ受取つて此處にある。

「さいさきの可い事はないのです。むかうへ行けば屹と凄い目で見られるか、氣障な事を聞かされる、仕方がありません。私は有つた事をありのまゝに云ふまでです。それからは先樣のお考へにまかせよう、とそれは最うちやんと覺悟をしたんです。がね、尙ほ此の上に、途中で髮を洗ふ

のは、些と自分でも定規がはづれると思はないぢやありません。けれども、……聞いて頂戴。電車の中で、髪を壞されたは壞されたとして、急にね、思出して我慢の出來ない事が起りました。圓髷を臺なしにされたと云ふより、あの婆さんの手が毛に觸つたと思ふ……毛に觸つた！其の事なんです。

あの先刻の學生の方は、一度今川橋の電車で見た婆さんに、よく肖た顏を愛宕の塔の上で見たと云ふぢやありませんか。

私はね、矢張り先刻のに、そつくりな婆さんを——今夜これから行く兩國の、……家は違ひますが、柳光亭で、川開きの花火の中で、……それは、變な、不思議な事をするのを見ました。」

夫人は御手洗の石に兩手を掛けて、うつむけに水を覗くやうにして居る。低聲ながら其れが珊珊として流るゝ音の如く向合つた畫工の胸に響いて、而して却つて、深き淵に臨むが如く聞取られた。

「忘れもしません。箱根ではじめて、貴方にお目に掛つた、あの、夏——」

こゝで、はじめて逢つたと云ふ、當時の事を一寸言ひたい。

四

「失禮ですが——」

一人の青年が、腰掛けて居た谿河の磧の石から衝と立つて、其處の丸木橋を半ば渡つた、二十ばかりの世にも氣高い婦に聲を掛けた。

場所は箱根の堂ケ島の、あの大石小石に常夏の花が咲き、巖には青芒の生えた中を、眞青な龍の走るが如き流に臨む……明星ケ嶽の眉に迫る處である。

此の青年が畫工前原辰馬であつた。

現在から數へて、まだ然までには年を經ぬ、一夏、或學校の卒業試驗の休暇を此處に遊んで、底倉に宿つた時の事であつた。

七月、盃蘭盆過ぎた頃で、湯治場には、そんなに客が込まぬ。心靜に朝寢をしたので、順に後れて、三時過ぎに成つた午飯の時、麥酒を拔かしたのに獨りで醉つて、備付の机の上に、汽車の時間表や財布などと一所に置いた、持馴れた扇子を、山氣の爽さに、使ふともなしに手弄りながら、高緣に足をぶら下げて、何の氣遣もない白い雲を見て居たのが、其のまゝ庭下駄を突掛けて、金魚が藍の化粧をする、紫陽花が時を盛の、池の周圍を巡りつゝ、其のまゝ、ふら〳〵と門の青

葉を山路へ出て、殊さらに志すともなく宮の下を通つて、奈良屋の裏から崖の石壘を、大水車、五段の瀧。其處で、堂ケ島へ下りて、然うして丸木橋の袂に憩つた。

畫工が此の體を後で考へると、何うやら目に見えない、何ものかに誘はれ出たとも言へる。帽子も被らないで、且つ——そんな覺えのない——煙草を忘れて出た。財布も持たなかつた。が、試みに宮の下の小店で掛合ふと、貸浴衣に蔦の葉を染めたのを見て、快く貸した。

敷島の煙が淡く、水の清さに、白いほどな指の尖、吸ふ其の火がぽつりと紅い。まだ茂らない芒も、葉末にほんのりと霧を吐く穂の氣勢。大な巖も、高い峰も寂として、射かける流の白羽の箭は、綠の石に降りそゝぎ、丸木を渡した細い橋は、水の響きで搖々と動く黄昏時。

唯、其處へ渡掛けたのは、堂ケ島の溫泉宿の方から、すら〳〵と、裳に常夏の露を分けて、雪よりも白い素足で、石の中を辿つて來た。

あたりに湯治する麗なる人の、溫泉に玉を洗つて、筧の清水に黑髮を解いたと見える、滴るばかりの洗髮。髻を一扱颯と肩に捌いたが、白地の羅が膚に透くか、膚の白さの羅に透るのを紅の夕日に染めたか、袖も裾も色は常夏の花に紛ふ。其の肩を包むばかり片手に一束、淺葱に、藍に、紫に、花を重ねた一つを十ウづゝ六七十輪、三枝、四枝、紫陽花を手に提げて居る。

それが、裳から胸を埋めて、恰も大なる車輪の如く、紫の雲に乘つたやうに、すつと通つて、

藍に飜つて、橋に乘ると、水をうけて、霧を拂つて、颯と淺く淺葱に浮いて、そして艶かに碧白く燃えた。

「失禮ですが——」

發奮むばかり呼吸を續けて、

「お綺麗ですな！」

片褄を、橋ずれの撓なる花に埋んで、其處へ婦が立停つて振向いた。

衣の氣勢か、山風か、其の身動ぎに、はら〳〵と音のしたのは、男に拗ねた帶腰ではない、花に響いた流らしい。

顏の氣高さ、優しい事。

但、其の手にした紫陽花は、こゝに山姫が從へた一千の魔女の、媚びて笑める顏の如く、五百の羅漢の憤つて顰めたる面に肖て居る。

麓は卯の花。風祭のあたりから、背戸、垣根、今年竹の中にさへ、湯本、塔の澤、崖も、渚も、雪を散らしたやうに咲く。其の丈の高いのは、峰に降積るかと誤たるゝ。溫泉の宿の窓、床の間、谷川を引く手水鉢にも折添へて、眞白な雫を漲らす。

中腹なる大平臺、宮の下、底倉のあたり、宮城野かけては、紫陽花の山である。滑かな紫の雲

に、崖の茅屋の、半ば埋れて見えるさへある。瀧を包み、簾を染め、軒に掛けた燈籠は晝も淺葱の灯を點す。……

臺ケ嶽、冠ケ嶽、峰は遍く綠である。そして山々が頂く中空の寶冠は白百合の花を鏤むる。麓の雪、中の紫、峰の綠。この裝は、やがて一山を往來する雲の色とも見られよう。飜り、煽り、渦卷き、鳥の羽搏くが如く巖を打つて谷間を流るゝ、早川の水の面影にも擬ふ、箱根の夏は美しい。

其の中に、堂ケ島の淺瀨に架けた丸木橋、明星ケ嶽の暮れかゝる青く白い流に臨んで、水紅色が膚を透く、羅の袖に涼傘の如き紫陽花を提げた姿は、較へむ方なく美しかつた。

「失禮ですが。」

畫工は最う一度、振向いて婦に云つた。

此は失禮でない事はない。一面の識もない婦に、唐突に聲を掛けたのである。が、たゞ夢を見るやうな心地で……

「實にお綺麗です。」

同じことを言つた。

最う言出すべきやうはない。續きさうな二の句も無いのに、婦は一度振返つて、二度目の歎賞

を聞きながら、橋の半ばを向うへ渡つて、其のまゝ岨徑に裾を消さうとはしないで、裳を此方狀に返して、半身を紫陽花に、斜めに見越して更めて立停つた。

褄はづれを激する流れは、巖に躍つて……しかし其處ばかり音も立てず、花の影を搖り据ゑたやうである。

「何になさいます。」——

思つても見るが可い。龍宮の松明ならば知らぬこと、玉を炊ぐものと雖も、未だ嘗て紫陽花を焚くと言ふ驗を聞かぬ。花を提げたを——「何になさいます。」——

が、不作法に、ものを云つて、聞棄てにでも、フイと去らるゝ事か、故と足を停めて、偖て言繼ぐのを待たれるものを。

畫工はだらしのない事を云つて、

「何とも失禮ですが。」と、更めて會釋した。

「蟲を拂ひます。」

と、玉を轉ばすやうな聲。谿は暗く、聲は朗に、水は白くむせび、靑く歌ふ。

「蟲除になさいます？……其の花を。」

「蠅が煩いので。」

「あゝ、蠅がお煩い。」
「何よりか。」
黒髪の其の丈なす一條が、もしそよとも動かば、其處に一匹の蠅があつて、それを拂退けるためでなければ成るまい。……不淨を許さぬ端麗さよ。名工の手に刻まれた女神の姿は、蟲が自然に避けるか、彫像が自ら拂ふか、いづれかで無ければならぬ、と見取らるゝまで淸らかであつた。
「洵に御道理と存じます。」
言を正しく、
「屹と、お嫌ひに違ひありません。——私のやうな、こんなものでも、蠅は實に我慢が出來ないのです。あの何ですか……」
前原は一寸俯目に、
「……甚だ恐入つた事ですが、唯今も少々酩酊をして居ります。其の狂水のために調子を狂はして、飛んだ事をお耳にも入れました、煙草も飲みます……
此の毒が、身體に廻つて、幾分か心にも染むやうに成りましてからは、毒を以て毒を制すとか申すんでせう。そんな事はなく成りましたが、心も淸く、身も潔白な小兒の時分は、蚤にも蚊にも、然うした事は有りませんのに、蠅が集ると、集つたあとが疱瘡のやうに成りましたんです。

刀で斬らうと思ひました。天井を、障子襖を、火で燒かうと思ひました。然うでないと此方が殺されると思つたんです。
こゝに、火焰のやうに不淨を除き、白衣のやうに汚穢を拂ふ不思議な佳い物を持つて居ます。」
畫工は俯向いて手の扇子を見た。そして親骨をきり〳〵と左右に開いた。兩面紺靑の地に、銀粉を以て北斗の七星を描いたが、白百合の影の屈折して碧潭に落ちた趣がある。これを開いた時、酒に煙草に、恐らくは、色に欲に、自ら濁れり、汚れたりと云ふ彼が頭にも、明星ケ嶽の星が輝く。
面を上げつゝ、
「其の餘りに蠅に惱むのを見兼ねて、——私が幼少の折にです。故鄕の家の隣家に住んで、扇子を折るのと、そして金銀の箔を移すのを職にしました、美しい婦人が、自分で整へてくれました、此の扇子です。
蟲も避けます。就中呪詛ふべき蠅は、身の邊に近づきません。
私のやうなものの手に有つたのをお厭ひさへなくば、貴女、お持ちなさいませんか。」
要を其方へ、端を取ると、白い流に眞蒼に影が澄む、仰ぐと二つ三つ星が白銀の光を射た。
「何うぞ。」

女性は溫淑に會釋した。が、畫工が、岸を踏んで、其のまゝ飛石の如き流の岩を渡らうとするのを見て、紫陽花の片隅青く、周圍淺葱に、核の碧の輪の中に、雪のやうな手を上げて、

「それはお危い、此方へ。」

と云ふと、もとの丸木橋を渡返す處を、逸疾く此方も進んで、流の響く眞中で行逢ふ。

其の面影は目前。姿は山の裾を、向うへ遠い。

差出す手が達くか、と危んで腕を伸すと、扇が拔けたやうに輕く成つた。ト女性の手が要に添つたに違ひない。星が颯と流れたやうに、爾時瞳がちらついた。

足も踏留らないで、逆に水に落ちさうなので、橋に堪らず飛ぶやうに身を退いた。

「お嬉しう存じます、明日お返し申しますよ。」

と、流に身をかはすやうに、姿が向かはると思ふと、水も、谷も、峰も、足下の石も、紫陽花の色を映した。月が白銀の如く出たのであつた。

五

「――實は虛言を申しました、なんとも申譯がありません。……其の扇子は私が自分で描めましたのです。唯紺青に塗潰して、北斗をうつしましたばかりですと、そんなでも有りません。裏に

紫陽花が描いてあります。自分でいたづらをしました。それが如何にも不出來なだけに、お恥かしい、何とも申しやうのない次第なんです。」

夢、現、一夜を惱苦んで寢なかつた、翌日の同じ時分、畫工は、紺絣に麥藁帽でも、自分だけ謹んだ態度で、宮の下から、青葉の谷を、蛭の緣の五百尺、堂ケ島へ恐る〳〵降りて、魔所か、はた神仙境。傳說のある洞穴の奧へ入るやうに、谿川へ出て見ると、……背後に凭掛る椅子のやうな巖が高く、前に頃合の石がある。昨日……渠自身が居た處に、品の可い美しい婦人が居て、こぼれ咲の常夏に柔かに褄を投掛けた。芒の青い巖を辷つた夕陽が陰つて、天然の椅子に腰掛けた端麗なる面の色は蒼白いまでに見えて、流の飛沫は、裳の小草に、玉の夕露置添へつ。

正しく其の人、姿も風采も、しかし、昨日のを櫛卷に上げて居た。それが華奢な身と、白い頸によく肖合つて、思つた姿よりも婀娜であつた。

そして紫陽花のかはりに、やゝ白の勝つた涼傘を、背後の巖の根に立掛けたが、無雜作に置いたらしく、傾いて今にも倒れさうなのが、常夏の一本に輕く留つて居た。

時に、虹が掛つたやうに、女性の膝に、紫と緋と萌黃と綠と青と、五色に染めたものがある。

――此が清川夫人、照樹であつた。そして、膝にしたのは、眞綿を繪具で彩つた、細長い、お手玉のやうなもので。夫人の生れ故鄕では、女の兒たちが、袂に入れ、懷に持つて、細く指で引斷

つては、唇でフッと吹いて遊ぶ。幼い時から夫人は此を背負上の中に藏した。今も其のすさみが留まない、で、紙入も其處に入れるのが癖なのである、と後で知れた——

彩に目を引かるゝ、虹の錦の下に、如何に、其の七星の扇子があつたではないか。

畫工は電の如く瞳を射られた。

其の婦人は、扇の錦を取つて、唇に當て、眉を開く。あれ〳〵口紅が翻々と拔けて出る、常夏が散る、花が飛ぶ、水の上を、山の腰を、萩のやうな蝶が舞ふ、翡翠の影が燦めき、紫陽花の影を刻む。

目も綾に、ちら〳〵と色を交へつゝ、眞綿を齒に織る雪の手は、白魚の指をかゞつて、五色の梭を投げるのである。

此の風情を、見るともなく見ないともなく、流に臨んで、あの丸木橋の半ばなる處に、輕い洋裝して、兩手を衣兜に入れたまゝ、熟と水を視めた紳士がある。日は一面に流に當つて、涼しい光線は赫燿として、白いパナマ帽を射た。が、痩せた頰に髯の濃い、眉の迫つた、金緣の眼鏡の煌々と輝く一人、それが博士であつた。

思切つて、畫工が衝と出た時、虹の錦の幼稚遊戯に餘念のなかつた夫人は、ものに驚いた目で、屹と見て忽ち面に色を染めた。が、嬌瞋ではない、初々しい物恥をしたのである。唯、茅花のやうに細く揃つて掌にすつと入ると、虹の錦は帶の下にハッと消えた、胡蝶が夢を覺ましたやうに——

「昨日……」とばかりで、畫工は一寸口籠つた。

夫人は袖を合せた。が、扇面の星は隱れず、燦として、手弱やかな膝に重さうである。

「昨夕は失禮を……」と、正的に面も向けられず、手にした麥藁の遣場も覺えぬ。

眉は優しく、目には情があつた。が、それは、年紀の若いものの氣が違つたのを憐むやうに見えて、夫人はまだものも言はぬ。

「薄暗がりで、お見忘れと承知します、私は其の扇を差上げました心得違な男なんです。」

熟と視た夫人の目が、其の扇面に注いだので、あゝ、漸く狂人でないのを認められた、と吻とすると一所に、橋に立つたまゝ、歩行寄りもしないで居た、紳士の目金が、其の星を射て輝くのに心付いた。

「昨夕の事を考へますと全然夢です。が、現のやうに、一晩苦み拔きました。唯一夜ですが、幾日、何月、惱んだか知れない氣がしますんです。

私は、此の炎天を、山中轉がつて歩行いたんです。一刻も早く、其の扇を返して頂きたい。然うしないと、箱根の山のあらむ限り、蛇の蛻のやうな、虛僞の罪が消えません。

私は、あの後で、眞蒼な月の出に、目が明るくなつて心付きました時には、貴女を、たゞ人とは思はなく成つたんです。……今日こそ恁うして不思議にお目に掛れますけれども、昨夕の處ぢや、空か、雲へ歸つてお了ひなすつた方だらうと思ひましたものですから……實は、神か、美しい魔かと思ひました。

お目に掛つた處が、此處なんですから、又此處へ來て探しました――夢の中で――幾日も幾日も、へと〳〵に成つて、大地獄も駒ケ嶽も這つて歩行いたあげく、とゞの詰り此の磧へ來て倒れました。夜露が掛つて、我に返ると、一面の月の姿見に、雪の簾を捌く瀧の前に寢て居ました。紫陽花が燐火のやうに四邊を照す……それが昨日來がけに見ました、其處の白絲の瀧なんです。……夢心地にも、確に。……

すら〳〵すら〳〵、恁う魂を眞綿で撫でられる瀧の面を、ふと蘇つた氣で恍惚と見て居ますと、其の水晶の簾の影へ、薄くお映んなすつたのが、其の面影――貴女の姿で。

手に紫陽花の大輪のむらがるばかりなのを持つて、月に輝く瀧の中で、莞爾なさると、襟の處に、颯と扇子が見えました、密とお招きなさるやうに動いたんです。

眉が判然と成る、唇も見えます。

蠅をお拂ひなさいますのか、自分に來いと言はれるのか、其の辨別もなしに、頭も碎けよと瀧

へ飛込むと、飛沫と泡で、目も口も、吹雪に捲かれて、あつと噎せながら、ずん〳〵ずん〳〵底も知れない穴の中へ落ちて行く、落ちて落ちて落ちて行きます。

唯、さかとんぼを打つて引掛つたのが、大な車です、あの屋根ほどな、水車です。身體が其に引搦んで、ぐる〳〵ぐると廻つた時の苦しさを、お察し下さい。……

目が覺めますと身體中、浴びるばかりな汗でした。」

畫工は額の汗を拭きつゝ、

「其が、心の迷から、唯ひよんな了簡違ひをして、日和や風の嘘を吐きましたのなら、其の婦人が、神であらうと、魔であらうと、そんなに苦しみはしないのです。

今しがた、底倉から宮の下を通つて、此の堂ケ島へ下りますのが、まるで罰で、生命を取られます思で、五段の上の、あの大水車の夢を其のまゝに見て、切立の崖を下ります時は、がく〳〵震ふ膝を、木の根、岩角に縋つて、摺下りたほどでした。

其の星の扇子は、――懺悔をします――實は私が描きました。」

俯向いた畫工の瞳も、博士夫婦の四つの瞳も、一つ足りない星の數ほど、齊しく羅の膝に注がれた。

夕日の中を風が吹く。常夏は靜に、芒が靡く。……流は颯と飛沫して、夕暮の幕は、淺葱を投

げた。

「――私は伊勢の津の出生ですが――小兒のうち蠅に集られますと、あとが疱瘡のやうに成つたのは事實です――それを可哀相だ、と云つて、――隣家に、母娘ぐらしで扇を折つた美い娘が、紺青に星の光る扇をくれましたのは、決して虛構ではありません。

扇は事實、可厭な蟲を除けました。

が、二十年も以前の事で、今思ひますほど幼少の折には其の扇を價値の有るものとは思ひません。秋は等閑に、冬は忘れなどしますうちに、家が流轉し、私が放浪します間に、何處にか、しまひ忘れて見えないやうに成りました。

年に、月に、可懷しい思が增します、母娘居ました。其の娘は――綺麗な――それは美しい人でした……」

稚き日、故鄕の家の隣家に棲んだ若い扇折の話をして、其美しさを言つた時、畫工の目は、扇を載せた夫人の羅の膝に注いだが、其の瞳は此黃昏の谿間に蒼穹の星を望むが如き現なの色を湛へた。

靜な餘り、谿川の迅き瀨に誘はれて、夫人の裳も、博士の肩も、丸木橋も、山ながら、岩ながら、さら〳〵と搖れつゝ戰ぐ。

「處女では無からう、年の少い、誰かの未亡人か、極祕密な、人の妾でもあらうと云つた女で。……拔けるほど色の白いのが、淺葱の半襟を深く合せて、櫛卷に結つて、月に照らされるやうに、小座敷の薄暗い裏で、箔を移して居たのを覺えて居ます。

春も夏も極つて同じ風俗をして居たとは決して思ひません、が、今も然うした姿が一番目に殘つて居るのです。何處のうまれなんだか、其の頃、私ども町內でも誰も知らなかつたやうで。美しい人自身は、其のうまれた家が、或年の秋、土地の洪水のために滅びたので、流れ〳〵て來たのだと云つて居ました。

草双紙が大すきで。……私の母親の記念のを貸しますと、夜の間にそれを讀んぢや、翌日遊びに行くと、靜に竹の箆で金箔をあしらひながら、繪解をしてくれたものです。優しい、輕い息で、ふツと吹いて、帳の面へうつすのが、すツと黃金の波が打つやうで、それが一ツづゝ譚の句讀に成る。

一册。其の人が、自分で持つて居る繪本がありました。私は內のより、夫を珍らしいものに思つて、時々繰返して見ましたが、皺が寄つて、そして煤けて、ちり〳〵に成つて、表紙なんか半分取れて居たやうです。洪水の時水浸しに成つたのが、それ一册、形だけ殘つたのだと言つて居ました。小兒心にも、此の水は潮が交つた……家は何處か海に近い大川の末に有つたのではなか

らうかと思つたんです。小雨でも降るか、天が曇つた部屋の陰氣な時は、しつとり濡れて、手に觸りましたのですが。……

何の本だか、どんな繪が描いてあつたか、うろ覺の鞠唄の前後が消えたと同一で、有るやうで無いやうで、一向取留めては記憶して居ません。が、唯一枚、幾度も〳〵其處を見る、又開けると屹度其處が開く。尤も處々、濕けたなりで附着いたまゝの枚數であつたのでせう——大な水、浪を打つ流で、兩面見透しに洋々と天を浸す……渦を卷いた處々は、物凄いくらゐだつたんです。繪であるだけに、見て居て可恐しいとは思ひません。湧いて盡きない、清水の、さら〳〵と音もしさうで、涼く可懷い心持もしますし、計り知られぬ水の力と、其の勢をも思はせたんです。

其の渺茫とした流の、遠い遙な向う岸、殆ど一筋の地平線の果かとも見える岸に、下髮で、緋の袴を穿いた上臈と云つた姿のが、唯一人立つて、荒浪の立つ川の面を、却つて仰ぐやうに熟と視ながら一方の岸を招くらしい、袿の袖に扇を翳して居ましたのです。」

——夫人の細い指は、わなゝくが如く膝の其の七星の扇子に掛つた。巖に摺つても落ちさうに、話を聞惚れて居たのであつたに——

「上臈の手の其の扇子には七座の星がありました。

ですが、然し夫は一種の錯覺、幻影に相違ありません。上臈が翳した其の扇子の面に、星があ

つたと思ふのは私の氣の迷ひでせう。——日にも、月にも、第一、恁うして年紀をとりましてから然う信ずるやうに成りましたんですから。でも自分だけでは確に疑つては居ないのです。

處で、大川を隔てた向う岸に、一人緋の袴した女の立つた繪の譯は、何故か、双紙の繪解、話の上手だつた扇折の婦が語つて聞かしてくれませんでした。知らない、と言ひます。氣味が惡いからとも言ひました。洪水に浸つたんだから皺に成つて、字が亂れて假名が讀めないんだとも言ひました。

後で考へると、緋の袴の意味は今以て解りません。けれども、其の空を浸した流の樣子が、何うも洪水を描いたものらしい。それだと同じ災害で家が滅びたと云ふ人に取つては繪解も苦痛だつたでせう。が、それを濁流だとも泥水だとも思ひません。なんとなく、繪本を穿ち、紙を透して、清い流が溢れるやうで、今でも其の繪を思出しますと、渴かない咽喉にも、其の谿河へ倒に口をつけたいほど飲みたく成ります。否、それには限りません。私は臆病で、臆病よりは卑怯で、生水は飲得ません、くだらない癖がありますが、川に限らず、清水に限らず、甚しいのは、沼、湖、あの海でさへ、繪に描いた水でさへあれば、見さへすれば、堪難いまで飲みたいのです。續いて、月に、雪に、一本の草の花に、それが實物であるよりは、繪であるものに、却つて、あこがれもし、見惚れもするのです。

それほどまでに、深く、其の大川の繪が心に刻まれましたのも、不斷然うして幼い目に彫着けられたばかりではありません。……扇折の婦が、私に、先刻からもお話申しました、星の扇をくれます時に、（……い、ものを上げませう。）然う云つて、例の繪本の、鏡臺の上に置いてあつたのを取れ、と言ひます。

私が擴げた時に、あの流が颯と出て、其處に平骨のが挾んでありました。開くのを見ながら、其の人は、折つた扇の地紙の骨を刺す綴目に、朝顔の蕾を吹くやうに、輕く通はせて居た呼吸を留めて、俯向いて熟と視ました。

濡々とある瞳の慈愛が、草に溢れて輝くやうに、紺泥の地に煌々と星が走つて、そして、箔を扱ふのを見馴れた目に、其の扇の富士をうつむけに、朱い唇に含んだ地紙は、蒼味を帶びて、金色に輝いて見えたのです。

――實は其の扇子です。」

前原は、それとなく丸木橋に彳んだまゝなる博士を見た、瞳を夫人に見返して、

「夫人、昨夜、貴女に、……欺いて差上げましたのは。……

其の實の扇子でありますなら、確に不淨を除けました。蟲を拂ひました。掌を打つて蠅が落ちたのです。

雖然、いま、其處に、貴女の膝にお置きに成るのは、天の寶と、押入のがらくたほど違ひます。眞赤な贋ものです。申上げました通り、當時を想餘る可懷さに、私が自分で認めました。然も裏に描いた紫陽花は、一昨日、底倉に參つてから、旅籠屋の庭のを視て寫したんです。

何とも申譯がありません、罰は自分で處置しませう。私をお憎しみに成りますまでも、罪はお返し下さいまし。……」

夫人の膝に、扇子は其時裏が翻つて、紫陽花が靑く咲いた。

博士が橋を渡返した。下りると橋板が幽かに鳴つた。

會釋と一所に、其の引緊つた唇を解いて、

「まことに面白うございました……お伽話ですな。」と、頤を暗く唇に微笑を含む、夏帽の廂の陰に痩せた凛々しい面影である。

此の微笑を、違つた意味に取つたらう、前原は颯と色を變へた。……言語に意氣組んだのと、事柄に激したのと、未見の婦人に對した世馴れない男の羞恥とで、血の上つて居た瞼の汐が衝と退いた。――お伽話――噫、流の絡ふ、水の飛ぶ、谿川の大巖小巖は、一ツづゝ聞いて點頭くであらう、と信じたのに――

「家内は、然う云ふ事が大すきなんです。いや、難有う。」

一揖するのに、思はず禮を返しながら、畫工は俯向いたばかりで拳を握つた。彼は恥ぢ、且つ憤つたのであつた。

「お前さん、それをお返し申さないか。」

夫人に言つて、靴をずらして、

「貴下、扇子は此處で今しがた拾うたのですよ。」

「えゝ。」

膝の扇子をきり〳〵と緊める、と其の音もして、描ける星がちら〳〵と、水の流が颯と響く。

夫人が手にして、すらりと立つた。

「お詫は私どもで申さなければ成りません。——人様のものをお斷りもいたさないで、餘り綺麗だものですから、つい拾つて持ちました。……御免なさいまし、此はお返し申します。……其のかはり同じ繪を別の扇子にお認めなすつて、それを私に下さいまし……おだましなさいましたお報いです。」

いづれを其とも辨へず……前原は手を差伸した時、恰も流を隔てた向う岸の、一人不可思議な姫の手から、あらためて、こゝに授けらるゝ心地して、わがものながら、及腰に、半ば跪く狀して受けた。

——清川一家、夫妻の人たちと、前原との間は、恁うして此の時結ばつたのである。——

夫人の低聲で云ふのを聞きつゝ、博士は、何か快く頷いたが、あらためて前原に言つた。

「御伴侶は多勢でおいでなさいますか。」

「否、私一人です。」

「御徒然でせう。お遊びにおいで下さい。家内も是非お迎へ申したいと言ひます。」

「奈良屋に居ます。……すぐお立寄り下さいませんか。」

それから更めて知己に成つた。あとで、前原は故郷の其の扇折には一人の年老いた母親のあつた事——其の媼は七十の上らしかつたが、矍鑠として壯健で、好んで山遊びをした。……近い山、遠い峰、五里や三里は日の内に往還りして、冬籠こそするけれど、秋は固より、夏も、春も、種種な茸の類を、籠に充て、苞に提げて歸る……

茸を選み、名を分けて、いつも界隈へ配つて、それを娯樂にして居たが、斑猫と砒石と共に世にも可恐いものに數へる、紅い菌、紫の茸、いづれ素性の知れないのも、一度其の姥の手に掛つたものは、未だ嘗て怪我にも人を過たなかつたので、名のない菌は總じて姥茸と云つた事。……

其の茸狩の山求獵に、谷を深く岩を分けると、森が包んで、草の綺麗な、綠に澄んだ大沼の岸で、甲の紅い蟹と、山姫、山神の狗子と稱へる鼻の黃色な獸と、追ひつ追はれつ、眼を聳て、鋏

を擧げ、脚を敲き、背を返して、兩個の間に爭つた、……其處に落ちて居た扇子である。姥が拾つて歸つた、と扇折の語つた事――まだ、其の媼が卜筮を見、禁厭をし、施の藥を煉つたので、近隣では由緒ある巫女であらうと云つた事。自分も一度、其の手段は忘れたけれども、懼みに堪へないむし齒の疼痛を、扇折の膝に居て、媼が呪つて、そして立處に驗のあつた事。

却說、其の家は、自火とも云へば、或色狂人の放火だとも傳へる、濃い陽炎に包まれた朧の中に、一軒燒して、山も燃えつゝ春の半、霞のやうに雨に消えて、それから行方の知れない事……

前原は自分の家から、居ながらにして、能く其の隣家の居間の見えた二階の窓の、小緣先、そこには幼遊びに取散らかした繪具皿の中に頰杖をついて、茫乎燒あとを見ると、其處に茅花が咲いてからも、小暗い窓の細い廂の裏に、青い襟して、白い顏に、颯と黃金の箔が映つたり、地紙を口に含んだりする幻が消えないで、小兒は瞰下すのでありながら、却つて空高く天守の物見に、奇き嬪娥を打仰ぐが如く思つた……

（これを奈良屋で話した。尤も機會を得て、工學博士の夫人にのみ物語つたのであるのは言ふまでもない。）

博士が聞かばお伽話。前原には事實であつた。

畫工は、星の扇の幼い記憶を、御伽話と言はるゝにのみ、不快を感じたが、學識と、人格と、

風采と、工學博士に敬意を拂つた。

特に落ちて居たのを拾つた、と云つて、虛僞の罪を許した雅量に服した。

尤も夫人も、扇子は拾つた事にして、恥を知つた畫工の懸念を消した。當座はしかし、日を經ては、前原も其のいづれかに且つ惑ひ且つ疑るやうに成つたのである。

箱根で、强ひて夫人に同じ扇を、新しく調ぜしめられたのは、前原が謝儀を得た自家勞作の最初のものであつたと言つても可からう――然も格外な紅白の水引で。

御最員は引續いた――玉章は花の雲、月の中空を、いつも遙に、しかし繁く通つて居た。

が、爰に此の編を見給ふ方々――前原も亦思つても見たが可い。恁うして結びつけられた夫人との間を、博士は知らず。其の周圍、一家、親類緣邊は何と見よう？　五彩につなぐ繪の具の絲も、世間の目には、怪しき蜘蛛の巢でなければ成らない。

さればこそ、夫人のためには恰も世に處して舅の如き夫の先輩たる老醫學博士松澤の玄關先、煉瓦塀の宵闇に、不用意ながらも額を破らるゝやうな事が起つたのである。――

清川博士が京都の某大學を辭して、今度九州の大なる炭礦を司配する事に成つたために、諸般の用事と支度を兼ねて上京した。が、其の着京の日と時は、豫め夫人から前原に音信して通知が

あつた。着京次第、其の日に訪ねようと言添へた上、あらためて汽車にのる時電報して、それには道も順なれば、前へ老博士の許に寄る、出迎も多し、内で待つやう、と注意をして來た。

三年越に相見るのである。前原は貴夫人に對する禮と、美しさに向ふ憧憬と、星を望む可懷さとを以て、席を拂つて褥を直して待つた。

時は來て、時は過ぎた。日が暮れて、程經つて、夫人の到着は遲過ぎる……

赤坂新町の借家の門に立つて、町の燈を夢のやうに視めて待つた前原は、其のまゝ帽子も被らないで、腕組をしたなり通りへ出たが、あれから溜池の橋を渡つて、紀尾井坂の櫻を縫ふ……夜ながら、暗ながら蝶の翼は輕かつたのである。

其處に松澤博士の邸がある。霞をかけた窓明を、高樓の青白い硝子窓に望んだ時、前原は地紙を含んだ星の扇のおくりぬしを、目前想起したに相違あるまい。

夫人はこゝに道寄した……陰に待つものの果敢なさは、さてさもあるべき事ではないのに、雲にかけた通路、浮橋を渡る人は、魔の塔の如き此の館に抑留されて、一室に閉籠められでもして居るやうに、心も現で、うか〳〵と石の門を入つて、植込の暗い處を徘徊つた。

「汝、盜賊！」と喚くや否や、見上ぐるやうな玄關番が、突然前原の胸倉をぐいと取つて、手許へ一つ引いて、ドンと突いた。

「何。」と振向き立直らうとした。が、思返して、蹌踉けながら退く途端、足が浮いて、門柱に額を打つた。

夢から覺めたやうに家に歸つて、魂が血だらけに成つたらう、と思ふ前原は、唯其の額に疵ついたばかりであつた。

其の三日目の夜なのである。

五十稻荷の御手洗の音。……

六

五十稻荷の御手洗の音。

「――忘れもしません、箱根ではじめて、貴方にお目にかゝりました、あの夏――

……知つて在らつしやる通り、一夏東京で暑中休暇をしたでせう。主人は黑澤尻の老母の許へ歸省をしたんですが、私は御免を蒙つて、紀尾井町に居ましたわね。箱根から歸つてから、貴方とは餘計御懇意にして頂いたけれど、何しろ、あの松澤さんの家に居るんですから、然う〳〵我儘ばかりは出來ませんかつたのね。

九月のはじめでしたつけか、主人も歸つて、最う京都へ引揚げようと云ふおなごりに、松澤さ

んの催で、川開きの見物がありました。

爾時が柳光亭です。曇つた日でしてね。陽氣はづれに薄寒かつたわ。……車で九段を下りる時なんか、村雨のやうなのが颯とかゝつて、母衣を下して小さく成つたの。

でも花火は賑よ。お茶屋全體、まるで演劇の賣切てッた混雜なんです。私たちは小人數だし、奥庭の張出しに居たんです。

仕掛も狼煙も澤山見ました。

何ですかね、あの大川の向う岸に繫いだ、からくりの大きな船が一面に花火に成つて、牡丹も藤も一齊に咲いて燃えると、其の美しい火の中で、眞白な振袖を着た女が扇を開いて踊りました。

——眞暗な晩なんですよ。灯で晝間のやうでしたが。

可ござんすか。

何心なく背後を見ますとね、總二階から廻り緣、下座敷、張出を掛けて、唯處々、漸と緋の毛氈のちら〳〵見えるほどの人なんでせう、……それこそ美しい人たちで、牡丹、芍藥、百合も、菊も、一面に咲いた小山を其處へ築いたやうです。

其のね、二階と下座敷と重り合つて、廂へも張出を拵へたか、と思ふ人の波の、眞中頃へ、ぶくりと浮出した人魚のやうな、白髮の婆さんが一人。

それがね、いま花火が燃盛る向うの船を恁う、少し伸上つて、仰向加減に熟と視て居るやうでしたつけ、……咽喉の下、襟の處へ兩掌を合せて、あの、三日月樣を拜むやうな手つきをして、トン〳〵と合せると、上下前後、右と左とに犇々と詰合つた、何千とも知れない人が、殘らず、同じ形に手を合せました。白い鳥が群がつたやうでした。

仕掛花火に、喝采をしたのでせうけれど、それが不思議に綿を敲くやうで、一つも音が聞えませんでした。……

哄と云ふ聲に紛れたんでせうか知ら。

まだ變なのは、續いて、直ぐに其の婆さんが、首を心持右にすると、衆が揃つて顏を右に傾ける。左にすると、矢張揃つて左に傾ける、ニヤリとすると、波を打つやうに不殘一時に莞爾した——變でせう。

そしてね、誰一人、其の婆さんの顏も形も氣を付けて見たものはないのです。

私一人、振向いて見て居たのを、向うで心付いて、ニヤリと其の笑つた顏……熟と私を瞰下しました。

私は悚然總毛立つたの。そして何を着て、何をしめて居たんですか、單衣が肩から蒼く成つて、丸帶が眞黑に成つて、椅子を離れて卓子に片手を支いて立つたなりで、白足袋の爪尖まで、じろ

りと視られたやうな氣がしたんです。
手で縋らうと思ふ主人も、紀尾井町も、其奥さんも、皆、見物の人と寸分違はない同じ形をして居ます。
……然う思つた時、花火は消えました。埒に飾つた提灯も、一つ川風にふつと消えたんです。
其つ切、何處へ紛れたか、大勢の陰に成つて、其の婆さんは、影も形も見えなく成つて了ひましたんですがね。
當座ばかり。別に氣にも留めないで居たものですから、誰にも、――前原さん、貴方にも今夜此處でお話しするのがはじめてですわね。
それよ、それなのよ！」
「えゝ。」
「まさかと思ふんですけれど、先刻、電車の中で私の髪を引摑んだ老婆ですがね、考へれば考へるほど其の時の婆さんに肖似なんです。もうね。」
夫人は背を扱いて、散る花瓣に肩を搖つた。
「居ても立つても居られない、髪が粘りでもするやうで我慢が出來ませんから思切つて洗ひますわ。」

前原は匕首を拔いたやうに、手を堅くしつゝ、止むことを得ず柄杓を取つた。
「ですが、貴女……」
颯と捌いて、
「まるで絲です、操りの。此の髪の毛の數ぐらゐ方々で勝手につかまへて引いたり廻したりするんだもの。可厭ね、面倒くさい。泳がうと思へば泳いだつて可ささうなものを、氣味が惡いからつて髪を洗ふのさへまゝに成らないぢやありませんか。
操られないぢや身動きも出來ない、人形も同一ことね。」と言ふ、……衣紋を拔いた頸が白い。
「此の首が、すぽんと拔けたら何うでせう。」
「奥さん。」
「手水鉢の中で仰向けに成つて、もう一度、……前原さん、貴方の顏を見るか知ら。」
「奥さん。」
「それとも、俯向けに落ちたッ切で、主人の前に恐入つて了ふのでせうか。」
「そんなことを、貴方、串戲にも云ふもんぢやありません。」
「否、恁うした處を柄杓で打つて御覽なさい、覺悟をして居るから、さあ。」
と横顏に髪を分けて、眉うつくしく額をあげたが、花明に匂こぼるゝ。

「お待ちなさいよ、然うする前に、奥庭の、其の櫻の樹に結へられて、一折檻される處ね。不義は……何とか云つて、お腰元が。

さしづめ、今夜の此の樣子だと、私が責殺される役なんです。

をかしいねえ……殿樣や御家老の彈正は、一端女を成敗して、泣かせ、悶えさせ、苦ませたつもりで居たものなんでせうけれど、櫻に結へられたお部屋樣や、島田の方は、突付けられた白刃の尺で、御前の鼻の下の寸法を計つて、斬られる胸に、くす〳〵と嘲笑つたでせう。

だつて可笑しいんですもの。お殿樣の心根が、馬鹿々々しいんですもの、可哀なくらゐですもの。此にお附添申して、割竹を持つた御老女なんぞは、ぼうふら同然ね。不義したお腰元や、御寵愛に較べると——

でも、世間ぢや、演劇を見ても、殺す殿樣に噴飯さないで、殺されるお腰元に泣くんですもの。女は弱いものにされるから口惜いわね。」

思ひも掛けず調子が曇つた。

此の易からぬ言の裡には、兜の下のきり〴〵すで、途中で黑髪を洗つて行く、宴席に於ける夫人の胸の尋常ならぬ苦痛が籠つて聞えた。

あはれ、それとても、爲べき方なき黑髪の亂である。

前原は胸をせめて歎息した。

「あゝ、實際、或時は、貴女を人間とは思ひませんでした。否、人間以上だと思つたのです。——扇子を返して頂いた時は、事實私は貴女の前に跪きました。其の貴女を、雲の上から、少くとも箱根から下界へ引下して了ひました。こゝに水があります。……見るにつけても、神々しくつておいでなすつた、早川の青い流に紫の花の影が思はれて成りません。私ゆゑです。照樹さん、尤も、御手洗の水は清い。或は汚を拭ふのには谷川に增るかも知れませんが、御婦人が衣紋を亂して、髮を洗ふべき場所ではありません。

御身分として、貴女は高樓の瑪瑙の盥に、勝手に溫泉を引いて、入浴をなさる事もお出來に成るんですのに……

もしか、私の血でよいものなら、腕を裂いて、髮を濯いで差上げたい。」

「まあ、嬉しい、貴方の血だと思つて可いの？」

「……」

「勿體ない、せめておときなすつた繪具の紅だと思ひませう。それで十分。さあ、思切つて浴びせて下さい——おゝ涼しい。あゝ冷い。骨も冷えます、斬られるやうです——前原さん。お腰元は本望よ。」

すらりと扱いて、振仰いだ、小袖に雫させまじとて、前原は逸はやく亂れかゝる髪を肩に隔てて、衝と身で庇つて、絣の其の羽織の袖を、夫人の肩に敷いたのである。

二人は、それから裏町を縫つて錦町の通へ出て、青年會館を斜違に見るあたりで、通掛りの車を呼んだ。帳場のではなかつたけれども、夫人が熱を病んだあとのやうに太く疲勞れて、手を放して一人にしたら、街樹の柳の靡くのにも堪へさうには見えなかつたからである。

車は、楫を揃へて來たのではなかつた。

「最う一臺。」

「おう、兩國だ。」

車夫は向側をちら〳〵行く夥間の提灯に合圖して引寄せた。

「松岸だ、知つてるだらうか。」

と、前原が先を云つたのを引取つて、

「松岸だぜ。」

「へい。……お召しなすつて。」

「一所だがね、揃つて先方へ着けるんぢやないよ。御婦人のだけ玄關へずつとお着け。私の方は半町ばかり手前で下ろして貰ひたいんだ。可いかい。……二臺分拂つた。些とだが祝儀も一所だ。

さあ、照樹さん――」

前原の背後に隱れる狀して行んだのが、乘る時、蹌踉めいたやうに泥除に密と手を縋つた。

濡れて雫するやうな櫛卷の艶を、兩方から車夫はじろりと見た。

「行んねえ。」

「あいよ。」

御藏橋の際だつた。前原が乘つて先へ立つたのが、がたりと留まつて、

「待つとくんねえ、旦那……濟みません。」

フト提灯の灯が消えたのである。

一所に留まつた背後の車を振返つて、十日も逢はなかつたやうに可懷く夫人を見ると、透母衣の裡に高く浮いて、何故か小袖青く、帶が黑く、藤紫の襟も淺葱に、顏が幻のやうに白い。

それが名殘に成つた歟。

照樹が其の裝で大廣間に立顯れた、其處には老博士夫妻と、他の二三の知己と、緣邊と、奥州黑澤尻の產にして、白髮の切髮、小紋の紋服、被布の裏が赤いとある、姑が控へた宴席の光景は、讀者の想像にまかせよう。

手取早く言へば、其の場から、夫人の行方が知れなく成つた。

前原は、尤も松岸の――それは路地の中にあつた――角に立つて……思切つた姿で、衝と横手の玄關へ入つた夫人の後姿を見たのである。が、立去りあへず……春の夜の大川端をふら〳〵と、

「あゝ彼處だ。」

と思ふ、何故か、夫人が怪い媼に見られたと云ふ、果敢なく消えさうな、青い衣、黑い帶、卓子に片手を支いて、十萬人の中に一人際立つた姿を、歷々と目に浮べた。

熟と大川の水を見て……都鳥の羽が煽ぐやうな流を傳ふ船の灯に對して、引入れられさうに彳むと、フト我知らず、をかしく掌を合せた。

「何處かに、婆が居て。」

ぎよッとした。が、松岸の藪は黑い。何にも無い。

「座敷には姑が居る……」

手を拂はうとして心付く、と指にすら〳〵とかゝつた美い色がある。淺葱、紫、紅も交つて――細い、薄い、何の鳥か綺麗な羽毛、と見えたのは、優しい夫人が、先刻車を雇つた時、前原の世帶を察して、背負上げの中を拔いて渡した其の紙入に植わつて居たらう、留楠木の香もして……人肌の懷しさ、幼きすさみを今もする、五色の眞綿の霞であつた。

潮は朧にさして來る。

――其の夜から夫人は行方が知れなく成つた。――

七

「入らつしやい。」

七草を左右に植ゑた、冠木門の門口、左右へ二人、膝へ組手で、腰を屈めて出迎へる。

「入らつしやいまし。」

隅田へ淡く、土手へ一刷、颯と小雨が掛つて居た。

此家の桔梗の薄紫と、女郎花の濃い黃を濡らして、苧桛を亂した雨の絲は、花に濯ぐとともに色を染めて、雫は元の露と散る。羅の友染の襲衣に似た、――茶屋、伊豆千の萩薄。

其處へ引着けて轅を留めた、俥の蔽を車夫が外すと、透母衣から、淸しい目で、立迎へた女中たちをひらりと見たのは藝者でない。

が、婀娜な下町の娘風俗。薄紺と淺いお納戶の、縞お召に、朱鷺色絽縮緬の長襦袢、緋の肌着の襟を絲より細く、薄藤色に小菊の半襟。群靑の地に友絲でいちまつを織つたのと、銀と淺葱に紅入にて、歌と景色を須磨明石、七夕染とも言ひさうな色紙短册、袱紗帶を、お太鼓にきりゝとして、起居に姿の舞ふやうな、薄手の乳の下すつきりと、緋鹿子の背負上は闇暗にも燃えて目に

艶な、白魚の簪の如き、少い女の血潮の影……
瞼も颯と照映えて、墨を流した雨空ながら、晴々とした薄化粧、生際のいゝ細面で、眦の切れた、凛々しい眉。一寸うけ口の口許に、年紀ごろなれば得も言はれず、十八九の愛々しいのが、前髪の幅を取らず、髱長に鬢を詰めて、大輪の膨りとした銀杏返で、なよやかな姿の靡く、腰にも堪へじ、と重げに見えたは、さくりと揃へた、根掛の眞珠。月草の露に白金を鏤めた花簪を左插に深くさした。
襟脚をくつきりと、やゝ屈む胸に、俥の上から——一度覗くやうに女中を見て——見上げる顏と、上と下、眉を重ねるやうにしたが、薄色の涼傘の柄に、迷子札に彩色をしたやうな初々しい信玄袋を、紐短に持添へたまゝ、雲を捌いて辷つた風情、鮮麗に、すつと出る。
唯、薄絹一重煙るが如き、雨の刈萱を兩方へ、女中たちは袂を分けつゝ、
「此方へ。」
「此方へ、何うぞ。」
一人、身を挺いて先に立つて、
「お連様は？」
「無いの。」

「お一人。」
「一人よ。」
「はあ。」
一寸立淀む、廂續きに敷石の水の上。
「萩の室へ御案内。」と、母屋の入口、供待の傍なる帳場に控へた、小さな圓髷、赭ら顏の女房が、見透かして首を振つて、而して恭しく頭を下げる。
「さ、何うぞ、貴女。」
カタ〳〵カタと導いた、女中の庭下駄の音さへ、砧を打つかと床しいまで、娘が運ぶ褄先は、夕顏の白さを露に宿す。
これに對して、迎ふる如く、取開かれた窓の色は、綠を透す芙蓉の花。
離座敷へ案内する。
女中が先へ、麻の葉絞の蒲團を直して、支膝で慇懃に、
「貴女、何うぞ。」
娘は濡色の美しい杏脫に細い裳。唯、女中を見て、莞爾しながら肩の撓ふ兩手を涼傘の象牙の柄に掛けて、指で彈いて掌で丁と壓すと、はずみに廻つて獨樂の如く、雪をまいて、くる〳〵く

る。

「巧いでせう。ほゝゝ。」

女中が、「まあ！」

女房が帳場から、

「あゝ、お供さんかい。」

「へい。」

「御苦勞樣。」

初秋の薄が戰ぐ、桔梗の露は涼しいが、まだ九月のはじめである。娘を曳いて來た車夫は、一汗入れた兩の肩、ばさ〳〵、と半被の襟を合せながら、絞つた手拭を鷲掴みで、

「へい。」と云つて、首を伸して頤をしやくる、渾名を、張子の猪とでも言ひさうな風體ながら、半被の紋は桔梗を染めてあるかと見える、折からの萩の雨。

此の伊豆千の女房は、世辭ものにて、

「まあ、まあ、よくねえお前さん、お供をして下すつたよ。土手は曳辛いでせう、些とでもおしめりがあると道が臺なしに成りますからねえ。」

「へい、何、未だそんなでもございませんよ。」

「と、云ふうちにもね、何だとさ。」

居合せた一人の女中を、言の綾に裏打で、

「此のね、お前、下町兒の若衆には、大橋が御難だとさ。吾妻橋には限らないがね。あれだけの長町場に成ると、そら山の手ぢや九段さね、小石川の何とか云つたつけ、傳通院の前の坂ね、それを上るよりか骨が折れるんだとさ。」

「然やうでございますかねえ。」

と中腰で、其の女中は、氣のない相槌。

「然やうでございますかつてお前、御主人が御主人でおいでなさるから、第一若衆の氣骨の折れること。此が又一通りの事ぢやないやね。そりや最う乘せ申しちや、花を一枝、眞綿を一把、それよりお輕いだらうけれど……

其の代り風はおろか、うつかりした露にもおあて申すまいだから、大體の苦勞ぢやないやね、ねえ、お前さん。」と笑つて見せる、上唇が顏より赤い。

車夫は、變徹も無い空笑ひ。

「えツへゝゝゝ、えゝ、まあ、然う云つたやうな勘定で……えツへゝゝゝ。」

「しかしお仕合せだ。御奉公をなさるなり、又お出入をなさるなり、あんな御容色よしの御供をして。

まあ何と云ふ御容子だらう。あの、七草の雨を簾に掛けた透母衣の間から、お美しいのが、ちらりと見えて、外した雨蔽を鬱陶しさうに、一寸屈んでお覗きなすつた横顔に、お髪の艶のよさつたら……土手の花道を七三あたりで、駕籠から田之助が出たやうだよ。あゝ。」

と女中を見返りながら、

「お前の年紀ぢや知るまいがね。大した太夫だつたよ、ね。お顔だちが肖て居なさる。すつきりとして、意氣で、婀娜つぽくて——そして御人柄な處を御覽な。藝妓衆と違つて又、下町の堅氣の大店のお嬢さんは、何とも言へないねえ。丁ど其の田之助のお七ッた風だよ、八百屋はそんな大店と云ふんぢやないけれどもさ——此の若い衆さんは、さしづめ吉三と云ふ役廻だ。蓑を着て忍んで來るかはりに、黒鴨でお供つてんだ。又威勢が可いねえ。粋ぢやないか、先の音羽屋ッて處なんだもの。」

「お上さん。」

と鼻の下を擦つたが、四十を越した髯むじやら、誂へたやうな鼠。但しぎろッとした目のきよとつく工合は、一癖ありさうに見える奴、擽つたさうな顏色で、……其手でぽんのくぼを、ぐ

い、と壓へて、

「お上さん——」

「あいよ。」

「串——串戲ぢやありませんや、串戲ぢや……」

盆を片手に中腰で控へた其の女中、思はず袖を口へ、笑を忍ぶ、と音羽屋の吉三はぎよろりと視て可厭な面。

女房、世辭は世辭で、家業は大切なり、書きかけた勘定を帳面に合せて、瞳の働き蟲の如く、

「金目だねえ。紹も繻子入とかつて當世な、お召から御帶、お頭のもの、然う云つちや失禮だが、どんなに内端にお見上げ申しても、雜と四五百兩。ほんの銘仙に前垂がけで、横町の緣日へお出掛けなすつたと云ふ、無雜作に、惜氣のない、些とも物欲しさうでない處が身上さ、餘程、歷乎とした御内證だよ。道理こそお供までが。——あゝ、樂な御奉公だと見えて、骨組が尋常で、力業をしなさるやうにやお見えでない。日にも燒けずさ、色が白いやね。」と、算盤をぱち〳〵ぱち。車夫は目玉をぱち〳〵。

何を隱さう、此の車夫、名さへ鐵五郎、と云ふ房州和田の船頭上り、銅にふすべを掛けたペンキ塗、荒縄で半鐘を縛つた如き風體怪しげにして巖乘な漢であるから、世辭も此に於てか奇拔を

極め、法螺の貝を見て義經と云ふに齊しい。
剩へ左の瞼に痣がある。痣鐵、苦切つた面色で、
「色の白いなあ、お上さん、世間の鹽が利いてゐるんで、細骨な處は目刺さね、此方あ樂な御奉公に違えありませんが、巣ぢやあ嗅あが腹を干して、口を開いて、小兒や泡を噴いてのめつてまさ……へい。もし、お上さん、御會計の次手に唯今のおともを頂きたうございますがね、……お取次を願ひてえんで、へい。」
「おともツて、お代ですか。」と女中が代つて口を出した。
肝心のメ高、上樣とやる處、此の時女房無言なり。
「えゝ、それともお歸りを待ちますんで？」
「おや！」と言ふ、片手で勘定書を盆へ飜然、一つ、指の尖で丁と壓すのが、迷子に成らない禁呪。
お次手で、と云ふんだよ、可いかいで女中を立たせて、其の口で、
「若衆さん、お前さん、お帳場の……何かい、お嬢樣のお内からぢやないのかい。」
痣鐵はむづ痒さうに、膝へ手拭を横撫でして、
「否、何、彼方あ、拾乘をなすつたんで。私は途中からお供をしたばかりなんでさ。」
女房は落すが如く算盤をカタリ、帳場に立掛けた。

が、凡そ怪しからないと云つた、叱言のやうな口吻で、
「おや拾乘を——まあ、へい——そして何處からなんだい。」
「仲店の前からでしてね。彼方樣ぢや、仁王門の方から出て來なすつて、前途は百花園と云ふんでしたつけ。」
「あゝ、丁度見頃だからねえ。」
「大橋を越しますとね、間もなく降出して一寸は留みさうもなく成つたもんですから、休みながら何處か支度をする處をッて、へい、……別に其の、御當家とおつしやつた譯ぢやねえんですが、豫て、えゝ、其の御評判なお家なんで、私が了簡でね、へい、實は、其お供をしたんで、却て御迷惑かも知れません。……娘ッ子のお客一人ぢやあ、ねえ、何しろ、對手が骨細の色白で、吉三と云ふ車夫だから納りませんや。」
女房敢て答へず、こぼ〳〵と續けて咳をする……風邪氣と見えて咽喉に手巾で濕布をして居た。
萩の室から、カタ〳〵と先刻の女中が、庭下駄で帳場へ來て、
「あゝ若衆さん。」
「今日ア。」
「お支度が出ます。そして、一杯飲つてお待ちなさいつて、お嬢さんが。」

「や！」と鉛の溶けた顔、何うだ痣鐵、大當り。

「お上さん、萩の室は？……」

帳場へ來て、訊ねたのは別の廣間を廊下づたひに、膳が出た後と見える、茶道具と、汗拭の絞手拭を下げて——歸つて來た、此の場面には新顔ながら、お繼と云つて女中頭。

「萩の室は……」

と、女房は鸚鵡返しで、

「……大したもんぢやないかねえ。」

「誰ですえ。」

「だれ、誰だなんて失禮な。蔭でもお前、そんな口を利くもんぢやありません、誰方とお云ひな。……誰方樣と。」

「あら。（と一寸手を上げつゝ）お客樣の事ぢやないんですよ、行つて居ますのはさ。」

「そりや、お仲さね。」

「あゝ、お仲さん、驚いて居たでせう、今通りがかりに私、向廊下から庭越しに見たんですが。お一人切ね。何うしてお一人でなんぞ來らしつたんでせう、……驚いたでせう。……嘸ぞ。」

「お仲はね、お前。あの、お嬢さんは、涼傘を掌で支いて、恁う、柄をくるくるとお廻しなさる、それがお上手だつて、お前、わざ〳〵其處の雨落の許へ一本持出して、忙しい中で、くるり〳〵と廻すんだよ。こんなぢやない、もツとお上手だ、それは巧い、何うして私に出來ないんだらうつて、赤く成つて息精張つてさ、それには些とばかし私の方が驚いたがね。別に何だよ、其他に、何もお前吃驚するやうな事も無いぢやないか、——あゝ、見えて、潮時に成つて又、お連が見えないとも限らずさ。いくら、お美しいツたツてお服裝が可いたつて、そりや憚りながら伊豆千だよ、殿樣方、旦那なり、隨分歷乎とした藝妓衆なり。へむ、餘り馬鹿にして貰ひますまいよ。」

と軒の雨脚は眞直なのに、女房は大につむじを曲げる。

「あれ、聞違へてお上さん、そんな次第ぢやありません。そして、御酒が出て居るやうぢやありませんか。お仲さんの酌いでる手つきが、サイダやシトロンではないやうでした。」

「あゝ、御酒は出たのさ、御酒が出たつて、そりやお客だもの、新姐だつて飲まないとは……」

「あら、あんな暢氣なことを云つて、お上さん、其處どころぢやありません。」

「え。」

「珍事重要てツた次第なんですよ。はてなあ、お仲さん知らなかつたつけか知ら。」と半ば獨言で考へる。

女房は乘出す……

「ぢや、お前は知つて居るのかい。」

「えゝ、ですから吃驚したんです。」

「吃驚？……はあ、道理で私も妙だとは思つたよ。」

聲を潛めて、

「ぢや、何かい、ふたなりかい。」

「……」默然で目を睜る。

「辨天小僧。」

「……」

「萬引かい。

それとも、何かい、あの、近頭流行る不良少女とやら云ふのかい？」

「あゝ、分りました。」と取つても付かず、唐突にお繼が云つた。

「だつて知つてるものなら、はじめから分つて居さうなもんだがねえ。……私かつて目は利くよ、何しろ商賣人ぢや決してないがね。」

「お上さん、些とお風邪氣でお加減が違つてますね。分つたッて云ふのは、然うぢやないんです。

——お仲さんが知つて居さうなものだと思つたのが分りました。此の春、新富座へ遣つて頂いて、一所だつたのはお冬さんでした——病氣で宿へ歸つて居ます——道理こそお仲さんは知つちゃ居ません、……私は劇場で見たんですよ。」

女房は又咳をして、

「だから、其の時の辨天小僧。」

「否、飛んでもない！　話しますと、お上さんも御存じかも知れません。萩の室のお美しいのは、彼の方は、淺草の茅町邊の大津屋と云ふ大地主樣の御祕藏娘なんですわ。」

「ぢや、紙問屋の大津屋さん。」と女房驚いた顏をする。

世にも知られた豪家なのである。

「東の三を取つて見物をなすつて在らつしつたんですがね、五十がらみの、はき〳〵した、大所には些と鐵火過ぎるくらゐな大御新姐、それが母樣なんですッて。小體らしい小僧がついて……何しろ、お年紀がらと云ひ、御容子と云ひ、見事にお目立ちなさいますもんですから、總見の連中なんぞ、舞臺より其の方を驚ぐんでせう。

此の土地の若い妓なんざ、およしなさい、と云ふのに、お召ものの噂やら、柄ゆきの評判やら。お茶屋で聞いて分りました。

一番末娘でおあんなさるんですッて。男のお子は一人もない。娘さんばかりお四人、總領に御養子で、あとは皆分家をなすつた。お宅には萩の室のあの方お一人、確お名はお親さんと聞きました。

親坊、親坊、時々親坊主なんて其の大御新姐がお呼びなさるのを、小僧さんの事かと思ひましたつけ。……亂暴な口をお利きなさるくらゐ、嚙んで了ひたいほどお可愛いんですとさ。

御總領のお姉さんが、また、あのお娘を第一御贔屓、大仲よし、御自分の事、物よりか、あの、お親さんの事と云へば、先へお騷ぎなさるんださうですから、御養子かッて、一通りのお扱ひぢやありますまい。

あの日は、忘れもしません。入のまばらなのが心細いくらゐ、酷いお寒さで、朝からちら〳〵催して居ましたのが、序幕が濟んで、二幕目の開きます頃から、大雪に成りました。

毛布にお蒲團、湯たんぽと云ふ棧敷のお支度。それでもお冷えなすつたと見えます——尤も身體がお弱くつて御病氣勝ださうで、直に風邪をめすんですつて——替りめ替りめに、江戸中の演劇を一巡りお廻んなさると、お疲勞が出て其處で御病氣。かはり目の初日があくと、其の日お床上げで、あくる日が髪結日で、三日目にお湯へお入んなすつて、四日目頃から木挽町を振出しに、トン〳〵双六の目が出ます。

勿論、およつてる間でも、有樂座に不時なみせものの面白いのがあつたり、義理の溫習でもあると云やあ、其の時から御本復。」

「へい——」と呼吸を引いて、さすがの女房も唾を飲んで、

「何でも藝事がお好きなんだらうねえ。」

「父上の大旦那が、評判のつかひてでおいでなさるさうですから、お親坊、衣ものが、派手だぜ、髷が出過ぎた、帶が厚い、白粉が濃い、なんのッておつしやるんださうですから、——成程其のお仕込みで御酒を飲るかも知れません……

踊に音曲、お手習、お遊び半分でせうけれど、お裁縫のお稽古、花、茶の湯、それで、ぺろぺろが出來ますとさ。」

「え、……お舐めなさる、ふう。」

と呻つて、

「其のくらゐな御難はあらうよ。」

「串戲ぢやありませんわ、お上さん、何處かの學校もおでなすつて、ぺろ〳〵つて、あの、外國の言語ですよ。」

「あゝ、然うかい。……私は何うかして居るんだね。ぺろ〳〵と聞いて冷りとしたよ、——些と

落着いて、」

と一服吸つて、

「ふう、成程……」

「それで居て、活きたお人形さんか何ぞのやうに、些とも、ものを知つた御様子がなくつて、それこそ、振袖で暖簾を分けて、ちらりと久松を、と云つた處が身上でありますのさ。」

女房は、田之助に其の顔立が肖たと言つた、お繼と云ふ此の伊豆千の女中頭は、知らず、當代の誰ぞ、最贔の役者に其の面影の通へりや、鼻息の暴さ一通りでない。

「眞個にいゝ月日の下にお生れなすつたと云ふのはあの方ですわ。

芝居の時だつて何でしたよ。然うやつて大雪に成りますとね、お上さん、先刻も申しましたけれども、お親さんはお寒かつたか、それとも御贔屓俳優に入の薄いのがお口惜かつたもんですかね、——しつかり今日はお見違へ申すやうです——其の緋無地の半襟に黒襦子の襟の掛りました異八丈のお衣で、鬘見たいな結綿でしたね、白粉がもつと濃ござんした。其のまんま花道へお立たせ申したいやうでしたよ。二幕目を見て居なさるうちに、大層お顔の色が蒼く成つて、頭を壓へて俯向いてお了ひなさると、大御新姐が、どつかりと、桟へ凭かゝつて居なすつた膝へ抱込むやうになすつて、肩を抱いて、頬摺をするやうにして、何かお言ひなすつたのは、容體をお聞

きだつたんでせう。

通の板戸から、右の小僧どのがスツポンへ消えるやうに、ひよいと出て行きますとね。お茶屋から女中が一人、男衆が二人、ばた〳〵で參りましてね。其の人數に包まれて、大新姐がお附添ひで、緋の紋縮緬の長襦袢の一寸端、褄先も見えないで、結綿の襟脚雪のやうに白いのばかり、宙に浮いて引揚げておいでなさいました。

お茶屋へ參つた時、聞きますと、奥二階へ炬燵が入つて、金屏風でおやすみなすつた處——寒氣がするのに、途中の雪に當つては、で茅町の御本宅から、おかゝりつけのお醫師に、義理の兄さん若旦那、乳母と三人、自動車で、大夜具、搔卷、羽蒲團、枕まで積んで駈附けておいでなすつて、枕許には、でん〳〵太鼓、犬張子。」

「まあ、可い加減におしよ。」

「否、其のくらゐな騒ぎなんです。そして御本人はお襦袢を召したなり、氷嚢を枕で、うん〳〵呻つて在らつしやると云ふんですもの。

餘り御果報で、それにお美しいから、何か憑ものでもしたんぢやないかなんて、皆で風説をして居たんですがね、何うでせう。

二番目が丁と開くと、お髪が綺麗に、お化粧が直つて、上下そつくりお召換で、濟して、棧敷

へお歸んなすつた。

そしてね、居まはりへ極りが悪さうに莞爾なすつた時の御様子ッたら。大御新姐が、其の様子に、ほた〳〵としたお顔色で、

（親坊、弱蟲で不可いの、些と運動に、氣に入つた俳優でも買はないか。）つて。

萩の室の、あの方の、此を聞いて、ぽつと赤くおなんなすッたまた、其の御様子ッたら、お上さん。

大御新姐は、舞臺よりか、娘さんの其の顔を御覽なすつて、やうかんを撮んであぐりと一口。

「何だねえ、手眞似なんか。」

お繼は我が頤を、手の甲で、すらりと掏つて、

「私は涎が垂れさうですもの、お話をしても取亂す……連中の若い妓たちはチュウ〳〵遣つて、しみ〴〵羨しがりました。お酌さんなんざ、お袖に觸つて、あやかるんだと云つて、幕間には棧敷裏に立つて待つて居たほどなんですもの、お上さん。」

「大津屋さんなら無理もなからう、何しろ大したこッたねえ。――おや、車夫……」

と目を返す。ぬいと立つたは痣鐵で、此奴が人を食つた事には、供待に有合はす伊豆千の番傘を眞直にさし翳し、半被を脱いだ薄汚い襯衣ばかり、とッちりものに代つて、ぶらりと一銚子提

げて居る。

「何うしたの。」と、お繼が驚く。

「丁どおかはり目なんで、へい、お使立て申しちや勿體ねえ、此方あ歩行くのが商賣で、何うせ次手ですからね、へい。」

八

「お上さん、大丈夫でせうか知ら。」

と、間を置いてお繼が言つた。

「人相の悪い車夫ぢやありませんか。」

「さあ、今お仲が來たら、悉しく様子も聞かうけれど、……何しろ支度をさして待たして置けッて、お言ひなさるんださうだからね。――其の父さんの大旦那は、大層なお遊好きだッて言ふから、ひよつとかしたら何ぞ御趣向があつて、我家をおかつぎなさるんぢやないかとも思ふが。

まさか、御祕藏のお娘さんを、そんな女形にお使ひなさりはしまいしさ、變だと思ふよ。

ねえ、お繼、第一お前が持つて居る鶴の間のお四人さんも、些とも私には會得が出來ない。……妙な日だと思ふよ、今日は、……狐の嫁入てッた雨ぢやあるしさ。……何う云ふ方だらうねえ。

又あのお連は――氣むづかしさうだけれど、立派な、旦那様が在らつしやるかと思へば、御後室様と云つた切髪の御隱居ね。然うかと思ふと恐可く當世なハイカラの方が一人、それから、あの、判じもののやうな廂髪の妙な御婦人。」

「お上さん。」

とお繼は忍笑の口を壓へて、

「判じものだッて、お上さん、あれは看護婦かなんかですわ。」

「看護婦とは？」

「お座敷へ出てますうち、そちこち様子が分りました。……あの、年寄のお介添かたゞ〳〵お伴をして來たんです。旦那は御隱居の御子さんなんです。そして、同國の人か何かで、學資を頂いて修業をしてでも居るらしいんですよ。ハイカラの方は、旦那の事を先生々々と云つたり、清川さんと云つたりしておいでです。何しろ豪い先生なんですね。」

「そりや先生は分つたがね。何うも、私にや、あのお四人の一組と此方の茅町のお娘さんと、其の中に何だか綾がありさうに思はれてならないがねえ。」

「綾ッて、お上さん。」

「見合ひとか何とか云ふ。」

「まさか！」と打棄つたやうに云ふ。

女房は番煙管を柄長に扱いて、

「でもさ。」

「串戲ぢやありません。あんなのは下町娘に向きませんわ。一ッの首なんざ、美顏術ぢやありませんか。……ねえ、お仲さん。」

お仲が來た。――

「あゝ、お前、様子は知れたかい。」と、女房は、むく〳〵と膝を動かす。

「様子ッて？」

「萩の室の方のさあ。」

「否。」と、けろりとした顏色。

「だつて、お附き申して居て、何とか其處は。……淺草が賑だとか、觀音様のお茶湯日だとか。」

「否、お酌を一ッしましたッ切、もう可いとおつしやいますもんですから。」

「おや、何處に居たのさ、それぢやあ？」

「芙蓉の室へ助けに出て居ましてね、藝妓衆やなんかと、あの……姉さんの……」

「あゝ。」

「鶴の室の妙な廂髪がね、一口何か頬張つちや、縁側へ出ると、足をぶら下げて、身體を橋に反返つて、あの赤い鼻緒の日和下駄へ、どく〳〵した大きな白足袋の足を乗つけてね、脊が低いもんだから途中に釣下るやうにして、ら、ら、ら、らッて、變な鳥のやうな聲を出して、唄か知ら、まるで、體操の掛聲ね。ぐるりとお臀を心棒にして縁へ手を支いて刎返つて、また橋に反つて、ら、ら、ら、らッて唄ふの——」

あゝ、尋常でない！　聞いただけでも人間離れがして居る。雲雀の如き女性であらう、凡慮の及ぶべき處でない。

「……それをね、皆で覗いて居ましたわ。」

「くだらないぢやないか。その位なら、供待へ行つて、あの車夫のお酌でもしておいで。」

上さんの中腹。お繼は笑ふ、お仲はむくれる、電燈が點く。しらせの札がカチリと返る。それ、鶴の室でお呼びなさる。

「へい——」と云ふ女中の返事甲高なり。

其の、ら、らと唄ふ女性であらう。廂髪の高いこと、切立ての崖のやう、下にめをふきはを宿す……さて、桔梗鼠と云ふ染色を御存じと心得る。あの派手な紋羽二重の單衣に、白襟をけばけばしく二枚見せて、同色唐縮緬の襦袢の袖を突張つた、怒肩の猪首に、袋の如く皺を背負つた、

つんつるてんの裾短。締めた帶の擬友染。雲をぼかして、眞青な杉の樹立、朱の鳥居、天狗の面を眞赤につけた、當年の新柄を、ごツんと一ツ根太を上げて猫背の太鼓、兩手を、ぬいと眞直に首を突張り、腰を据ゑて、件の緋天鵝絨の緒の日和下駄で、歩道の敷石こツこッと蹈んで出ると、萩の室の眞正面、何と思つたか、沓脱の上へぬいと立つた。

肩を動かし、訛つた音で、

「あ、伺ひます。」

大津屋の娘お親は、ほんのりとした顔をして、おくれ毛を二條ばかり。手酌の銚子の華奢なのを膳に置いて、斜に猪口を取つた處であつた。

女護の島の番卒に、ドンと刺叉を突かれたやうに、はつと怯えた容子をして、凛とした眉を半ば、片袖で猪口を蔽ふ。

「あ、一寸伺ひますです、あ、一寸。」と膝へ兩手を突出す、押立尻の桔梗染……

こゝで御相談が少しある。此の娘が、毒婦で、如夜叉で、我儘で不品行で、お俠の、蓮葉で——お轉婆で——其の、らゝの女性が、賢女で、烈婦で、貞淑で、恭謙で、溫良で、勤勉だつたら、諸君は國のために何うしようと思ふんですか。

九

「伺ひますですが。あ、」

蟬が鍍金をしたやうな桔梗染の其の女性は、怒肩のしやつきり、

「あ、失禮ですけれども、貴女は何と言はるゝ方ですか、一寸お尋ね申しますです。」

威儀正しくと言へば言はれる、が、不作法と見れば見らるゝ、棒立に姿勢を正す。

娘は肩で、一寸會釋の嬌態をしたばかり、横に背いて曲つた胸に、千鳥掛や頸へ袖、田舍源氏の紫が、兄樣に拗ねた形で、何にも言はず。

女性は目と頰を一所に膨らし、もぢ〳〵ぱち〳〵とお親を視た。

「可いです、はい、貴女が御返答なさいませんなら、私からお話をするです。此方は恁う云ふものです。はい。」

萌黄の帶へ膏藥を切張するやう、先刻から握つて持つた、一枚大形の名刺を、緣の敷居越に突出したを、唯見ると、肩書を別にして、工學博士清川扶道と鮮明である。卽是、兩國の松岸から行方知れずに成つた照樹の主人……とすると、あの年寄と云ふ客は、奥州黑澤尻の產物たる姑に相違ない。

で、名刺を据ゑると、女性は立直つてそして恭しく最う一度禮をしたが、蓋し對手のお親よりは、名刺に對した敬意なのである。

「あ、突然ですが、私お使ひに參つたんです。貴女、一寸貴女にお目に掛りたいとおつしやるんです。ですが、直接にお逢ひ申しますのは先生ではございませんです、此の先生の御母堂でおいでなさいます、お年寄です。如何ですか。」と言ふ。恁う記すと、聊か應接の手間が取れたやうであるが、ぬッと來て、言を掛けて、名刺を突出して返答を促したまで、實は殆ど一氣。

出された名刺に、下伏せながら、瞳を返した。横顏に當てたまゝの羅に指をも透さず、しなやかに搦んだ長襦袢の、さらりと漏るゝ朱鷺色が、微醉の瞼に映えて、一筋凛々しく眦に紅をさしたやうに見ゆるのみ、娘は矢張ものを言はぬ。

帳場からは立身上りで、及腰に此の樣子を女中が覗く。

氣がさしたか、其の方へ向をかへて、女性が頰邊を赤く一息入れる……此は、見る目にも暑くるしいが、緣の隔ての沓脫は秋草の雨とともに打水も濡れつゝ涼しい。

「何うでんすの。」

耳まで裂けたかと思ふ、大な口へ窪禎襞をまた入れて、恁う云つて、小慧しくも鋭い目で、額の皺越に、ぐッと見越して、向うの高緣へ、山姥が獲物を狙つて顯れたのは、白髮の切髮、黑澤

尻、清川の刀自にておはす。

「ふアふア、せゝこましう、もの欲しさうなが、些と可え庭なす。」

此より前、庭下駄で、此の刀自、其處らの秋草を見歩行いて、廂づたひに雨を避けて歸つて來たつけ……のさ〳〵と通掛りに、じろりと芙蓉の室を睨んだ。——其時、お親は、美しい眉を開いて澄まして手酌で傾けて居たのであつた。

「や、危いですよ。」

と聲を掛けて——下駄を脱棄てに高縁へ上る——其の刀自の腰を背後から白癡な養子が家つきの產婦を抱くやうな手つきで、背廣の押立尻で、謹んで押上げ奉つたのは、眉目尋常、髭の綺麗な、新學士と云つた風采の若い紳士で。婆の腰をよいとこらさのやつとこなと云ふ樣子で押すと、刀自は憚氣もなく、ぐいと跨ぐ、と黄なる褌を、あふりと飜した、女の黄なる褌は變だ、案ずるに是なむ蕎麥切色にして、恐らく洗濯をしないのである。

女中が所謂、若い紳士は美顏術の男なのである。美顏術は猶恕すべし。いゝ若いものの癖に、先輩の婆の腰を抱くに到つては國家の體面許すべからず。長幼序ありか、君子の禮か、紳士の作法か知らず、近頃は劇場の棧敷、音樂會の廊下などで、恁うした流行をよく見掛ける。が、願くは止めさしたい。それ道德を以て虚飾とするのは緋縮緬よりも罪惡である。

「御隱居樣、お氣を付けなさいまして。」

それ〳〵、美顏氏又出て、縁を今また下りようとする刀自の腰を、上に居て、一歩退いて、而して抱へる手振。

「否、大事ないんですばい。」

と、刀自は飜す黄褌、汚點ある澁脛、巾着の口を絞つた煙草入の附紐を、ト籐編の筒へ一扱、鎖鎌の如く被布の腰に小手捌きで、板敷をツン〳〵と蹈んで渡る。

それと見ると、此方の沓脱を右手に開いて、猪首の滅入込むまで一窖みに手を垂れた桔梗染が直立の姿勢たるや、禮法の正しき事、丹波笹山の教會にて、結婚式を擧ぐるが如し。

刀自は額越の横目なり。

「挨拶は何うでんした。」

「は。」とばかり唯肩を搖る。

「紹介は濟んだかなす。」

「單にです。其の實はです。要領を得ませんです。恥入つてばかり居らるゝのでありまして、は。」

刀自は繪姿のやうなお親を見た。色香は合歡の花に似て、たゞ、ほんのりと恥らへる、然もこ

そと黄なる笑、丈夫さうな齒を豁に、

「あの阿娘や、はい、御免され。」

で、腰を捻つて、小座敷へぬッと通る、と一輪插に水引を投げた違棚を背にしたお親に、無手と肩を並べて、床の間を背負つて御着席。

唯、居直つて先づじろりと一遍座中を睨し、（赤蜻蛉に掛稻。）と云ふ、小意氣で實入の可ささうな、お帳場好みの茶掛の一幅を首を撓めつゝ一つ視た。……瞳を返して、其處に置いた放しの工學博士云々とある件の大形なのに瞪目するや、忽ち口の端を、ふッか〳〵と動かしたのは、無言の指揮で。桔梗染が猶豫ふ處を、煙管筒の鐺を返して、トンと指す。

「は。」と慌しく、はらんばひに成らないばかり、龜の子泳ぎに手を伸して、はつと掌にのせて取る。

美顏氏は、と見ると、向う廻縁の角の柱を小楯に、スッ〳〵、舞踏の足取。庭の石燈籠を頤杖の寸法で、鼻の下を伸しながら、此の小座敷を流眄したり、彼方の廣間を覗いたり。其處は葭戸越、簾を隔てに、藝妓の影が、萩、桔梗。田圃の雨も青薄、まだ灯點さぬ雪洞が白く穗に出て濡れて居る。

「今なッす。」

煙草入を引着けた膝を正して、刀自はお親に居向つて、桔梗染を頤で指して、

「彼女から申入れたんですがなッす。私はなす、工學博士清川扶道の母ですばい、はッい。」

と背屈みに其の頤でしやくつて、會釋を行つたが、お親の然うした姿には、風ほどにも當らぬか、一枚朱鷺色の袖口を青い花の簪に掛けたまゝ、露を庇ふ風情であつた。

「此は、はじめてですばい、先づ、なす。貴女は何と云ふ人ですかい。些くり、面談のなす、是非ともにはい、貴女に話したい事があるで、推參をしたでなす。先づ、名告りんされ、や、あの、娘や。」

折から、雨の一陣、刈萱の靡くより、優しき袖を目角で撓め、

「博士がなす、自分に出向いたではないでなす、そないに恥かしがる事は要らんぞなす。私は婦人ぢや、聲は男子のやうぢやがなす、一寸、顏を見せんされ。」と刀自が無遠慮に握つて、ぐつと引く袂の端を、はッとお親が引き返して、頸の雪の音するばかり、肩にひつたり面を隱す。

「あッはあ。（と笑ひ、）那樣せいでも可いもんなす、あッはあ。」

と離して、手持なく、煙管筒を取直す、と娘の手酌の座敷ながら、爰に無いものが一つあつた。

「あ、お煙草盆。」と桔梗染が、あたふた云ふ。

「……はあ、お煙草盆。」

聞きつけて、引取るより、云ふより早く、身を翻して、其處が博士の座敷から、煙草盆を押取つて、忽ち桔梗染に手渡しをしたのは美顔、やゝこしいから姓を言はう、古澤と云つて今年出の醫學士である。惟るに、科學の神聖、醫家の權威に對しても、恁う云ふことを記すのは非禮に當る、が、やむを得ぬ。若い學士が自分勝手に馬鹿な眞似をするから不可ない。

刀自は、大に辯ぜんずる、ぺら〳〵舐ずつた舌とともに、すつぱと吸ひ、

「や、これい、先づ顏を出され。名告らさらぬかなす……禮儀一通りはやの、武士町人の差別は無いで、他が云うたら、早う名告るもんですばい。」

目で射て、顎で頷き、

「あッはあ、（と笑ひ、）他で若いものが見て居るて、うゝ、はい、其處もあるなす。これはい、谷、林子、彼方へなす、古澤さんも、やあ。」

「は、失禮しました。」と、緣越に、ハッと成つて靴足袋、太郎冠者の足取。古澤が座敷へ消える。

續いて、桔梗染――名は谷林子――の退出た工合は、此は、煩はしいが後學のために記す。

向うの緣のふちへ、仰向けに先づ反ると、胴切にしたあとで太脛だけ取つて着けたやうな其のづんぐり女史、らら、と低唱が比目魚がへりに、ひらりと翻つて、ぽんと反つて、らら、と低唱。くるりと翻つて、廻緣を下駄で傳つて、ららと低唱。そして行く。……心すべはどろ〳〵足袋に

鼻緒の汚點、此の赤いのも靑いのも、翡翠より頰紅より、婦人に取つては大事である。

「さ、誰も見んでなす、あの娘や、これ、貴女の前さ、博士淸川の老母ほか居らんでなす。顏見せられ、名のらされ。若い娘ぢやとばかり云うて、唯默つて顏をかくいて居たでは濟むものではない。恥かしがる云うて程が過ぎると、無禮に成るで。なッす！」

と一喝を高く入れると、怯えたらしく肩を縮めて、お親はばつたりと疊に突伏す。消えるが如く衣紋を落ちて、眞珠の根掛が浮くばかり。

刀自は、突掛けた膝を引いて、フンと吐く鼻の煙ともろともに、納まつた顏色で、

「矢張尋常の小女郎だあなす。あッはあ、（と笑ひ、）や、これ、顏も得う上げず、口も利かれんほど恥かしいかなす、や、あの娘。私方で名刺を突出したども、和女挨拶をなさらんで、禮儀を知らんなら敎へよう思うたどもなす、若い娘が恥かしがるに無理はねやあで、更めて名告らいでも可いですばい。

大津屋と云ふ商人の娘、お親と云ふ事、此の料理店の下女を呼んで既に聞いた上だでなす。それがですばい。

次吹をコツンと敲き、

「私が今の前時通りがかりに、主が顏を見れば樣子も見て、此の行狀を見たでなす。八幡太郎殿

前九年、後三年の合戰な、天保年度の飢饉にも、磐梯山の破裂にも、はい、釜石の大津浪な、旱にも長濕氣にも、びくともしたことのない私ぢやがなす。主の此の大それた行爲には興覺めたものですばい。それでなす、娼妓、淫賣か、藝妓、舞妓などと云ふ魔業者ンば、見るも汚れぢや、棄てて置け、苟もぢやなす。」

と煙管を落し、兩手をしやつきんと膝に支いて、刀自はぐつと乘出して、

「人間の皮を被つた世間の娘の一人なンば、此方の兩親、父御、母御、兄弟、甥姪、緣者、一類、お師匠樣たち、なす、學校もあらう、友達衆、否さなす、世のため、人のためにも棄置かれん思うて、念のために、下女ども呼出して尋ねたンば、あらう事かい、商人の娘だげなが、歷乎とした――……私は魂消たぞ、呆れたぞ、なす。や、これ、あの娘。

若い娘が、七か、八か、まだ二十とは成るまいに。」

空蟬のやうに疊に縋つて、身動きもしないで居る、大津屋の娘、帶腰から、襟のかゝり、前髮結つた元結の尖まで、顎で尺を取つてじりゝ〳〵。

「一人ではい、茶屋入をして、勝手に食事をするさへ不貞くされの棄りものぢやに、小座敷で酒を買うてぬく〳〵と燗をして、手酌で花見をすると云ふ行狀が、これが世間にある事かなす！

親兄弟が泣きのほども思はれるで。

小にしては家のため、大にしては國のため、聞棄てにも、見免しに默つて居られる事ではないばい。

國家擁護團、婦人教育會の會員とあつて、郡の有志ぞ、理事相談の會上ではなす、有功賞牌着用の資格には三席と退らうと思はん私ぢやすけえ、見ず知らずの主ぢやが、立入つて意見をする。

要らん世話ぢやなぞと思うたんば、國のため家のための賊ぢやでなす、煙管の此の笞打つても、撓直さには置かれんでい。

や、何故と言へなす！　主がやうな行爲をするものが一人あんば、家が滅びる、三人あれば町が滅びる勘定ぢや。我身ばかりの事と思ふな。人間と云ふものは、汝が身勝手をして其で濟むべいものではないなす。仕たい三昧の事をするのを默つて置くと思ふまいぞや、これい。」。

言論、乃一度(煙管の笞)と云ふに及んで、取直いた羅宇を鮪摑みに、雁首をひたりと一つ、お親の脊筋に押當てた、が、緋鹿子の背負揚を逆に狙つて、づい、と引くと、勝誇つた餘裕の、綽綽たる體を示して、

「なす、あの娘。これ、目に餘る惡業を働くで、小女郎が小娘でも我儘、蓮葉、お轉婆なす、一筋縄では行くことでないと覺悟した。時んば、孟子の母は知らぬ、悴扶道をば百姓の童から、今

ンば世に知られた大博士にまで仕立上げた私が、此の充滿の腕の器量でなす、見事、說得、折伏して誰方樣も御覽ざれい、誰どのも見てござれ。一度鳴出いたら鎭守樣の陣太鼓ぢや言はるゝんすばい、黑澤尻のお婆々が、此の娘の買うた酒德利を打挫ぎ、盞を叩破つても、道理の至極詮ずる處。指一本指さすまい。都育ちの、伯父伯母御、兄、姉たちに、あッと口開かせう思うたんすども、あッはア(と笑ふ、)撥を打當てるほどでもない、理窟は鞘へ納つたんばい、あッはあ。」と笑つて、煙管をすぽりと筒指しの突出し腹。

「張合のない雛兒だあなす。や、これ！　向後とも恁うした不品行不了簡の起る時ンば、お天道樣の有る處にや、雨が降つても、黑澤尻に些とんべい口喧しいお袋樣があると思へ！

守本尊と思へなす。何時までも今日を忘れずと、私が敎へた事守り居るなら、立身も出世も出來る。容色も、滿更でなし、年も若し、早い話が、あッはア(と笑ひ、)今は獨身でござるで、悴扶道の嫁にも可えくらゐ、たとへですばい、あッはア(と笑ふ。)博士の奧樣と言はれただけに、主あ何ないな顏をする……もう私は去ぬで、や、これ、一寸見せされ。」と猫背に屈んで額で掬つた。

途端である。

婆の橫顏を拂くが如く、敷いた袖の長いのを摩掛けに颯と肩にかつぐと、八ッ口から手を出し

た、大津屋のお親は、雪を欺く冷艶なる肱の下から、下谷一番伊達者の顏を出して、

「ばあ——」

「ふえゝ！」

と呼吸を引いた黑澤尻の大刀自は、怯乎として、黃褌の割股、べつたりと腰を落す。

此は驚いたに違ひない。氣の弱い娘の身で、餘りに恥ぢ餘りに恐れて、爲に、氣が違つたと思つたらう。

唯しやんと居直つたお親の姿は、野分のあとを月の露、女郎花の水際立つて、

「其方へお寄り、其方へお寄り。」

「やあ。」

「口が臭いよ、お婆さん。身體も臭ふの。御敎訓だか御說敎だか知らないけれど、惡臭くつて堪らないわ。鬱陶しいぢやありませんか。」

と片褄スッと鳶足、くの字に成ると、弦を切つたやうな、左手を投げて、疊に落し、凜々しい目で屹と視て、

「一寸、途惑ひをした救世軍ちやん、敎へて遣らうが呆れるわ。眞に大きなお世話でござんす。

——何え？……國のため、家のために、若い女が一人で酒を飲んぢや不可い？……一人で惡けり

や相手を呼んでお相酌にしませうか。私がポンと手を敲きや、鯡鯉でも金魚でも芭蕉實形に浮いて出てよ――おや、色男は麩を喰べて泳いでるやうだ、御免なさいよ、ほゝゝゝゝ。」

と耳許を白う俯向きながら、快ささうに又笑つた。

「ねえ、お婆さん、私の親はね、俳優を買つて遊べつて云つておくんなさいます、が、いゝ香よ、白い蓮の花の薫だわ。酒もお飲み、お錢もお遣ひ、祝儀もお遣り、麩もお投げ、手をお敲き、あいゝてつた寸法なの、沈香伽羅より結構なの。お婆さん、貴方の樣な惡臭いんぢやないんだよ。」

と瞳で笑つて、そして眦をきりゝと爲す。

「煙草は喫むですども。」

と大刀自は、思はず其の口を壓へながら、餘りの事に顚倒して、驚破や火事だと聞いて、燒くのに芋を掘るやうなことを云つた。

「汚らはしい！　酒の臭氣とは違うですばい。」

「もし……と云ひませうか知ら、私等下町の娘の口はね、くさやを嚙んでも、青紫蘇を銜へても、お蕎麥を喰べても白梅さ、果報にお生れ遊ばした、育が違ふんですもの。此の上どぶろくを煽つたつて、お小姓を抱いたつて、罰も當らなけりや、食傷もするんぢやない、下手な噯もしやしませんから御心配にや及ばないわ。ねえ、一寸、天理教、一れつ濟ましたらお歸んな、眞個にさ、

おせゝとやらの蒲燒だよ。」

「鰻かなす。鰌の串燒を、あれさ、私等の國ぢや東京燒と云ふンばい、蒲燒の事だなす、やあ。」

と婆さん、呆氣に取られ、天人の前で噴嚏をするやうな事を言ひ、化された顏をして居たが、忽然として正氣に戻る、とぶる〳〵と五體を震はし、目の色變つて黃色に光ると、白髮がざわざわと凄く成つた。――

「默りませう。」

成程、黑澤尻のあたりなら、梢の猿も、穴の猪も、一縮みに成りさうな、取つて置きの矢聲で怒鳴る。

唯、帳場の方で思はず、團扇を、ぐい、と握つて、ずつと立つたのはお繼である。

「水鐵砲は無いこと。あのピンとした白髮の取手へ。」

「鼬花火が可いわ。」

「それよか飛行機で爆裂彈。」

大廣間の簾越に婆婆氣な藝妓、雛妓が騷ぐ。

十

「東京の女郎妻が、おのれは〳〵。口が縦に裂けたンばか、吐すなす、吐すなす！」
と、身體の皺を一齊に搖ること、千石通を籾殼の泳ぐが如く、樺色の呼吸を噴いて、
「沙汰の限りな罰當り、太陽樣のござる下で、能くも、おのれ、俺に向うて。……鬼め、夜叉め、惡魔、外道。」
娘は袖を捲いて膝に投げた掌を、右手の指で、トン〳〵と二上りの絃の當調子。
「難有いことね、お婆さん。でも、夜叉だの、惡魔だの、そんなに大したものぢやないの。唯ね、商人の娘なの、大津屋の親坊てッて少々お轉婆な、聊か我儘な、大分だらしのない、もしかすると、餘程浮氣な。」
「逆賊。」
と喚いて、兩耳の白髮を捌く。
娘は莞爾微笑した。
いや笑事ではなからう。七十有餘歲の媼の、眼が白く、顏に朱を灌いだから容易では無いのである。
「地體先づ。」
肩で呼吸して、

「おのれは、己を何、何、何だと思うてばなす！」
「猫化と思つてよ。」
「わあッ。」
「岡崎女郎衆は、よい女郎衆。」と淸しい、可愛い聲をして、お手玉を、ポン〳〵空に投げる眞似。
黑澤尻は、逆氣が天井へ上づッて、我が體に中腰に釣し上り、
「天地が逆に成つたんばい、電燈の光が眞暗ぢや。これい、本山檀那寺の和尙にも婆々呼はりされた覺えのない、禪機も悟つた己だなんす。少い時から後家を通し、操を立切り、淸川家三畝の田地を自分で耘ひ、自分で耕し、中將姬ほど機を織り、二宮先生ほど儉約して、小學校へ通はす頃から、己が女の手一ッで、日本國の大博士扶道を育上げた、奧州五十四郡の礎とも、婦人の鑑とも云はれた己を……」
「あゝ、そんなに骨を折つて、たッたお婆さんに成つ了つたの、詰らないもんだわね。後家さんを立通して、小兒に修業をさせる閑にお湯へでも入つたら何う？　一寸、其方が他人の私には結構よ。第一人に口を利く前に、楊枝を使はなくつちや困るわね。」
「や、おのれ、己は扨て己にもせい、扶の學識に對しても……我が子ながら大博士ともあらうものが、手を支いて敬ふ己ばい。」

「そんな、猫の化けたやうなお婆さんに、手を支くやうなら、博士に成りたくありませんね、まあ、……お斷りです。」

「成らう云うて成れるか、女郎妻。忰ほどのものでもなす、それまでに成るには、はい、何ない な苦勞をしたと思ふ。夙に起き、夜半に寢ね、螢雪の苦學と云うて、やこれ。」

「あい、聞えてよ、騷々しいねえ。然う、お婆さんの息子さんはそんなに骨を折つて博士に成つたの。私は此の世へ生れると、すぐに大津屋の娘なの、果報なものね、大方前世ぢや蓮の絲でおまんだらでも織つた報でせう。何よりか幸福なのは、お婆さんの樣な親を持たない、姑を持たない、親類も緣者も持たない、まるで他人ですもの。でも一寸だつてそんな口中を嗅がされたのは……あゝ分つた！……蓮の絲を織りながら、おみき德利から喇叭を極めたんだよ、屹と然うだ。」

と獨りでをかしがつて、花やかに、「ほゝゝほゝ。」

「あれ、御隱居が突立つた、お繼や——若衆——お供さん、大丈夫だらうかね。」

と、帳場の女房が氣を揉んで、供待へ聲を掛ける。

痣鐵だいじんと成りにけりで、此の時しも、上げ胡坐。面の眞中へ指一本。

「えッへ、御覽じろ、人相の惡い、此の鼻へ酒を飼つて、夜道の土手を待たしとくお嬢さんだ。

びくりともするんぢやねえ。紀の國屋あ。」

「紀の國屋——」と廣間の方でも女の聲。

「いよ、難有えと申しやす、紀の國屋——」

「私だよ、串戲でせう。」

「こりや女中さん。」

お仲が出て居る。

「あのね、お前さんに、一寸おいでなさいッてさ。」

「私に？」

「お嬢さんが。」

「へい、緣側へ廻れとおつしやる。」

「何だかね、別にお肴も御註文なすつたのよ。」

「や、下郎とさしでお酒宴。お姫樣お酌と來ら、堪らねえ。向島は地代が上りますぜ、此の秋は私の思でも洪水は出ねえや。」

「どうぞ、ねえ、まあ、秋口に掛るとね、こんな雨でもはら〳〵しますよ。」

「當年は請合だ、言ふ事が違つたら、私あ、棹立、鯱立、でんぐり返しでも何でもすら、早い

話が脚の指を折曲げて狸のやうに甲羅で歩行くだ。一寸お目に掛けても可うがさ。最う恁うなりや討死でも何でもしてえ。」

「まあ、彼方でお待遊ばすんですから。」

「お待兼ね……とおいでなすつたかい。女中さん、後生だから一ッ此處で遣らしてくんねえ、鯱立を。」と眞顏で吐す。

鐵さん何うかして居るぜ。

「まあさ、そんな事より、そしてね、お前さん、來る時に、あの何だかね、先刻のお扇子を持つておいでなさいつて、然うおつしやつて在らしつたんだよ。」

「え！　扇を。」

「然うよ。」

「そりやこそな。」

と額を叩て、立掛た腰を、緣臺に、ぐにやりと支く。

「何うしたのさ。」

「些と話がうま過ぎる。それとも彼方にやお雛樣の御命日、で施行でもなさる氣かと思つたがね、南無三寶、的切、此奴あ簪の手裏劍ものだ。」

「氣取つてないでさ、焦つたい。」

「此方や、氣取る處の沙汰ぢやねえ。」

「さつさとおいでよ、其の扇とかを忘れないで。」

「其の扇なんですがね……」

「何うしたんだよ。」

「否ね、先刻仲見世前で、あのお孃さんが車に召す時、一寸帶の端にお觸んなすつて、（あ、扇を落したよ。）——恁うなんだ。それから私が豫て其の些とばかしの仔細があつて臺箱の中に藏つとくのを、お使ひなさいまし、で出したんでさ。

其なんだ、……いや、此なんだ。」

と、母衣の中から捻くツて持つて來て、

「此だがね。大岡樣お忍びと云ふ筋ぢやねえか、刺繡奉行ぢやねえのかね、はてな。……可うがす、構はねえ、おさしと云ふので頂いて、あの目で一度視られりや、地獄の道の一足飛——」

「餘興は彼方でなさいなね、さあ。」

ざツとかゝる、女中の傘へ、痣鐵ひよこりと土足で入つて、

「勿體ねえ、女中さん、私あ這つて行く。」

「御勝手。」

「えへ、へい、唯今はお騒がしう、へい。」

お親は端近に褥を移して、座を直して端然として居た。

「まあ、火事のやうだわね。ほゝ……唯今お銚子を――」

で、女中スイと行く。

お親に默つて顏を見られて、痣鐵、柄にもなくもぢついて、

「へい、おめしだと云ふにつきまして、へい、むさくろしい奴が、へい、姫、えゝ、姫様の前とも憚らねえで、雲助同然な……」

「一寸！　姫様なんのつて……」

「えゝ、餘り御勿體ねえんで、何とも申しやうが、へい、えゝ、矢張りお孃さん。」

「お孃さんなんて云ふと、母様に笑はれますよ。」

痣鐵面くらひ、

「はッ、御免なすつて、若旦那。」

「馬鹿だね、ほゝほ。可いから、お前さん、此方へお上り。」

「飛、飛んでもねえ、泥臭なんで。」

「では、まあ氣樂にお掛けなさいな。……そして、あの、今ね、姉さんに託けました、あの先刻の、お星様の晃々と描いてある、お扇子を持つて來ておくれかい。」

「へい。」

「まあ、お前さん、お猪口を待つてたの。氣の附かない事をしたわね。さあ、お酌をしませうね。」

とお親は銚子を取つて、襟を明るく、帶を綺麗に斜に向いた、が、何かの間違ひで、無理にお父さんのお給仕をさせられた時の外覺えはあるまい、膠もなしに、つんとした拗ねたやうな姿に成る。

鐵は頰げたの痣を捻つて、痛み入つて、

「御勿體もねえ、おとゝゝ、へい〳〵へいございやす。突如、手酌で頂戴しますも無躾でございますし、然うかつて恁う成つて見ますと云ふと、其の、へい、貴女様のお酌を待つて居りましたやうで、飛んでもねえ、罰の當つた奴で。」

と、抓つた痣から手を離すと、額を叩いて、ごつくと一口。

「あゝ、何とも言へませんや、地獄極樂一齊だ。」と頭を掉る。

お親は袂を敷いて膝に載せた、あの扇子を疊んだなりで俯目に見たが、眦を返して莞爾して、

「何よ、地獄極樂一齊だつて……大した事に成つたわね。」

「鐵五郎、痣と一所に生れて以來、此が生死の境なんでさ。」
「ほゝゝ、どつちか極めてお了ひ。まあ、お重ねな。」と、袖を捌いて押へて酌ぐ。
「斃死りました。」
と、ぐたりと手を支き、
「お嬢さんと云や叱られる、お姫樣で不可えしと……困つたな、辨天樣でも、龍宮でも構はねえ、貴女樣・私に其の扇子の經緯を白狀しろと仰有るんだ。」
「まあね。」
「後でお手討。」
「何うだか。」
と、華奢な拇指で要を捻つて、片手を添へると、するりと開く。……雨音幽に、空も晴れたが、地紙の雲の月一輪、お親の袖に、繪を染めて、紺青の色の冴えたのが、鬢に颯と照る、……袋戸棚も銀地の襖。軒端の萩に輝く露は、描いたる七つの星の面影である。
座敷さへ青く澄む。
此の靈ある光景は、夜の隅田川の岸を隔てて、五つ衣に緋の袴した上臈の、遙かに雲上に彳んで、おなじ扇子を鏡の如く、影を合せてさしまねいたものと見て差支へはないであらう。

それは畫工の前原辰馬が、幼き時故鄕の伊勢の町家の隣の小家で、唯一册洪水に流れも失せず殘つたと言ひ〳〵、扇折の美女が見せた双紙の中の、一枚繪姿。
上臈の其の手から拔取るやうに、双紙に挾んだなり授けたのが、月日とともに移變つて二十年あまりも過ぎて後、ありしむかしをおもひで草、箱根で辰馬の手に寫されたのが、一度、月下に幻の女の紫の翼に載つて、夜霧にかくれて、瀧を潛つて、濡色の露の常夏の花の根に縋つて、やがて清川博士の夫人、照樹子の袖に拾はれた……
夢かと思ふ、お伽話を可懷んで、此の七星の扇を肌身に添へた、其の夫人は、仔細あつて、去年の春、花の霞の朧夜に、此の大川とおなじ流れの兩國の松岸から行方知れずに成つたまゝである事を、希くは讀む人の記憶されむことを望む。
月の裏は誰も知らぬ、扇子のおもては七星である。
それだけを……忘れぬまゝに辰馬が寫した。もし其ならば裏を返すと紫陽花が描いてあらう。神の扇か、人の繪か、知らず、お親の膝には七つの星が、白銀の大なる露の如く、紫の萩の面影立つ。

十一

「こんれ、林子！　電話、電話。」
と刀自が息忙いたしやがれ聲。
「は、電話、承知いたしましたです。」
「うむ、古澤さん、電話、電話、電話、電話ばい。」
「承知しました、電話、電話、電話ですとも、勿論ですとも。」
前に桔梗染、後に美顏氏、黑澤尻の大刀自を、眞中に、手車めかして廊下に揉出す。
黄なる顏色、眞黑に怒つた婆樣の、これが中庭を飛んで見よ。猫が黑雲を捲くのであらう、が、
介添が二人で抱へた工合は、戸惑ひをした田舍道者を、花道から引摺下ろす形である。
……此の以前に、お親のために鼻柱を挫がれて赫と成つて、突立ち上り、あはや摑掛りもし兼ねぬ途端に、二人が座敷から駈着けて手を取り、腰を押して、引去つた時も、今と略おなじやうな樣子であつた。
「扶道なつす！　無念なばい。」
刀自は、身悶をして血聲を絞つて、
「口惜いばい。悴え。」
博士は二つ並べた食卓の眞中に、默つて額を壓へて居た。

「や、これ、御身は何のための博士ぢや、親の恥辱は悴の恥辱ぞ。」
博士も此には弱つたらう。自分に出向いて、あの小女郎取つて壓へよ、國のため、家のために、と云ふのであるから。
「主は婦女に甘いんすの、やの、其の氣ぢやから、嫁奴の照樹も不埒を働いたんすなす。」と血迷つて疊を叩いたが、聞く、三人は、おもひ〳〵に面を背けたばかりであつた。
たとひ天地が顚倒して、博士が下女に這うても、此の談判には出向かれぬ。
「道理ぢや、むゝ、至極ぢや、此が先生の名譽にかゝはると思うたんば、主出向かされ、主が代人に行かされ、やあ、古澤しやん！」と切齒の音、炭の刎ねるが如く、ぱら〳〵古澤に飛火がする。
「は、しかし、それは何ですよ。」
「やれ、此の決着を見ないんば、なす、此處は決して、動かぬぞなす！」
しかし、然したるお茶代も出ないものの、恁う成つた上の長座と來ては、お茶屋の迷惑は夥多しい。
美顏氏古澤は色氣があるだけ、前後に氣を兼ね、むずつく事一方ならずで、
「先生、如何でございますか、もう、徐々。」

「さあ、歸らうかね。」

や、此を聞くと、拳を握つて、默然で立上るのを、林子と古澤が一角力ひ、角力つて留める。

と、今度は煤色の涙を流して、

「なつす！　忰え、私は生れて以來……」

で、刻苦、辛勞、操立から婦人の鑑、清川家三畝の田地から、源義家、前九年、後三年は馬鈴薯、二宮尊德、家のため、國のため、忰のためを並べたてて、月日の數ほど身體中に皺を刻んだはなつす！　何のためぢや。

手酌で酒をのむ小女郎に罵られようためではない。口が臭い、と言つたと喚き、化猫だ、と言つたと吠え、それだけの苦勞をして、たかが婆に成つたのか、と根こそぎ言つたと口惜がり、博士になんぞ成りたくない、と鼻で笑つたと煙管で叩く。

如何に、大刀自、相濟まない事ながら、此の時ばかりは扶道氏をはじめ古澤美顏、恐らく桔梗染に至るまで、世に親を捨つる藪がなく、文字に孝行と云ふ語のある以上は、清川にも、扶道にも、勿論博士にも成りたくないと思つたに相違あるまい。

大津屋のお親のために、博士は學者でも枕でも無かつた。

お仲が移す褥に移つて、膳を引かせて、新規の註文、痣鐵を呼ばしたのである。猫の唸るやう

な刀自の聲を、向う越に聞きながら、眉も顰めないで澄ましたもの。

「お嬢樣。」

お仲が痣鐵を呼びに立つと、入違ひに、女中頭のお繼が來て、端近なお親に差寄つて會釋した。

「相濟みません、何とも。」

「否。」

「對手は田舍の人ですから、御勘辨下さいまし……何しろ、あの通り泣饒舌をして居なさる騷ぎで、困るんでございます。否、手前どもでは些も構はいたしません。あとの御連中なら適い取組みですから打棄つて置きますけど、御一方、旦那樣がお氣の毒で成りません。何とかして、あの婆さんを宥めて歸さうと思ふんでございますがね、主婦とも相談しますが、外に好い智慧がないのでございます。就きましては、何とも貴女には申譯がございませんが、あの、申兼ねました、が貴女が、あの、貴女を氣を違つて入らつしやる方だ、と申して、それで、あの逆立つた白髮頭を萎して見ませうと思ひますんで——默然で、先方へ然う申せば申すまでの事でござんすが、それぢや餘り勿體なうございますから、一生懸命でお耳に入れます。御恩に着ますからお嬢樣。」と世馴れた口も、半ば聲が消えて頻に手を揉む。

お親は晴々とした面色で、

「あゝ、あの私を狂人だつて云ふの。」
「まあ！　否、然うと申す譯ぢや……」
「可いけど所作は出來ないわ。可厭だ。」
と微笑むが仇氣なし。
「飛んでもない、貴女、唯申しますだけ。」
「結構よ、ほゝゝ、時々言はれるわ、もう馴れつこ。」
「まあ、では、お聞濟。」
「えゝ、澤山。」
「助かります。」と言ひながら、惚々と視てお繼が立つた。

此の土砂は大に利いた。
「狂人かなす、然うぢやろてや、ふん。」
とに角、一面目立つたので、敲立てた煙管を倒したが、我慢强く、執念深く、執拗く、理窟ぽいのは、朝湯を知らない人種の癖、苟くもぢやなす、二宮尊德、郡女團、賞牌受領刀自ともあらうずる長者に對して、熱罵冷嘲を恣にした小娘、狂人であらうがなす、然ある狂人を野放しに

して天下を往來させると云ふ心得違ひがあるものかなす。電話で呼出せ、親どもに談じて、向後座敷牢へ打籠ませうばい、うゝんや肯かぬ。國家のためぢや、國のためには生命を棄てる、殺されても掛合ふばい。

其處で電話、電話、電話、電話。
「電話、電話、はあ、勿論ですとも電話です。」
美顏氏が腰を壓し、桔梗染が手を取つて、乃ち廊下へどた〳〵と大揉みに揉んで出たのであつた。が、美顏氏が帽子を手にし、桔梗染が、洋傘(案ずるにこれは座敷の緣まで持つて入つて居たる也。)を握つた覺悟を見ると、其れなり摺拔けるつもりであらう。
「逆賊。」
「まあ、貴老。」
「御隱居樣。」
痣鐵と斜に並んだお親を見ると、摑んだなりの煙管を揮つて雄猛り立つのを、引抱へる二人の樣子は、蝦蟆が天上しようとするのを、螻と蚯蚓の留めるが如し。
行掛けにもう一つ、刀自は鰻ぬめりに胴を揉んで伸上つて、
「狂人めが、ふゝん。」と顎を震つて笑棄てる。

痣鐵が納まらない。
「何を。」と立身上りにヌイ、と腰を切ると蹌踉とふらつく。
「お止しよ。」
お親が、膝を支いて、すつと姿を浮かしながら、刀自に向つて突立上つた痣鐵の肩先を、のび上るやうに、丁と扇子で叩いたので、どさりと音して、大きな漢は小縁へ尻持。
「御免よ、をぢさん。」
「お難有い事で……へい。」
チユウと舌打、蜆の椀を、下司にごくりと吸つて又頭を掉つた。
工學博士が其處へ――一足後れて――縁へ出て來た。
唯、面を背ける暇もない、顏を隱さうと思つたか、藤鹿の子の襟のはづれ、乳のあたりへ、うつかりと、兩褄を兩の手に指を反らして取つて、一面月の如き扇子を宙に釣るやうにした、膝のすらりとしたお親と、思はずも目を見合ふ。
お親の此の科は優婉であつた。昔壇の浦の戰に平家が船に立てた扇の的より、一層意味のある風情に見えた。
が、此戰は博士の方が敗北である。

偉なる學者と雖も、本朝の屋の內を歩行くのに、泥靴のまゝでは成らない。其處でモオニング扮裝の博士は、ずぼんの下へ靴足袋である。其の體で扇を胸に、頭の細い、袖の長い、銀襖の前の婀娜な下町の娘に向つて、高い處に突立つて、これからのこゝと、歩行かねば成らない圖は、雛壇の前で、（雨の夜に日本近く）を踊るに齊しい。
地位も、學識も、勳爵も、――岡惚も何にもせず、嫁に成らうとも思はない娘の前には、瓦礫に齊しい。掛けた目金は見る目にも煩いのである。
――「そんな思ひをして漸と博士に成つたの、――私は果報で、生れる、とすぐ大津屋の娘だよ。」――
清川博士は憮然とした。
座に散つたのを、唯何となく拾つて出た、例の持あつかひ一件の大形の名刺を、思はずびりゝと裂きながら、
「失禮しました……」
不意に聲を掛けて一揖されて、はつと極り惡さうに其の手で蔽うた眉に扇、支膝したのを忘れたやうに、丁と坐るのが投褄で、袂を清しく疊に敷く。博士は星の影に目を射られた。

去年、松岸の大廣間へ、夫人の照樹が少なからず時後れて、一座が怪疑の雑言の中へ、思ひ掛けない濡れ〳〵とした結髪の、悄乎とした姿を見せた。

花の盛の宴の席に、これは散りかゝる柳であつた。

晴がましさうに、なよ〳〵として、姑のかげに、宛然斷たれた蔦の如く崩折れると、這哉大刀自、古猫の光る眼で、夫人の結髪をじろりと視めて、白い咽喉を、射窘めるばかり瞳下りに、帶まで、ぐいと睨下ろすと、細骨の其の扇をさした。

「ふア、こんれは、よかお躾みぢや事い。些と貸され。どだい、逆上る。」

で、力なげだつた夫人の手から、指を一本、へし折る如く邪險に扇を拔かせて取つて、みしみしと開いたが、

「こんれは、はい、まだ酒も飲らぬに強か顏が赤いなす。和女も逆上せたか、うゝ〳〵、熱いかいの、熱いかいの、途中を急いで來さつたで。うゝ、うゝ。」と消入りさうな頤の下を、はた〳〵と煽上げた。

其の座から姿を隱した、夫人と同じ星である。

熟と視る、博士の姿は暗く成つた。

もし、それ、式の如き古猫に、親として事へなければ相濟まない世間なら、女は娘にも嫁にも成らずに、南洋へ飛んで女王と成るがよし、男は、博士も紳士もない、土方に變じて女護の島へ駈落をするに限る。

一時雨繁き、とばちりの飛石へ、刻々に拐り棄てた、粉の名刺を白く棄てて、清川はつゝと出た。

十二

「一寸」

お親は輕く扇子を疊んで、

「いまの婆さんを知つてるだらう。」と低聲で言ふ。

「私がですかい！　えい。」

椀を覗いた目を擦つて、朦朧として、痣鐵は帳場を視遣つて、

「へい、然う言や何處かで見たやうでもございまさ。餘り類のねえ三途河でね、あれで薄化粧つてるんだから猫化でございますぜ。前脚で舐めて、塗る奴だ、可恐。」

「奥州出のあんな婆さんの中にや、お襦袢の裾へねえ、紅い切を附着けてるのがあるもんだとさ、

そして踊なんか踊るって。

「へゝい、成程。」

と仔細らしく首を伸して、

「安達原孤家の婆だの、岡崎の猫なんか、其處を仕組んで緋の袴を穿かせたもんでございませうね、狂言に嘘はねえんですつてね、へゝい、成程。踊はいづれ手拭を牙で銜へて、顋で投げてチョンと被る、後脚でおつちよこちよいの、やあとこせえ……あれなんでございませうね。お嬢様、酷うがすよ。私はこんな、臀へ輪を押付けりや、すぐに大地に轉がります、がた車同様な人足でございますが、可哀相に……まだあんな猫又を知己にや持ちませんや。」

「否、何時か見たらうと言ふんだわね。あの、兩國の松岸で……」

「えゝ。」

「あゝ、まだ何にも話を聞ない先だつけ、性急だ。」

お親は一寸胸を叩いて、

「ぢやあ無くつて？……此のお扇子は其の時の。」

三日月に、細く開いて見せながら、

「言つて聞かしておくんな。何にも仔細はないんだから。唯私が聞くだけなの。お前さん、何う

して持つてるの。先にからかい、それとも！」

「殿様！」

忽然として痣鐵、胴を据ゑ、兩肱を突張つて、

「殿様と言ひまさ、お奉行様と申上げます、お檢べの濟むまでは、えゝ、殿様。……縁側へ廻れツて、お聲掛りのあつた時から、私は覺悟をしてるんで、はつ恐入りました。全く相違ございません。松岸へお供をしました、餘所の奥様のもんなんで……何とも申譯のねえ事なんで、へい。——ですが。殿様は何うして御存じでございませう。一向合點が參りません。」

「身どもは、其の時……可厭ね、お前殿様だなんて言つちや——お父さんに連れられて、御飯を喰べに、あのお茶屋へ行つて居たの。……來て居た藝妓衆の取次では分らない事があつて、茅町の内へ電話を掛けに私が出たのよ。——其の時見たんだわ、式臺にこんなに腰を掛込んでた、お前さんの其痣を。」

「へ。」と隱す。

「御免よ。ほゝゝ。」

と、仕方をした蔫ずわりの姿を崩した胸を反らして、花やかに笑ひながら、

「それから、今の婆さんね。其處へ行つた、あの若い方の洋服の人も居たわ。まだ居たでせう、

頤鬚だの、八の字髭だの。

ねえ、其處へ、櫛卷に結つた、少し御氣分でも惡いのか知ら、と思ふ、品のいゝ、美しい、すつきりとした奥さんが階子段からお下りなすつたから、餘りお人品な美しさに、私は吃驚して電話の許から見惚れて居たのよ。

ね、そら、然うすると、珍らしいわ、婦の方には。此のお星樣を描いた扇子を、恁うやつて、口許へ當てたなりで、皆、がやゝする中を、式臺へ出なすつたぢやないか。あゝ、お迎が來て、一人だけお歸んなさるんだらう、――と電話を濟ますと、其處等大變な騷ぎだわ。

座敷へ歸つて、あとで聞いたら、お前さんが、其の奥さんをゆすつたんだつてねえ。」

「强請……弱りましたな。」

「ねえ、一寸。」

「弱つたな。」

「ほゝゝほゝ。」

「否、笑ひ事ぢやありませんや、眞個の話でございます、今更ら卑怯らしく思召しませうけれど、面こそこんなでも、私あ何も、根からの惡黨でも何でもねえんで、へい。あの時は、ほんの出來心てつた奴で。」

「でも、お前、御祝儀を大層おねだりだ、と云ふぢやないの。」

「五兩……へい、五圓だけで。何もゆすつたつて程の事も、ございませんやうな次第で、へい。」

「何處から伴をしたの、松岸へ。」

「おいでなすつた、巧いや、殿樣、おしらべが。皆申上ッ了ひまさ、神田の錦町からでございますよ。」

「錦町から兩國まで、それで御祝儀が五圓かい、不屈な。ほゝゝゝ。」と、蓮葉にくの字に成つて。

「あい、お酌。」

「じろりと見た時、おや變だと思ひましたつてものは、暗い處から二人連で、おまけに奥さんの方が、服裝にも似合はねえ髪がづッぷり濡れてたんで、此奴あ、尋常事ぢやあるまい、と思ひました。けれども、まだ、そんな强請がましい了簡なんざなかつたんでさ。御藏橋の處で提灯の灯が消えました。其の間に、むらゝと、こゝん處へ其の惡玉つて奴が、ウスドロで面を擡げましたのを、手拭で引拂いて、無事に松岸まで漕ぎ着けました、と云ふと御大層ですが、直き鼻の前てつた處なんで。

奥方、すつとお通んなすつた。

までは可うがす。お駄賃は先拂ひの、下さるものまで、疾に丼に入つてるんで。から車を曳いて歸りや、それで事濟でございましたが、何ですかね、餘り美しい方なんで、そのお伴をした奴が、はい、然やうならぢや、變に何うも、もの足りません。

私の車に、途中から天降んなすつたやうな別嬪の奥さんを、殿様の前ですがね。默つて、すつこ拔きにお茶屋の二階へ持つて行かれて了つたやうで、こんな事あ生れかはつても二度とはあるもんぢやねえ、と思ひますとね、棒杭に手を生した恰好で、其のまゝ梶棒にやつかまれませんや。

濟みませんが、お心附の處をッて、こだはり出したんで。其處あお會席だ。二歩と三貫、仕來りの分だけは、お客に默つてお帳場で心得てくれましたが、そんなこつて歸るんぢやねえ。

五兩、と打つけて、一本殘つた兩ぎりのバットを、仰向けに、片足あげて喫かしたんで、へい。

唯今の奥さんが、萬事御承知だ、お座敷へ通して、然う云つておくんねえ、か何かで、松岸の玄關を動きますめえ。

女中も此奴あ計ひかねたか、二階へ上つて、蔭で耳打をしたらしうがす。……跋は惡かつたに違えません。」

（あゝ、丁どそれは、姑が夫人の顎を扇子で煽立てた時であつた。……）

「成程、あの猫股婆だ。黄色い褌を、殿様の前ですが、ふは〳〵階子段を三毛尻尾が下つたやう

でさ。お供して下りて來たのは、違えございません、唯今の高襟先生。ならび大名めら。めかづらを掛けたやうに種々の髯で出て來た。

車夫、と呼んでね。猫股め、不埒だなッす！　明治、大正の御代とあるに、此のゆすりめが、とおいでなすつた。

私あ、痣で、バットの灰を拂いたね、殿様の前だけれども、――駄賃と祝儀は蝦と鯛ほど違うッてね、此から、揚胡坐に成つて五兩ぢや易いつて處を、其の――と云ひますのが、一所に川岸までついて來て、露地の角で内證で下りた男があります。言種が何うですえ。

（お連だけ松岸だ、此方の車は半町ほどさがつて下ろせよ、可いかい。）てつた寸法でせう。

此がとつこで、私あ首根ッ子を壓へて居る氣だ、默り五兩易うがせう。……

賽の目が婆ぞろと出たから、私あ、ぽかんとしましたがね。車夫で不埒がぐッと來た。五兩當前の理窟を、やけに饒舌つたれ、と思ふ處へ、それ、貴女が御覽なすつたと云ふお姿が、ッ、と虹のやうに顯れたんで。

（祝儀を上げよう、戸外へおいで。）

見せたうがしたね、今思ふと、奥さんは足袋跣足。」――

「まあ。」と云ふ、此の阿嬢は、何時の間にやら足袋を拔いで、褄に投げた爪尖が雪のやう。

「慌てたね、私あ、バットを半分掌で揉んで消す、と、癖に成つた奴で耳へ挾んだ、と御覽じろ、火が殘つたからびんたが火事だ、あゝ熱々と壓へて、横飛びに駈出します。中にね、やあ、奥樣、短氣だ、危い奥樣と喚いて居ました。

もうね、奥さんは俥の上です。

（私は此からお花見なんです、御心配はありません。のんきなものよ。若い衆急いで――）ぐい、と取つて楫を上げましたが、露地の入口を見る、と相棒に雇つた俥が其處に、提灯を下に置いて、半被を振つて着直す處で、祝儀の一件、事面倒だと思ひましてね、入つた時と反對に裏から廣小路へ拔けましたつけ。

上ぢや小さな咳拂の聲もしません、（母衣を下ろすよ。）と一度おつしやつた切でがせう。足袋跣足でも何でも、花見だつて言ひなさるから、上野へ行け、と其の見當で駈出しましたが、驚きましたは、又御藏橋を通つた時で――

柳原かけて淺草橋の、あの通り――で一寸お氣はつきますまい――何時歩行いても變に人足の途絶えます、寂寞した處が二ケ所あります。一つが、御藏橋の其の詰の處と、もう一つは、三角の小さな銀杏の樹の有る角の處でさ。

其のね、殿樣。お嬢さん――御藏橋手前だと思ひますと、五六間さきへ立つて、ふら〳〵と歩

行いて行く婆々が一人あるんです。へい！」

と息をのんで、四邊を眴し、

「可厭に成りますぜ。思ひ出しても不氣味でね、おまけに何です、同じ浴のうちに二度見たんだから忘れません。

白髮を小さな祖母子に結つたね、脊の低い、よぼ〳〵らしい、其の癖でぶ〳〵と水膨れしたやうなのが、鼠色の卷つけ帶で、――肩のあたりが、判然と見えましたつけ――小紋の衣類で、へい、可なり嵩張つた鬱金木綿の風呂敷包を肩にまいて、蒼黑い頸首をぐんなり向う屈みの背形で、柳原の方へ向きましてね、へい。」

お親は猪口を丁と置いた。

「其奴が目に着くと一所でね。えゝ、餘計にぎよつとした、私の頰ぺたに、靑い蝙蝠見たいに颯と飛んで、向うへ行く婆々の薄黃色な裾とも思ふ處へ、飜然と落ちたのが……其の扇。」

「此だね。」

「へい。

奥さんが俥から、

（お待ち。）

いや、おつしやるまでもねえ。其處へ扇子が落ちたと見ると、婆が、ひよい、と振向いて見た奴でさ。顏が可厭だの、目が凄いの、何のより、其の振向いたと云ひますのがね、まるで、人形の首をぐるりと背中へ捻まはしたやうで、肩越に眞正面！」

と痣鐵、むず〳〵と首を動かし、

「私あ、足が窘みましたよ。

（提灯を見せておくれ。）

で、奥方は、其の時は藤色の褄をお取んなすつた。氣高うがしたぜ。足袋跣足で、提灯についてて、する〳〵する……

婆々は其切見えねえんで。

奥方も、何も其の事は仰有らねえ。はて見なさるものは、と思ふと、届ませた私に、提灯を突付けさせて、開いたまゝで俥からお飛ばせなすつた其の扇子の落ちた面を、すつくと立つて、默つて上から覗くやうに見なさるんでね。

帶のあたりの此の頸へ、まだ濡れたまゝの髪の艶が、雫に成つてたまらない好い薫で、ひやりひやりと垂りさうで。拾ひますか、と半間な口も利かれませんや。

（御祝儀を上げる、もつと御代を上げようから、御覽、其の扇子の七つの星の、劍尖の向つて居

る方へ、露地でも、町でも。……

お前構はず遣つとくれ。）で、大な紙幣。

唯、殿樣、お孃さん、劍尖の向いてるのが、花の上野ぢやありませんや。海だか、山だか、京、大阪だか、打つかる處は分りませんが、銀座、日比谷、麻布、芝、目黑の方を向いて居ました。

……郡代を拔けて、宗右衞門町、油町、あすこいらを、ぐる〳〵廻りの中は、まだ覺えて居りますがね、足は車で、目が廻る……何處を何う歩行いたか、よく分つちや居ませんくらゐ。で、何でも貴女、一度は數寄屋橋を日比谷へ渡つて、大手前にかゝつた筈で。

其の、ゆきあたりばつたりに突掛つて、私の足が窘みます都度に、

（もし孰方へ。）ツて聞くと、其の扇子が默つて頭越しに飜然でね。

（お星樣は何方を向いてゐて？）

へい……提灯で以て破軍の劍尖を照らすんですがね。二度が三度四五度からは、車の上の奥方は降りなさりもしねえで居て、私が例の天文臺。其の毎、劍尖の指す方へぐるり〳〵ぶん廻して、ありやヨなんでございますから、魂が茫と成つて、中頃からは、聲も何も出るんぢやありませんや。

因果車が廻り繞つて、それ、宵の口、供をしました錦町へ出た時は、肝にがつくり胸に應へた。

生きるも死ぬるも、此處でこそ——何か前世の約束事の——業が滅しるんだと思ひましてね、いや早や我身ながら打てた聲で、（奥さま。）と申しますとね、返事よりか前へ翼の青い蝙蝠が、銀色の目を光らして。」

痣鐵は、醉つた目を瞬いて、うつかり聞恍れるお親の花やかな顏に、一重霞でも掛つたらしく見詰めて饒舌る……

「何處のか大な煉瓦塀の下へ落ちて、ふた〳〵と二つばかり夜風に煽つた時は、宛然扇子に魂が入つたやうで。

其時の星のさし加減で、これが上野の山ン中へ入ることに成つたんでございます。が、花眞盛りの陽氣だのに、黑門前から寂寞して、夜露の落ちるのが、ぽた〳〵と聞えます、人ッ子も居やしません。彼是一時かと思ふ見當でございましたよ。

一寸車を留めさせて、奥方は清水の御堂へ上んなすつた……成程お花見だ、と思ふ中に、勿體ねえ申分でございますが、はゝあ夜遊びをなすつた辨天様が、お隣家づから、留守を賴んでお置きなさる此の觀音様へ、（唯今）てッた工合かも知れねえとね、長屋並な事を其の——其の癖、ぱらぱらと散る花が、雪のやうで悚然とする。

考へて見ます處、何、其切り車を曳いて遁出したつて可かつたんで。お客を置きざりにして駈

出した處で、乘逃げと云ふ間違ひはつひぞ交番に無え事でございますが、花明りで、恁う櫻の枝が雪洞を霞ませた中へ、袖だの、裾だの、帶腰だの欄干越に、すら〳〵と……時々恍惚と仰向いて、御覽なさいます、紅でぼかしたやうな、眉毛も見えさうな氣持がすると、先祖代々からの御主の御供で居るやうでね、臭い煙草をふかす氣にも成れませんや。

些と手間が取れました、今度は最う廻廊で見當をお付けなすつたらしい。……

（兎に角、山を向うへ出ませう。左の方へ。）と……乘りながらの御指揮だ。串戲ぢやありません。清水町へ出て、それから根津へ入りましたぜ。眞夜半のね、お嬢さん。」

鐵は冷えた猪口で一呼吸した。

「……根津ですぜ……谷中から迷つて出た幽靈が、露店を出さうッて言ふ處だ。難場にも何にも。谷だか、峠だか、野原だか、心細いッたらありやしません。廣い通りは霧の中の大川を渡る氣持がするんで。

餘り便りねえもんですから、成りたけ婆婆に近さうな細い道を選つて、門だの、塀だの、兩方へ、はあ〳〵息を吹いて曳きましたつけ。

卵塔やら、まばら垣やら、大な溝やら、水溜やら、道端の地藏堂やら、ばら〳〵烏見たやうな黑い影に成つて、面へ打付かるんで、目がくらんだと思ふと、例の青い翼の蝙蝠が、飜然でさ。

また扇子なんでございます、へい。
唯、今度は例の足袋跣足で、奥方、念入りに車からお下りなさると、清涼剤のやうに、颯と奇楠木ッて奴は可うがす、其の途端だ。
兩方生垣の横町の暗い中から、今其の扇子の落ちた處へ、杖を取つて手許へ掻込むやうにして、急足で、ぶら〳〵と泳いで出たものを、まあ、何だとお思ひなさいますえ。
今だからこそ、酒の舌で、平氣でお話をしますもののね、其の時の心持ッて云ふのをお察しが願ひてえくらゐな事で、と云つた譯が他ぢや無えんで、先刻……御藏橋の處へ顯れたのと、おなじ色の婆々です。」
「はあ。」
とお親が前へ出た。
「へい。」
と痣鐵は息を内へ引いて、
「茫乎と鼠の裙で、薄汚れた鬱金の風呂敷包を頸へわがねた正體、同じ晩に二度視たと申したのは、此なんでね。
水を浴びましたやうに悚然として、氣が遠く成ると感じるうち、下りて來なすつた奥方と、執

方の裙だか一所にふら〳〵と白く成つて、提灯の灯先をスッと汐の退くやうに消えましたぜ。
いや、消えたぢや濟まねえ、お嬢様の前でございますがね。何處へ行きなすつたか奥方は其切で。扇子だけ落ちたまんま殘つてたんで、慌てて拾ひますと、面くらつて、最うそれ、星のさした方角が分りません。
空は眞暗、びよう〳〵と犬が鳴く。
車を下ろして踞んだ處が、と云ふと、一方寺院で丁ど其の門を通越した……塀で隱れて居ますけれども、場末だけに未だ改葬に成らねえ墓場で、尙ほ惡い。一方は、大な溝を前にした長屋が二軒、其の二軒目が枝路に成つて、右の……えゝ思出しても可厭な氣持だ。」
痣鐵は、胴を揉み〳〵、
「……其の婆々が、杖を支いて出た口で、其の片側を區劃つて立つた、又高々とした板塀が、これが角地面を廣々と取つた大な邸で、暗闇の奈落へどしんと蓋をしたやうな大な棟が、宛然山でさ。呀、また場所もあらうに、此方側の寺に續いた森の中の一軒家、と云ふのが一軒家の森なんで。其の渺々としたことは、向う町から裏通りを掛けて、これも角地面が雜と五千坪、此方人等夥間中ぢや、たゞ根津の五千坪と言ふと分ります。松だの、杉だの、檜だの充滿の森でございましてな。恁う見た處は眞中に五重之塔の突尖でも顯れさうに見えますが、思ひも寄らず、樹の葉

の落ちた時や、風の吹廻し、何うかするとお天氣工合で、雪の積つた屋根が見えたり、花の咲いた窓が出たり、小鳥の留まつた欄干が顯われたり、なんぞします。廻縁の粹づくりな二階家でございますが、樹林の底に沈んで土塀も門も蜘蛛の巣と蔦で八重搦み、三味線草で嘘をしながら密と覗くと、築山の崩れた庭の古池が、のたくしした草の中に大波を打つて、潰れた石燈籠の笠の上に、河童が鼻毛を抜いて居ると云ふ、豫て、物凄いのでございまして。

或其の美いお妾が住んだ家で、二十とかで若死をしました。いまはの時に、何代の後も他手に渡さず、こゝを墓だと思つて、其のまゝに置いて欲しい。旦那が、諾と、引受けたツて因縁で、十四五年以來立ぐされの空屋で居ます。廣さは廣し五千坪、空地で無しに、いはく附だけに、晝間通つても妙に寂しい可厭な處で、内々ぢや其のお妾の死骸が埋つてるかも知れないと言ひますがね。

お向うの邸が、これが夫れ、同じく空屋同然、と言つて何うして、仲働も、腰元も、振袖、詰袖、堅矢の字で、づらりと齊眉いて居ようと云ふ、現に姫様が一方おいでなんでございます……高い聲ぢや申されませんが、此が尋常事でございませんぜ。十七の時お持ちなすつたお嬢様が、お盞の當時、ものの一月と經たないうちから、今以つて行方知れずと云ふ手輕くねえんでございましてねえ。

伯爵とか侯爵とか云ふ、大した御方で……丁稚の拔參りや、羅宇屋の爺さんが神隱しに逢つたのとは事が違ひます……今の世に、幾人とか指を折つて數へようと云ふ若殿が、日本中は愚か世界まで搜して行方が分らず。靴も帽子も、記念一品ない、不思議とも何とも——それがために、高髷のお裲襠からすぐに後家に成つて一人でお邸においでなさる。これが又目も潰れさうにお美しいんだと云ふんですが、御身分柄なり、お身の上なり、門へ戸端出もなさらねえで、出入の者も、つひぞ御本尊を拜んだ事は無えさうでございまして、……何しろ、魔が魅したに違えねえ。高い棟だから、此處を根津のお天守、お天守と云ひましてね、氣の弱い野郎は、お辭儀をして通ります。

これがお妾の墓の五千坪と向合つて、凄いの、陰氣の、美しいの氣に成るのツて、眞晝間だつて、冷い水のやうなものが、花だか橘だか怪い薫で、暗い森の中、寂しい屋の棟を流れて居ます。こゝ二軒ならまだしもでさ。お天守について廻つて、前町の質屋と云ふのが又いつかの吉原燒の時、縁續きの女郎屋が遊女を連れて遁げ込んだものですがね。其の遊女が一人、夜中に水が飲みたく成つて、張出しの臺所へ出て水瓶の蓋を開けると、水の中へ眞白な女の顔、島田の縺れたのが歴々と映る。が、先づは仔細なし、自分の影、で心が濟んで、寢床へ歸つてから、フト氣がついた。——

いづれ伊勢屋の事なんで、燈なしの眞暗な處で、水であらうが、かゞみであらうが、何うして影が映つたらうと思ふと、遊女がさあ氣に成る。

氣味が惡くて堪らないので、抱合つて一所に寢て居た、仲よしの妹女郎を擦つて、きゝなんしとか、見なましとか云ふと、何うです……此方も眠つちや居なかつた。姉さん、お前さんが起きて水を飲みに行きなすつた、廊下づたひの歸りがけの姿がこゝへ映つてよく見える。私は寢返もしないで今まで熟と視て居ました。それ其處に、と云ふ枕許の壁に、立姿、島田のもつれた女の顏。此の部屋が又眞暗なんで、兩人ぶる〳〵と絲に成つてしがみついて、其ッ切煩ひついて、姉は亡くなる、妹は氣拔けのやうに成つて了ふ。これがために女郎屋は分散、それから、けちがついて質屋も退轉、居拔きで空屋に成りました。

お嬢さんの前でございますがね。

然うかと思ふと、お妾五千坪の地尻の方にや、一寸小綺麗な雜貨店の、婀娜な評判な嫁さんが、姑にいびり出されて、實家へ歸るとそれから氣が違つて、毎日のやうに、其の雜貨店へ通つて來て……內へ上りやしねえんで……店頭へたゞ腰を掛けて居て、商賣ものの卷莨を箱から拔いちや、一本々々火を點けて表を通りかゝる者に、ポンと投げては、派手な長襦袢で、莞爾々々と笑ふ。」

「まあ。」

「此奴を、それ聞傳へて、見物に行き〳〵するんで、私も自然と、根津の其の邊の地理に明るいわけで……何もあの近所が私の長屋つて譯ぢやございませんのでね。へい。店番をして居る亭主どのが、無くなるとは、一つ〳〵、煙草の箱を出して渡します。何でも、それさへさせて置けば優柔い、でねえと可哀相に手足の折れるほど狂うてえんで、入費は實家持だと言ひますぜ。

佳い婦で、第一拔けるほど色が白い、だらしなく袖口の緋縮緬で火を點けてポンでせう。拾ひましたぜ。こいつの火が消えねえで、其のまゝ吸へると、緣結びに成るんだつて、娘つ子まで騷ぎます。拾ひましたぜ私も、へい。處が、見惚れて居て、つい消しました。お嬢樣の前でございますが。」

お親は手酌で。

「馬鹿だねえ。」

「然うかと思ひますとね、件の雜貨店の軒並びに、醫師の家が有るんですがね、其處で出戻りの娘が居ります。此は小兒が一人あるのに女の方から追出たんで、些と見當が違ひますけれども、其の先の亭主だと云ふ、眦の下つた、髯のショボンと生えたハイカラで、豪い學者だと云ふんですが、學校へ敎へに出た歸途には、大廻りに其の醫師の門まで出向いて來て、洋服の片手に杖、片手に折革鞄を抱へたなりで、一度のそ〳〵と通つて、二度めに大跨に足蹈して、三度めにギク

リと、杭を廻したやうに、もと來た駒込の方へ引返すのがお極りだと言ふのがあります。やがて二年も續いて。——

離れては居ても、變な其の地面の土にかぶれたと見えるんでね、……かぶれたと言へば、別に怪いと言ふわけぢやありませんけれども、其處の寺院の墓地と背合せに、干場の廣いのを持つた紺屋がありますがね、二十三を頭に十六まで、まるで年子かと思ふ粒選りの娘が五人の姉妹。尤も母親と云ふのが名代の容色、皆が別嬪で、それが一人もまだ緣附きません。牡丹、芍藥、百合、菖蒲だ。脊の立つたのは海棠ですかい。衣類も帶も順に揃つて、おんなじ紅絹の糠袋で、ずらりと湯に出掛ける樣子なんざ、これ尋常事と思はれますかい。日髮日風呂で、いや、艶麗なの何のぢやねえ。

評判な內福で、父親どのが、又何の道樂もない、たゞ此の娘たちを夕飯の膳のまはりへぐるりと並べて、一杯飲酒。根津中の羨まれものなんです。が、友染切のおくみ先を張つたやうに、脊たけが順に揃つただけでも唯綺麗だでは濟みますまい、天上からか、海からか、生れかはつたとしか思はれませんや。

いや、話は枝だ。

樹林が目の前に、御天守と五千坪、世間離れた二ケ國だ……扇子の星の劍尖とは言ひながら、

こりや飛んだ處へ曳込んだ、と思ひますと、車を下ろして居ます卵塔前の、此の、其の寺と云ふのが、又容易なわけのもんぢやねえんで。……

澤山以前でもある事か、つい去年夏、賽錢をごまかして此の寺を追出された納所坊主の若い奴が、其を怨恨に、叔母に當る和尙の妾と和尙を殺して、小塚の女郎屋でつかまつて、すぐに御年貢を納めましたが、納所が殺しに入る時、枝を傳つて寢込を窺つたと云ひます、土塀の百日紅の樹に怨念が殘つて、蛇が三疋。」

「蛇が三疋。」

「大小三條。」

「まあ、可厭だ。」

「どれが和尙だか、納所だか、交る〳〵枝から首を出して塀越しに、何のためか知りませんが、逆怨に外の方を視て居るつて評判の……其奴が頸筋の上でがせう。

枝の白いのが提灯の茫とした火の影で、畝つた奴の腹に見えて、幾筋のたつてるか分りません。

わツと云ふと、車を打棄つて、私あ、投飛ばされたやうに宙を舞つて遁げました。

眞個夢中でさ。

藍染川の溝泥に、血を流したやうで居る茶飯の行燈へ飛び込んで、引かけても、飲つても、か

らツきし水のやう、胴震ひが留りません。

五合とたてつけて、漸と口が利けた處で、毛布にくるまつて、とろけた達磨のやうに成つてます、橋詰の夜なし車に仕事を賴むと、五千坪と聞いた以上、一人ぢやあ可厭だと云ふ。仕方がありません、車夫を二人賴んで拋つ放しの空車を引戻しに遣つたんで。

宵に錦町を曳出してから、漸とまあ、落着いて、醬油樽にげんなりと腰を掛込んで、ほつと呼吸をつくと、何と、氣に成ります、茶飯屋の顏色が、一件の婆々の顏で、黃色い風呂敷に見えるのは、花の彌生と云ふのに、親仁め、紋羽の襟卷をして居やあがる。……

川緣のお極りの柳からは、惡くじと〳〵と夜露が垂りまさ……夜も更けました……其奴が、ねばねばとして泥の雨でも降りさうなんで、行燈までが薄汚れて黃色うがす。

でも僥倖と、親仁の雁首がぐるりと背後むきに成つて、ニヤリもしねえで助かり。

漸と底を入れる人心地が着いて、茶飯を誂へる段に成ると、さて人間は慾張つたものでございます、先刻頂戴の大な紙幣だが、木の葉に成りやしねえか知らと、四邊へ氣を配りながら、丼へ手を突込むと、角が切れてヒヤリと來た……麝香とも香水とも、たとへやうのねえのが芬として、勿體ねえが、あの、端麗な奥方の扱帶の端へでも觸りましたやうな心持でございましてね。へい。

お孃樣の前でございますが。

其時に、氣が付きますと、扇を拾つて突込んで居りましたんで、暗夜へ月が出たやうな、何だか、尊い、難有い、嬉い氣がして開けました。

柳が綺麗に、藍染川の流も、さら〳〵と澄んで流れる音がして、星の影が光りましてね……」

——あゝ、前原に、辰馬にこれを聞かせたい。

渠は去年隅田川に朧夜の汐のさす時、照樹夫人を失つて以來、生くるともなく死すともなく、晝は現、夜は夢の、心も幻の世に流轉ひつゝあるのであるから。——

「星あかりとも思ふ明るい扇の面に、恁う、其の五色の、何とも云へない美しい、細い絲のやうな物が、ちら〳〵とついて居ましてね。

——おなじ眞綿の纖毫は、夫人に分れた大川端の畫工の手にも認められた。——

「中でも紫の色が、めしてた奥方が乘うつツて居なさるやうに見えましたんで、恁う、視めて居ますうちに、其處等、ほんのりとして、柳も霞んで、何處かで鶯でも鳴きさうな氣に成りましたつけ。……

いや、何うして、さき樣は足袋跣足だ。

冥加ねえわけですが、こんな人間の鋸屑見たいな野郎にや、張合が無くて罰も當るめえと氣休めに、まあ然う思つてね、醉は出るし、鷄は唄ふし、獨で春めいて來ましたぜ。

處へ、カラ〳〵と饒舌りながら、空車を曳いて、奴どもは戻つて來ました。
から、何やら彼やらで、足腰も利かねえんで、何うです、其の若い衆の一人に曳かせて、手前車で高い處を宙乘りするやうな氣で、淺草まで歸りましたが、夜が明けますと、矢張り何うも、天道樣が可恐え。
五兩ゆすつたばつかりに、飛んだことに成つたと思ひましてね。何處かでお目に掛つたら、其の時勝負に扇を返して、お詫をしようと、まあ其の了簡で、こんな人間でございますが、稼ぎに出ます毎にや忘れずに持つて歩行いて居りますんで。
――まあね、然う云つた次第なんでございますがね。――
其の附いてました綺麗な絲は、段々に、何時となく見えませんでございますよ。しかし氣の所爲か知れませんが、五色の中でも藤色の紫の細い微なのは、其の奥方のめしものが幽に脈を打つやうに……もしまだ、心持殘つて居るかも分りません。――お孃樣……殿樣え、はゝゝはゝ、もしお奉行樣。」
と乘出して、緣からぐいと首を伸ばして――右手にうけて熟と視て我を忘れたやうで居る、お親の扇に、横顔の痣をさし寄せながら、ふと其の左手にうけて唇に當てつゝあつた、滿月の蝕したるが如き、大杯に一驚を吃して叫んだ。

「呀、椀の蓋で、途方もねえ。」
唯瞳も返さず、輕く投げるが如く膳に落した、蒔繪の實の南天の紅は、意氣に煙つて紫に燃えた。
其の手は、雪を欺きつゝ、扇の紺青にも射返されず、瞼は颯と紅を潮した。
「あゝ、北斗の劍が、丁ど今、彼處に向つて……」
眉をあげると園生の薄月。
「私も、此の星の指す處へ行かう。」
と、すらりと立つと、袖は輕く、褄はしつとり、芙蓉の醉。
雨の霽間の薄霧に、更紗のやうな花を重ねて、秋草の影こそ靡け。
「あら、あの向うの垣根の外に、婆さんが一人覗いて居るわ。」
「わツ。」と云ふと、緣の端をずるりと辷つて、恁鐵はべたりと早腰。
「自動車が參りました。」
「お孃樣、お宅樣からお迎でございます。」
お繼が引添ひ、今度は更めて女房が、頸の手拭をはづして出た。

「何うして？」
「否、先刻の御隠居の何ぢやございません。お連れ遊ばしたお供はこんなに醉つて居りますし、夜分には成ります。かた〳〵一寸電話をお掛け申したのでございます。」と、女房が揉手で云ふ。
其處へ眉を剃つた小さな圓髷の年配なのが、整然とした形で出たのは乳母で、
「此は皆様お世話様でございます。おや、お親様、御機嫌で。」と莞爾やかに顔を見る。
「御機嫌ぢやないわ。何だつて迎になんぞ……迎ひと云ふのは人間の催促だわ。和女に借金が有るやうだわ。」
「まあ、聞いて下さいまし、誰方も、あんな憎らしい事をおつしやるんでございますよ。ほゝゝ、……お迎ひではございません、乳母もお相伴に參つたのでございます。」
「何しろ、お上りなさいましな。」
と、お繼が言ふのだが、お親は縁に立つて此の寄手を一人で遮るやうに屹として居るのである。
「何、最う私歸るんだよ。」
「では直ぐお供をいたしますから。」
「一人かい、乳母。」
「長松どんが參つて居ります。」

「丁どいゝわ。あの兒は、そんな事はうまいからね、然う云つて手傳はせてね、向うの庭の生垣を、私の身體の出られるだけ、一小間竹を抜かせて頂戴。」
「えゝ。」と云つたが、傍の者ほど、乳母はさして驚かなかつた。
「あとでね、此のうちへお詫をして。それから車夫さんに澤山お金を上げておくれ。此のお扇子を私が讓つて貰つたから。」
「代、お代どころぢやありません、私は荷が拔けますんで。」と言ひながら恁鐵は目ばかり、きよろつく。
「お親様、貴女はそして……」
「あゝ田圃でも、畦でも、川が有れば船に乘るし、船が無ければ筏を組むし、ねえお前、思ふ人に添へないんだもの、此のくらゐの我儘をしなくつちや……」
「何でございます！」
と、乳母は一寸左右を視つゝ、
「お身體を何うなさいます。」
「私のやうな、身體も心も清い處女は、惜いから、怪我なんかおさせなさりやしない、氏神様がお守りだもの。」